昭和五年十月七日印刷
昭和五年十月十日發行

有朋堂文庫
古今集・後撰集（非賣品）

不許複製

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦捷一

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　有朋堂印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

後撰和歌集索引　終

ヰ

ヒ

ナ

ツ

テ

ト

チ

サ

ク

ケ

キ

カ

エ

オ

ウ

イ

下句七言

ア

ヱ

ヲ

ワ

へ

ホ

ひぐらしの(聲きくから)　二五九ノ四
ひぐらしの(聲きく山の)　二五九ノ三
ひぐらしの(聲も)　二八六ノ一
ひぐらしの(聲を)　四三五ノ二
ひぐらしの(山路)　四八九ノ一
ひこぼしの　二五六ノ一
ひさしかれ　二二六ノ二
ひさしくも　三三一ノ四
ひたすらに　三六三ノ一
ひたぶるに　三六六ノ六
ひとごころ(あらし)　四七二ノ四
ひとごころ(いさや)　四四一ノ一
ひとごころ(うさ)　二一五ノ三
ひとごころ(たとへ)　四六九ノ一
ひとごとに　四九〇ノ一
ひとごとの(うき)　三八五ノ三
ひとごとの(頼み)　三九二ノ二
ひとごとは　三〇三ノ五
ひとこふる(心)　三〇二ノ一
ひとこふる(涙)　三〇七ノ四
ひとしれず(思ふ)　三一五ノ一
ひとしれず(君に)　二九四ノ三
ひとしれず(まつ)　四一一ノ三
ひとしれず(物思ふ)　三八三ノ二
ひとしれず(我が)　二四九ノ三
ひとしれぬ(身は)　三四五ノ四
ひとしれぬ(我が)　三五二ノ一
ひとすまず　二九三ノ四
ひたすらに　二七八ノ二
ひとづてに　三三四ノ三
ひとづまに　三三四ノ五
ひととせに(かさなる)　二二九ノ四
ひととせに(ふたたび)　二三三ノ五
ひとなみに　四一七ノ六
ひとにつぐ　四四八ノ三
ひとのうへの　三一四ノ五
ひとのおやの　四二七ノ三
ひとのよの　四九八ノ六
ひとはいさ(ことぞ)　二六五ノ三
ひとはいさ(みやま)　三九三ノ六
ひとはいさ(我は)　三二四ノ二
ひとはかる　三九二ノ三
ひとふしに　四四八ノ二
ひとめだに　四六七ノ三
ひとよのみ　二三六ノ五
ひとりぬる(時は)　三八二ノ一
ひとりぬる(人の)　二九一ノ五
ひとりねの　三三四ノ一
ひとりのみ(思へば)　三一七ノ二
ひとりのみ(戀ふれば)　三三五ノ二
ひとりのみ(ながめて)　四三二ノ三
ひとりゆく　五〇〇ノ二
ひとりゐて　二四五ノ五
ひとわたす　四三二ノ一
ひとをのみ　三九〇ノ二
ひとをみて　三一七ノ一
ひるなれや　四二七ノ一
ひをへても　三六七ノ三

フ

ふえたけの　三九四ノ三
ふかきおもひ　四七一ノ二
ふかくおもひ　三九〇ノ一

ス

サ

シ

キ

カ

エ

オ

ウ

イ

後撰和歌集索引

（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

古今和歌集索引 終

チ

ツ

テ

ト

ナ

サ

シ

ス

セ

ソ

ク

ケ

コ

キ

うゑけむきみが	二三ノ四
うゑけむひとの	五一ノ二

エ

えだもたわわに	三八ノ七

オ

おいすばけふに	一六三ノ二
おいせぬあきの	四八ノ一
おいにけらしな	一六七ノ三
おきてしゆけば	六九ノ二
おきてわかれし	一一五ノ一
おきひむときや	八九ノ五
おきふしよるは	二〇八ノ二
おきまどはせる	四九ノ四
おきゐてものを	一八〇ノ二
おくしらつゆの	八六ノ一
おくとはなげき	九四ノ四
おくれむとおもふ	一九五ノ八
おけるくさばも	八五ノ二
おちてもみづの	一五ノ二
おつとはみれど	一六八ノ一
おつるもみぢの	五一ノ六
おとにきゝつゝ	九三ノ五
おとにぞひとを	一二二ノ二
おとにはたてじ	九四ノ一〇
おとにもひとの	一三五ノ九
おとにやあきを	四四ノ三
おなじこゝろに	九八ノ一
おなじひとにや	一三九ノ三
おのがきぬぎぬ	一二四ノ三
おのがすむのの	四〇ノ四
おのがものから	一三〇ノ二
おほかるのべに	四一ノ二
おぼつかなくも	五ノ七
おもかげにのみ	二〇五ノ一
おもはぬかたに	一二六ノ二
おもはぬなかぞ	一三六ノ五
おもはぬひとを	九七ノ四
おもはむひとに	七〇ノ四
おもひいづるぞ	一二五ノ三
おもひくらしの	一三八ノ八
おもひしこゝろ	二二八ノ一
おもひしらずも(解くる)	一四三ノ一
(まどふ)	八四ノ四
おもひそめてむ	一三二ノ七
おもひたちぬる	六九ノ三
おもひたはれむ	四二ノ六
おもひづきせぬ	一六九ノ三
おもひのいろの	一九二ノ七
おもひのみこそ	九二ノ五
おもひはかけじ	四五ノ一
おもひはなれぬ	一七〇ノ三
おもひみだれて	九六ノ八
おもひやれども	九四ノ六
おもふてふこと	九七ノ一
おもふなかをば	二二四ノ七
おもふはやまの	三六ノ三
おもふひとこそ	一七三ノ三
おもへどえこそ	一二五ノ四

カ

かがみにみゆる	一四三ノ七

イ

ヲ

下句七言

ア

ユ

ヨ

キ

ク

カ

エ

オ

ウ

イ

古今和歌集索引

（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　貫　之

戀ふるまに年のくれなばなき人の別やいとどとほくなりなむ

後撰和歌集終

時のまもなぐさめつらむ覺めぬまは夢にだに見ぬ我ぞ悲しき

かへし　大輔

悲しさの慰むべくもあらざりつ夢のうちにもゆめと見ゆれば

在原としはるがみまかりにけるを聞きて　伊勢

かけてだに我が身の上と思ひきやこむとし春の花を見じとは

一つがひ侍りける鶴の一つがなくなりにければとまれるがいたくなき侍りければ雨のふり侍りけるに

なく聲にそへて涙はのぼらねどくものうへより雨とふるらむ

妻のみまかりての年のしはすのつごもりの日ふるごといひ侍りけるに　藤原兼輔朝臣

なき人の共にしかへる年ならば暮れゆく今日は嬉しからまし

いでによみ侍りける　清正

君がいにし方やいづれぞ白雲のぬしなき宿と見るぞかなしき

親のわざしに寺にまうできたりけるを聞きつけて諸共にまうでましものをと人のいひければ　讀人しらず

わび人のたもとに君がうつりせば藤の花とぞいろは見えまし

かへし

よそにをる袖だにひぢし藤衣なみだに花も見えずぞあらまし

題しらず　伊勢

程もなく誰も後れぬ世なれどもとまるは行くを悲しとぞ見る

人をなくなして限なく戀ひて思ひいりて寐たる夜の夢にみえければ思ひける人にかくなむと言ひ遣したりければ　立上朝臣女

君まさで年はへぬれど故郷につきせぬものはなみだなりけり

人のとぶらひにまうできたりけるに早くなくなりにきといひ侍りければ楓の紅葉にかきつけ侍りける　　戒仙法師

過ぎにける人を秋しもとふからに袖はもみぢの色にこそなれ

なくなりて侍りける人のいみにこもりて侍りけるに雨のふる日人のとひて侍りければ　　讀人しらず

袖かわく時なかりける我が身にはふるを雨とも（日イ）思はざりけり

人のいみはててもと（まちイ）の家にかへりけるに

故郷にきみはいづらと人とはばいづれのそらの霞といはまし

敦忠朝臣みまかりて又の年かの朝臣の小野なる家みむとてこれかれまかりて物語し侍りけるつ

音にたてゝなかぬ日はなし鶯のむかしの春をおもひやりつゝ　　　玄上朝臣女

同じ年の秋

もろともにおきゐし秋の露ばかりかゝらむ物と思ひかけきや

清正が枇杷大臣のいみにこもりて侍りけるにつ

かはしける　　　藤原守文

世の中のかなしきことをきくのうへにおく白露ぞ涙なりける（命イ）

かへし　　　清正

きくにだに露けかるらむ人のよをめにみし袖を思ひやらなむ

兼輔朝臣なくなりて後土佐の國よりまかりのぼ

りて彼の粟田の家にて　　　貫之

植ゑおきし二葉の松はありながら君がちとせのなきぞ悲しき

そのついでにかしこなる人

なき人のかけだに見えぬやり水のそこに涙をながしてぞこし

大和に侍りける母みまかりて後かの國へまかるとて

ひとりゆく事こそうけれ故郷のならのならびて見し人もなみ

法皇の御ぶくなりける時にび色のさいでに書きて人におくり侍りける　京極御息所

墨染のこきもうすきも見るときは重ねて物ぞかなしかりける

女四のみこのかくれ侍りにける時　右大臣

きのふまで千世と契りし君をわがしでの山路に尋ぬべきかな

先坊うせ給ひての春大輔につかはしける　玄上朝臣女

あらたまのとし越えくらしつねもなき初鶯のねにぞなかるる

かへし　大輔

女のみまかりて後すみ侍りける所の壁に彼の侍りける時書きつけて侍りける手を見て　兼輔朝臣

寐ぬゆめに昔のかべを見てしよりうつつに物ぞ悲しかりける

あひしりて侍りける女のみまかりにけるを戀ひ侍りけるあひだに夜ふけてをしの鳴きければ　閑院左大臣

ゆふぐされればれは音になく鴛のひとりして妻ごひすなる聲の悲しきさィ

七月ばかりに左大臣の母みまかりにける時におもひに侍りけるあひだ后の宮より萩の花を折りて給へりければ　太政大臣

女郎花かれにし野邊にすむ人はまづさく花をまたでともみず

なくなりにける人の家にまかりてかへりてのあしたにかしこなる人に遣しける　伊勢

結びおきし種ならねども見るからにいとど忍の草をつむかな

女四のみこの事とぶらひ侍るとて　伊勢

こころ世をきくがなかにも悲しきは人の涙もつきやしぬらむ

かへし　讀人しらず

聞くひとも哀てふなるわかれにはいとど涙ぞつきせざりける

先帝おはしまさでの又の年の正月一日に送り侍りける　三條右大臣

いたづらに今日や暮れなむ新しきはるのはじめは昔ながらに

かへし　兼輔朝臣

なく涙ふりにしとしの衣手はあたらしきにもかはらざりけり

かさねて遣しける　三條右大臣

人の世のおもひにかなふ物ならば我が身は君に後れましやは

先帝おはしまさで世の中を思ひ嘆きて遣しける　三條右大臣

はかなくて世にふるよりは山階(やましな)の宮の草木とならましものを

かへし　兼輔朝臣

山階の宮のくさきと君ならばわれはしづくに濡るばかりなり

時望朝臣みまかりて後はてのころ近くなりて人のもとよりいかに思ふらむといひおこせたりければ　時望朝臣妻

別れにしほどをはてともおもほえず戀しきことの限なければ

女四のみこの文の侍りけるに書きつけて内侍のかみにおくり侍りける　右大臣

種もなき花だにちらぬ宿もあるに(なイ)などか形見のこだになからむ

かへし　内侍のかみ

十二月ばかりにかうぶりする所にて　貫之

祝ふ事ありとなるべし今日なれど年のこなたに春もきにけり

哀傷歌

敦敏が身まかりにけるをまだ聞かであづまより馬を送りて侍りければ　左大臣

まだしらぬ人もありけり東路に我も行きてぞ住むべかりける

兄のぶくにて一條にまかりて　太政大臣

春の夜の夢のうちにもおもひきや君なき宿をゆきて見むとはかへし

宿みればねてもさめてもこひしくて夢現ともわかれざりけり

今上梅壺におはしましし時たき木こらせて奉り
給ひける

山人のこれるたき木は君がためおほくの年をつまむとぞ思ふ

御かへし　　御製

年の數つまむとすなる重荷にはいとど小附をこりもそへなむ

東宮の御前にくれ竹うゑさせたまひけるに　　清正

君がためうつして植うる吳竹にちよもこもれる心地こそすれ

院の殿上にて宮の御かたより碁盤いださせ給ひ

けるごいしのふたに　　命婦淸子

斧の柄のくちむもしらず君が代のつきむ限はうちこころみよ

西四條のみこの家の山にて女四のみこのもとに　　右大臣

なみたてる松の緣の枝わかずをりつつ千代をたれとかは見む

年星おこなふとて女檀越のもとよりずずをかりて侍りければ加へてつかはしける　惟濟法師

百年にやそとせそへていのりける玉のしるしを君みざらめや

左大臣の家にけふそく心ざしおくるとてくはへける　僧都仁斅

けふそくをおさへてまさへ萬世にはなのさかりを心しづかに

今上帥のみこと聞えし時太政大臣の家にわたりおはしまして歸らせたまふ御おくりものに御本奉るとて　太政大臣

君がため祝ふ心のふかければひじりの御代のあとならへとぞ

御かへし　今上御製

敎へおくことたがはずば行末の道とほくともあとはまどはじ

章明親王かうぶりしける日あそびし侍りけるに

右大臣かれこれ歌よませ侍りけるに　　貫　之

琴の音も竹もちとせのこゑするは人のおもひも通ふなりけり

賀のやうなる事し侍りけるところにて　　讀人しらず

百年と祝ふをわれは聞きながら思ふが爲はあかずぞありける

左大臣の家のをのこ子をんな子かうぶりし裳著

侍りけるに　　貫　之

大原やをしほのやまの小松原はや木だかかれ千世のかげみむ

人のかうぶりする所にて藤の花をかざして　　讀人しらず

うちよする波の花こそ咲きにけれ千世まつ風や春になるらむ

女の許につかはしける

君がため松の千年も盡きぬべしこれよりまさむ神のよもがな

後撰和歌集　巻第二十

慶賀歌

女八のみこ元良のみこのために四十の賀し侍りけるに菊の花をかざしに折りて　藤原伊衡朝臣

萬代のしもにもかれぬ白菊をうしろやすくもかざしつるかな

典侍あきらけいこ父の宰相のために賀し侍りけるに玄朝法師の裳唐衣ぬひて遣しければ　典侍あきらけいこ

雲わくるあまの羽衣うちきては君がちとせにあはざらめやは

題しらず　太政大臣

今年より若菜にそへて老の世に嬉しきことをつまむばかり　とぞ思ふイ

草枕ゆふ手ばかりは(のイ)なになれや露もなみだもおきかへりつつ

宮の瀧といふ所に法皇おはしましたりけるにお
ほせごとありて　　素性法師

秋山にまどふ心をみやたきの瀧のしらあわに消(セ)ちやはててむ

法皇遠き所に山ぶみし給ひて京に歸り給ふに旅のやどりし給うて御供にさぶらふ道俗に歌よませ給ひけるに　僧正聖寶

人ごとにけふけふとのみ戀ひらるる都近くもなりにけるかな

土佐より任はててのぼり侍りけるに船の中にて月を見て　貫之

照る月の流るる見れば天の川いづるみなとは海にぞありける

題しらず　亭子院御製

くさまくら紅葉むしろにかへたらば心をくだく物ならましや

京に思ふ人侍りて遠き所よりかへりまうで來ける道にとどまりて九月ばかりに　讀人しらず

思ふ人ありて歸ればいつしかのつま待つよひの秋ぞかなしき

日ぐらしの山路を暗み小夜ふけて木の末ごとに紅葉てらせる

初瀬へ詣づとて山のべといふわたりにてよみ侍りける　　伊勢

くさまくら旅となりなば山のべに白雲ならぬわれややどらむ

宇治殿といふ所を

水もせにうきたるときは柵(しがらみ)のうちのとのとも見えぬもみぢ葉

海のほとりにてこれかれ逍遙し侍りけるついでに　　小町

花さきて實ならぬものはわたつみのかざしにさせる沖つ白波

東(あづま)なる人の許へまかりける道に相摸の足柄の關にて女の京にまかり上りけるにあひて　　眞静法師

足柄の關のやまぢを行く人はしるも知らぬもうとからぬかな

ればニ三日侍りてやむことなき事によりてまかり立ちければきぬを包みてそれが上にかきて送り侍りける　中原宗興

山里の草葉の露はしげからむみのしろころも縫はずともきよ

土佐よりまかりのぼりける船のうちにて見侍りけるに山の端ならで月の波の中より出づるやうに見えければ昔安倍仲麿がもろこしにてふりさけみればといへる事をおもひやりて　貫之

みやこにて山の端にみし月なれど海より出でて海にこそいれ

法皇宮の瀧といふ所御覽じける御供にて　菅原右大臣

みづひきの白糸はへて織るはたを旅のころもにたちや重ねむ

道まかりける序にひぐらしの山をまかり侍りて

瀬川を渡るとてよみ侍りける　讀人しらず

泊瀬川わたる瀬さへや濁るらむ世にすみ難き我が身と思へば

たはれ島をみて

名にしおはばあだにぞ思ふたはれ島波の濡衣いく世きぬらむ

東の方へまかりけるに過ぎぬるかた戀しく覺え
ける程に川を渡りけるに波の立ちけるを見て　業平朝臣

いとどしく過ぎ行くかたのこひしきに羨しくもかへる波かな

白山へまうでけるに道中よりたよりの人につけ
て遣しける　讀人しらず

みやこまで音にふりくる白山はゆきつきがたき雲井なりけり

中原宗興が美濃國へまかり下り侍りける道に女
の家に宿りていひつきてさりがたく覺え侍りけ

おくれずぞ心にのりてこがるべき波にもとめよ船みえずとも

かへし　讀人しらず

船なくば天の川までもとめてむ漕ぎつつ汐のなかにきえずば

船にて物へまかりける人

かねてより涙ぞ袖をうちぬらす浮べる船にのらむとおもへば

かへし　伊勢

おさへつつ我は袖にぞせきとむる船こす汐になさじと思へば

遠き所にまかるとて女の許につかはしける　貫之

忘れじとことに結びて別るれば逢ひみむまでは思ひみだるな

羇旅歌

ある人いやしき名とりて遠江國へまかるとて泊

待ちわびて戀しくならばたづぬべく跡なき水の上ならで行け（波イ）

題しらず　贈太政大臣

來むといひて別るるだにもある物をしられぬ今朝のまして佗しき

かへし　伊勢

さらばよと別れしときにいはませば我も涙におほほれなまし

讀人しらず

春霞はかなく立ちてわかるとも風よりほかにたれか訪ふべき

かへし　伊勢

めに見えぬかぜに心をたぐへつつやらば霞のわかれこそせめ（へだてイ）

甲斐へまかりける人につかはしける

きみが代はつるの郡にあえてきね定（さだめ）なき世のうたがひもなく

船にて物へまかりける人に遣しける

あひしりて侍りける人のあからさまに越の國へ
まかりけるに幣（ぬさ）こころざすとて　　讀人しらず

我をのみ思ひつるがのこしならばかへるの山は惑（まど）はざらまし

かへし

君をのみいつはたと思ひこしなれば往來（ゆき）の道は遙けからじを

秋旅にまかりける人に幣をもみぢの枝につけて
つかはしける

秋ふかく旅ゆく人のたむけにはもみぢにまさる幣（ぬさ）はなかりき

西四條の齋宮の九月晦日くだり侍りけるともな
る人にぬさ遣すとて　　大輔

紅葉（もみぢは）を幣とちらしてたむけつつ秋とともにや行かむとすらむ

物へまかりける人に遣しける　　伊勢

友則がむすめのみちのくへまかりけるにつかはしける　　滋幹が女

君をのみしのぶの里へ行くものをさひづの山の遥けきやなぞ

つくしへまかるとていさきよいこの命婦におくりはべりける　　小野好古朝臣

年をへておひみる人のわかれぢは惜しきものこそ命なりけれ

出羽よりのぼりけるにこれかれむまのはなむけしけるにかはらけとりて　　源済

行くさきを知らぬ涙の悲しきは唯めのまへに落つるなりけり

平高遠がいやしき名とりて人の國へまかりけるに忘るなといへりければ高遠が妻のいへる

忘るなといふにながるる涙川うき名をすすぐ瀬ともならなむ

いかでなほ笠取山に身をなして露けきたびに添はむとぞ思ふ

かへし

笠とりの山とたのみし君をおきて涙のあめにぬれつつぞ行く

をとこの伊勢の國へまかりけるに

きみが行くかたにありてふ涙川まづは袖にぞながるべらなる

旅にまかりける人に裝束つかはすとて添へて遣しける

袖ぬれてわかれはすとも唐衣ゆくとな言ひそきたりとを見む

かへし

わかれぢは心もゆかずからころもきればなみだぞさきにたちける

旅にまかりける人に扇つかはすとて

そへてやる扇の風し心あらばわがおもふ人の手をなはなれそ

そむかれぬ松の千年の程よりもともどもとだに慕はれぞせし

ともども慕ふ涙のそふ水はいかなるいろに見えて行くらむ

亭子院のみかどおりゐ給うける年の秋弘徽殿の

かべに書きつけける　　伊勢

別るれどあひもをしまぬ百敷を見ざらむことやなにか悲しき

帝御覧じて（御かへしイ）

身一つにあらぬばかりをおしなべて行き廻りてもなどか見ざらむ

みちのくにへまかりける人に扇調じて歌給に書

かせ侍りける　　讀人しらず

別れゆく道のくもゐになりゆけばとまる心もそらにこそなれ

宗于の朝臣のむすめみちのくにへ下りけるに

初雁のわれもそらなる程なれば君もものうき旅にやあるらむ

あひしりて　りける女の人の國にまかりけるに

つかはしける　公忠朝臣

いとせめて戀しきたびの唐ころも程なくかへす人もあらなむ

かへし　女

唐衣たつ日をよそにきく人はかへすばかりのほども戀ひじを

三月ばかりに越の國へまかりける人に酒たうべ

けるついでに　讀人しらず

戀しくばことづてもせむ歸るさの雁がねはまづ我が宿になけ

善祐法師伊豆の國に流され侍りけるに　伊勢

別れてはいつあひ見むと思ふらむかぎりある世の命ともなし

題しらず　讀人しらず

にかきてとらする名をば馬といひけるに

をしと思ふ心はなくてこのたびは行く馬に鞭をおほせつる哉

かへし

君が手をかれゆく秋のすゑにしも野飼にはなつ馬ぞかなしき

同じ家に久しう侍りける女の美濃の國に親侍り

けるとぶらひにまかりけるに　藤原清正

今はとて立ちかへりゆくふるさとの不破の關屋に都わするな

遠き所にまかりける人に旅の具つかはしける鏡

の箱のうらに書きつけて遣しける　大窪則善

身をわくることの難さにます鏡かげばかりをぞ君にそへつる

このたびのいでたちなむ物うく覺ゆるといひけ

れば　讀人しらず

下野にまかりける女に鏡にそへてつかはしける　讀人しらず

ふたご山ともに越えねどます鏡そこなる影をたぐへてぞやる

信濃へまかりける人にたきもの遣すとて　するが

信濃なるあさまの山も燃ゆなればふじの煙のかひやなからむ

遠き所へまかりける友達に火うちにそへて遣しける　讀人しらず

このたびも我を忘れぬ物ならばうちみむたびに思ひ出でなむ

京に侍りける女子をいかなる事か侍りけむ心うしとて留め置きて因幡國へまかりければ　むすめ

うちすてて君しいなばの露の身は消えぬばかりぞありと頼むな

伊勢へまかりける人とくいなむと心もとながると聞きて旅の調度などとらする物からたたう紙

後撰和歌集　巻第十九

離別歌

みちのくにへまかりける人に火うちを遣すとて
書きつけける　　貫之

をりをりにうちてたく火の煙あらば心さすがを忍べとぞ思ふ
あひ知りて侍りける人の東(あづま)の方へまかりけるに
櫻の花のかたに幣(ぬさ)をさして遣しける　　讀人しらず

あだ人の手向(たむけ)にをれる櫻花あふさかまでは散らずもあらなむ
遠くまかりける人に餞(はなむけ)し侍りける時にて　　橘直幹

思ひやるこころばかりはさはらじを何へだつらむみねの白雲

神無月のついたち頃妻のみそか男したりけるを見つけいひてなどしてつとめて　　讀人しらず

今はとてあき果てられし身なれども霧たつ人をえやは忘るる

十月ばかり昔面白かりし所なればとて北山のほとりにこれかれ遊び侍りけるついでに　　兼輔朝臣

思ひ出てきつるもしるくもみぢ葉の色は昔にかはらざりけり

おなじ心を　　坂上是則

峰高み行きても見べきもみぢ葉を我がゐながらも挿しつる哉

しはすばかりにあづまよりまうできける男の許より京にあひ知りて侍りける女の許に正月ついたちまで音づれず侍りければ　　讀人しらず

待つ人はきぬと聞けどもあらたまの年のみ越ゆるあふ坂の關

題しらず　　讀人しらず

譬へくる露と等（ひと）しき身にしあれば我が思ひにも消えむとやする

つらかりける男のはらからのもとに遣しける

ささがにの空にすがける糸よりも心細しや絶えぬとおもへば

かへし

風ふけば絶えぬと見ゆる蜘（くも）の糸（い）も又かきつかでやむとやはきく

伏見といふ處にて

名に立ててふしみの里といふ事は紅葉を床にしけばなりけり

題しらず　　均子内親王

我もおもふ人も忘るなありそ海のうら吹く風のやむ時もなく

山田法師

あしびきの山下とよみなく鳥もわがごとたえず物思ふらめや（物は思はじィ）

左大臣のかかせ侍りけるさうしのおくに書きつけ侍りける　貫之

柞(ははそ)山みねのあらしの風をいたみふる言の葉をかきぞあつむる

題しらず　小町があね

世の中を厭ひてあまの住むかたもうきめのみこそ見え渡りけれ

昔あひ知りて侍りける人のうちに侍ひけるがもとに遣しける　伊勢

山川のおとにのみきく百敷(ももしき)をみをはやながら見るよしもがな

人に忘られたりと聞く女のもとに遣しける　讀人しらず

世の中はいかにやいかに風の音をきくにも今はものや悲しき

かへし　伊勢

世の中はいさともいさや風の音は秋にあきそふ心地こそすれ

ある法師の源等朝臣の家にまかりてすゞのすがりをおとしおけるを朝におくるとて

うたたねの床にとまれる白玉は君がおきつる露にやあるらむ

かへし

かひもなき草の枕におく露のなにに消えなで落ちとまるらむ

題しらず

思ひやる方もしられずくるしきは心まどひの常にやあるらむ

昔を思ひ出でてむら子の内侍につかはしける　左大臣

鈴虫におとらぬ音こそなかれけれ昔のあきをおもひやりつつ

ひとり侍りけるころ人の許よりいかにぞととぶらひて侍りければ朝顔の花につけて遣しける　読人しらず

ゆふぐれの淋しきものは朝顔の花をたのめる宿にぞありける

伊勢が亭子院にまゐりてさぶらひけるに御とき
のおろしたまはせたりければ
伊勢の海に年へて住みし蜑なれどかかるみるめは潛かざりしを
粟田の家にて人に遣しける　兼輔朝臣
あしびきの山のやどりのかひもなし峯の白雲たちしよらねば
（やまどりイ）
左大臣の家にてかれこれ題をさぐりて歌よみけ
るに露といふ文字をえ侍りて　藤原忠國
われならぬ草葉もものはおもひけり袖よりほかにおける白露
人のもとに遣しける　伊勢
人心あらしのかぜのさむければこのめもみえず枝ぞしをるる
こと人をあひかたらふと聞きてつかはしける　讀人しらず
うきながら人を忘れむことかたみ我が心こそかはらざりけれ

移ろはぬ名に流れたる河竹のい（はイ）づれのよにかあきを知るべき

題しらず　　贈太政大臣

深き（くイ）思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる

かへし　　伊勢

心なき身は草木（葉イ）にもあらなくにあきくる風にうたがはるらむ

題（きイ）しらず

身のうさを知ればはしたになりぬべみ思（しイ）へば胸の焦れのみする

讀人しらず

雲路をもしらぬわれさへ諸聲（もろごゑ）にけふはかりとぞなき歸りぬる

まだきからおもひこき色にそめむとや若紫のねをたづぬらむ

伊勢

見えもせぬ深き心をかたりては人にかちぬとおもふものかは

題しらず

涙のみしる身のうさもかたるべくなげく心をまくらと（にイ）もがな

物思ひける頃　伊勢

あひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるるがほなる

ある所にて簾（す）のまへにかれこれ物語し侍りけるを聞きてうちより女の聲にてあやしく物のあはれしりがほなる翁かなといふを聞きて　貫之

哀てふ事にしるしはなけれども言はではえこそあらぬ物なれ

女友だちの常にいひかはしけるを久しう音づれざりければ十月（かみなづき）ばかりにあだ人の思ふといひし言の葉はといふ古ごとをいひ遣したりければ竹の葉にかきつけてつかはしける　讀人しらず

人心たとへて見ればしらつゆの消ゆるまもなほ久しかりけり

世の中といひつる物は陽炎のあるかなきかの程にぞ有りける

友達に侍りける女年久しく頼みて侍りける男に

とはれず侍りければもろともに歎きて

かくばかりわかれのやすき世の中に常と頼める我ぞはかなき

つねになき名立ち侍りければ　伊勢

塵にたつ我が名きよめむもろしきの人の心をまくらともがな

あだ名たちていひ騷がれける頃ほのかに聞きて

あはれいかにとぞとひ侍りければ　小町がむまご

憂き事を忍ぶるあめのしたにしてわれ濡衣はほせどかわかず

隣なりける琴をかりて返す序に　讀人しらず

あふ事のかたみの聲の高ければわがなくねとも人はきかなむ

しけるといひつかはしける　　女の母

今こむといひしばかりを命にてまつに消ぬべしさくさめのとじ

かへし　　　　　むこ

數ならぬ身のみ物うく思ほえて待たるるまでもなりにける哉

常にまうでくとてうるさがりて隱れければ遣し

ける　　　讀人しらず

ありときく音羽の山のほととぎす何かくるらむなく聲はして

物にこもりたるにしりたる人のつほねならべて

正月おこなひていづる曉にいときたなげなるし

たうづを落したりけるを取りて遣すとて

あしのうらのいときたなくも見ゆる哉波は寄せても洗はざりけり

題しらず

ひまつにまうできながら訪はざりければ

いつしかとまつちのやまの櫻花まちてもよそにきくが悲しさ（きイ）

題しらず　伊勢

いせ渡る川し袖より流る（はイ）ればとふにとはれぬ身は浮きぬめり

北邊左大臣

人めだに見えぬ山路にたつ雲をたれすみがまの煙といふらむ

をとこの人にもあまた問へわれやあだなる心あるといへりければ　伊勢

あすかがは淵瀬にかはる心とはみなかみしもの人もいふめり（なイ）

人のむこの今まうでこむといひてまかりにける（が文おこする人ありと聞きて久しうまうでこざ）りければあとうがたりの心をとりてかくなむ申

いひ侍りければ

陸奥のをぶちの駒も野飼ふには荒れこそまされなつく物かは

少將にて內にさぶらひける時あひしりたりける女藏人(にょくらうど)のざうしにつぼやなぐひおいかけを宿し置きて遠き所にまかり侍りけりこの女の許より此のおいかけをおこせてあはれなる事などいひて侍りける返事に

源善朝臣

いづくとて尋ねきつらむ玉かづらわれは昔のわれならなくに

たよりにつきて人の國のかたに侍りて京に久しうまかりのぼらざりける時に友だちに遣しける　讀人しらず

朝ごとにみし都路の絕えぬればことあやまりにとふ人もなし

遠き國に侍りける人を京に上(のぼ)りたりと聞きてあゝ

後撰和歌集　巻第十八

雑歌四

蛙を聞きて　　讀人しらず

我が宿にあひやどりして鳴く蛙よる（とイ）になればや物はかなしき

人々あまたしりて侍りける女のもとに友達のもとよりこの頃は思ひ定めたるなめり頼しき事なりとたはぶれおこせて侍りければ

玉江こぐ蘆刈りをぶねさし分けて誰をたれとか我はさだめむ

男のはじめいかに思へる様にか有りけむ女のけしきも解けぬを見てあやしく思はぬ様なる事と

ながらへば人の心もみるべきに露のいのちぞかなしかりける

人の許より久しう心地わづらひてほとほと死ぬべくなむ有りつるといひて侍りければ　閑院大君

諸共にいざとはいはでしでのやまいかでか獨こえむとはせし

月夜にかれこれして　上野岑雄

おしなべて峰もたひらに成りななむ山のはなくば月も隱れじ

ふしみといふ所にて其の心をこれかれよみける　讀人しらず

すがはらや伏見のくれに見渡せば霞にまがふをはつせのやま

題しらず

言の葉もなくてすぎぬる年月にこの春だにもはな咲かなむ

身のうれへ侍りける時津の國にまかりて住みはじめ侍りけるに　業平朝臣

難波津をけふこそみつの浦ごとにこれやこのよをうみ渡る船

時にあはずして身を恨みてこもり侍りける時　文屋康秀

白雲のきやどるみねの小松原えだしげけれや日のひかり見ぬ

心にもあらぬ事をいふ頃男の扇にかきつけ侍りける　土佐

身にさむくあらぬものから佗しきは人の心のあらしなりけり

山ぶみしはじめける時　僧正遍昭

今さらに我は歸らじ瀧見つつよべど聞かずと問はばこたへよ

題しらず　讀人しらず

つせのうづまき毎にとめくれどなほ尋ねくるよのうきめ哉

はじめて頭おろし侍りける時物にかきつけ侍りける　遍昭

垂乳女はかかれとてしもうば玉の我が黑髮をなでずやありけむ

みちのくにの守にまかり下れりけるにたけくまの松の枯れて侍りけるを見て小松を植ゑつかせ侍りて任はてて後又同じ國にまかりなりて前の任に植ゑし松を見て　藤原元善朝臣

植ゑし時契りやしけむたけくまの松をふたたびあひ見つる哉

を聞きつけてかうじせられ侍りけるを月日へて隱れ渡りけれど雨降りてえまかり出で侍らで籠りる侍りけるを父母聞きつけていかがはせむずるとてゆるす由いひて侍りければ

下にのみはひわたりつる蘆の根の嬉しき雨にあらはるるかな

人の家にまかりたりけるに遣水に瀧いと面白かりければ歸りてつかはしける

瀧つ瀬にたれしら玉をみだりけむ拾ふとせしに袖ぞひぢにき

法皇吉野の瀧御覽じける御ともにて　　源昇朝臣

いつのまに降り積るらむみ吉野の山のかひより崩れ落つる雪

法皇御製

宮の瀧むべも名におひて聞えけり落つる白沫の玉とひびけば

きらのみこの許より一木こひに遣したれば加へてつかはしける　眞延法師

風霜に色もこころもかはらねばあるじに似たる植木なりけり

かへし　行明親王

山深みあるじに似たる植木をば見えぬ色とぞいふべかりける

大井なる所にて人々酒たうべけるついでに　業平朝臣

大井川うかべる船のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり

題しらず　讀人しらず

飛鳥川わが身ひとつの淵瀬ゆゑなべての世をもうらみつる哉

思ふ事侍りける頃志賀にまうでて

世の中を厭ひがてらにこしかども憂身ながらの山にぞ有りける

父母侍りける人のむすめに忍びて通ひ侍りける

つと聞きしはまことなりといへりければ　讀人しらず

縁なるまつほど過ぎばいかでかは下葉ばかりも紅葉せざらむ

故女四のみこの後のわざせむとて菩提子のずずをなむ右大臣もとめ侍ると聞きてこのずずを送るとて加へ侍りける　眞延法師

思ひ出のけぶりやまさむなき人の佛になれるこのみ見ば君

かへし　右大臣

道なれるこのみ尋ねて心ざしあると見るにぞ音をば増しける

定めたる女も侍らずひとりぶしをのみすと女友だちのもとよりたはぶれて侍りければ　讀人しらず

いづこにも身をば離れぬ影しあればふす床ごとに獨やはぬる

前栽の中にすろの木おひて侍ると聞きてゆきあ

ればかの男の姉の許にうれへおこせて侍りければいと心うきことかなと言ひつかはしたりける

返事に

紀の國のなぐさの濱は君なれやことのいふかひありと聞きつる

すみ侍りける女宮づかへし侍りけるを友達なりける女同じ車にて貫之が家にまうできたりけり貫之が妻客人(めまらうど)にあるじせむとてまかりおりて侍りける程に彼の女を思ひかけて侍りければ忍びて車にいひいれ侍りける　貫之

波にのみぬれつるものを吹く風のたよりうれしきあまの釣舟

男の物にまかりて二年ばかりありてまうできたりけるを程へて後にことなしびにこと人に名だ

て詠み侍りける

年ふればわが黒髪もしら河のみづはくむまで老いにけるかな　　檜垣の嫗

かしこに名高く事好む女になむ侍りける

しぞくに侍りける女の男に名たちてかかる事な

むある人にいひさわげといひ侍りければ　　貫之

かざすとも立ちと立ちなむなき名をば事無し草のかひやなからむ

題しらず

歸りくる道にぞけさは惑（迷イ）ふらむこれになずらふ花なきものを

女の許に文遣しけるを返事もせずして後々は文

を見もせで取りなむ置くと人の告げければ　　讀人しらず

大空にゆきかふとりの雲路をぞ人のふみ見ぬものといふなる

紀のすけに侍りける男のまかり通はずなりにけ

我が爲におきに〳〵かりしはし鷹の人の手にありときくは誠か
梔子ある所にこひに遣したるに色のいと惡かりければ
聲にたてていはねどしるし口なしの色は我がため薄きなりけり
題しらず
瀧つ瀨の早からぬをぞ恨みつるみずとも音に聞かむと思へば
人のもとに文遣しける男人に見せけりと聞きてつかはしける
皆人にふみみせけりな水無瀨川そのわたりこそまづは淺けれ
つくしの白河といふ所にすみ侍りけるにまへより大貳藤原興範朝臣のまかり渡るついで水たべむとてうち寄りてこひ侍りければ水をもて出で

を心にもあらで落したりけるを見つけてつかは
しける

島がくれありそに通ふあしたづのふみおく跡は波もけたなむ

昔同じ所に宮づかへしける人年ごろいかにぞな
どとひおこせて侍りければ遣しける

伊勢

身は早くなきもののごとなりにしを消えせぬ物は心なりけり

はらからの中にいかなる事かありけむ常ならぬ
さまに見え侍りければ

讀人しらず

睦しきいもせの山のなかにさへ隔つる雲のはれずもあるかな

女のいとくらべ難く侍りけるを相はなれにける
がこと人にむかへられぬと聞きて男のつかはし
ける

かへし　　敦忠朝臣

しらがしの雪も消えぬる足引の山路をたれかふみまよふべき

いひちぎりて後ことと人につきてと聞きて　　讀人しらず

いふことの違(たが)はぬ物にあらませば後(のち)憂きことも(はイ)聞えざらまし

題しらず　　伊勢

面影をあひみしかずになすときは心のみこそしづめられけれ

かしら白かりける女を見て

ぬきとめぬ髪の筋(すぢ)もてあやしくもへにける年の數をしるかな

題しらず　　讀人しらず

なみ數にあらぬ身なれば住吉の岸にもよらずなりや果てなむ

つきもせずうき言の葉の多かるを早くあらしの風も吹かなむ

いと忍びて語らひける女の許につかはしける文

人のむすめに名たち侍りて　　　　讀人しらず

世の中をしらずながらも津の國のなにはたちぬる物にぞ有りける

なき名たちける頃

よとともに我ぬれぎぬとなる物はわぶる涙のきするなりけり

前坊おはしまさずなりての頃五節の師のもとに

つかはしける　　　　大輔

うけれども悲しきものをひたぶるに我をや人の思ひすつらむ

かへし　　　　讀人しらず

悲しきもうきも知りにし一つ名を誰をわくとか思ひ捨つべき

大輔がざうしに敦忠朝臣のものへ遣しける文を

もてたがへたりければ遣しける　　　　大輔

道しらぬものならなくにあしびきの山ふみ惑ふ人もありけり

うにもあらずなりにければ里にのみ侍りて奉ら
せける　　せかゐの君

逢ふ事の年ぎりしぬる（けイ）歎きにはみの数ならぬ物にぞ有りける

女の許よりあだにきこゆることなどいひて侍り
ければ　　左大臣

あだ人もなきにはあらず有りながら我が身にはまだ聞きも習はぬ

題しらず　　讀人しらず

宮人とならまほしきを女郎花野邊よりきりの立ち出てぞくる

かしこまる事侍りてさとに侍りけるをしのびて
ざうしに參れりけるをおほいまうち君のなどか
音もせぬとうらみければ　　大輔

我が身にもあらぬ我が身の悲しきは（にイ）心も異（こと）になりやしにけむ

後撰和歌集 卷第十七

雜歌三

いそのかみといふ寺に詣でて日の暮れにければ夜あけてまかり歸らむとてとどまりてこの寺に遍昭侍りと人の告げ侍りければ物いひ心みむとていひ侍りける　小町

岩の上にたびねをすればいとさむし苔の衣をわれにかさなむ

かへし　遍昭

世をそむく苔の衣はただ一重かさねばうとしいざふたりねむ

法皇かへりみ給ひけるを後々は時衰へありしや

けるを京にて母がおもひにて久しう罷らで彼の
　高潟に侍る人にいひつかはしける
物思ふと行きてもみねば高潟の蜑のとまやは朽ちやしぬらむ
　延喜の御時ときの藏人のもとに奏しもせよとお
　ほしくてつかはしける　　　　　　躬　恒
夢にだに嬉しとも見ばうつつにて侘しきよりは猶まさりなむ

結び置きしかたみのこだになかりせば何に忍の草をつまし
物思ひ侍りける頃やんごとなき高き所よりとは
せ給へりければ　讀人しらず
うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬものは涙なりけり
世の中の心にかなはぬ事申しけるついでに　貫之
惜しからでかなしき物は身なりけり憂世そむかむ方を知らねば
思ふこと(ことイ)侍りけるころ人に遣しける　讀人しらず
思ひ出づるときぞ悲しき世の中は空ゆく雲のはてを知らねば
題しらず
哀ともうしともいはじ陽炎のあるかなきかに消(けイ)ぬる世(身イ)なれば
あはれてふことに慰む世の中をなどか悲しといひて過ぐらむ
播磨の國に高潟といふ所に面白き家もちて侍り

りける笛を取りとどめて又の朝に遣すとて　讀人しらず

かへりてはしては音にやたつべき聲やたがはむ笛竹のつらき一よのかたみと思へば

ひとふしに恨みなばこそ笛竹の聲のうちにも思ふこころあり

もとより友達に侍りければ貫之にあひ語らひて

兼輔朝臣の家に名簿を傳へさせ侍りけるにその

名つきに加へて貫之におくりける　躬恒

人につぐたよりだになし大荒木の森のしたなる草の身なれば

兼忠朝臣の母みまかりにければ兼忠をば故枇杷

左大臣の家にむすめをば后の宮にさぶらはせむ

とあひ定めて二人ながらまづ枇杷の家に渡し送

るとてくはへ侍りける　兼忠朝臣の母の乳母

女の心ざし深く思ひかはしながら憚る事侍りて
あひ離れて六七年ばかりに成り（侍りイ）にける女に侍り
ければ彼の車にいひいれ侍りける　　閑院左大臣

ふるさとの佐保の川水けふも猶かくてあふせは嬉しかりけり

枇杷左大臣よう侍りて楢の葉をもとめ侍りけれ
ば千兼があひしりて侍りける家にとりにつかは
しければ　　俊子

我が宿をいつならしてか楢の葉の（なイ）ならし顔には折りにおこする

かへし　　枇杷左大臣

ならの葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟（たたり）なさるな

友達の許にまかりてさかづきあまたたびになり
ければ遁げてまかりけるを止めわづらひもて侍

武藏野は袖ひづばかり分けしかど若むらさきは尋ねわびにき

暇にてこもり侍りける頃人のとはず侍りければ　壬生忠岑

大荒木の森の草とや成りにけむかりにだにきて訪ふ人のなき

ある所に宮づかへし侍りける女のあだ名たちけるがもとよりおのれがうへはそこになむくちのはにかけていはるなど恨み侍りければ　讀人しらず

あはれてふことこそ常の口のはにかかるや人を思ふなるらむ

題しらず　伊勢

吹く風の下の塵にもあらなくにさもたちやすきわが浮名かな

春日にまうでける道にさほ川のほとりに初瀨より歸る女車のあひて侍りけるにすだれのあきたるより僅に見入れければあひしりて侍りける

身をうしと人しれぬよを尋ねこし雲の八重だつ山にやはあらぬ

をとこなど侍らずして年頃山里に籠り侍りける
女を昔あひしりて侍りける人道まかりけるつい
でに久しうきこえざりつるをここになりけりと
いひ入れて侍りければ　　土佐

朝なけに世の憂き事を忍びつつながめせしまに年はへにけり

山里に侍りけるに昔あひしれる人のいつよりこ
こにはすむぞと問ひければ　　閑院

春やこし秋や行きけむおほつかな陰は朽木と世をすぐす身は

題しらず　　貫之

世の中はうき物なれや人ごとのとにもかくにもきこえ苦しき

讀人しらず

数ならぬ身におくよひの白玉は光みえさすものにぞ有りける

まかり通ひける女の心とけずのみ見え侍りけれ
ば年月も經ぬるを今さらかかる事といひ遣した
りければ　　　　　　　　　　　　讀人しらず

難波潟みぎはの蘆のおひかぜにうらみてぞふる人のこころを

女の許より恨みおこせて侍りける返事に

忘るとは恨みざらなむはしたかのとかへる山の椎はもみぢず

昔同じ所に宮づかへし侍りける女の男につきて
人の國におちゐたりけるを聞きつけて心ありけ
る人なればいひ遣しける

をちこちの人めまれなる山里にいへゐせむとは思ひきやきみ

かへし

かへし　　もとのをとこ

世の中にしられぬ山に身なぐともたにの心のいはでおもはむ

山の井の君に遣しける　　讀人しらず

音にのみ聞きてはやまじ淺くともいざ汲み見てむ山の井の水

やまひしけるをからうじておこたれりと聞きて

しでの山たどるたどるも越えなくてうき世の中に何歸るらむ

題しらず

數ならぬ身を重荷にて吉野山たかきなげきをおもひこりぬる

かへし

吉野山こえむことこそ難からめこらむなげきの數はしりなむ

陽成院の帝時々とのゐにさぶらはせ給ひけるを

久しうめしなかりければ奉りける　　武藏

白波のたち騷がれて立ちしかば身をうしほにぞ袖はぬれにし
かへし
とりもあへず立ち騷がれしあだ波にあやなく何に袖の濡れけむ
題しらず
ただちとも賴まざらなむ身にちかき衣の關もありといふなり
友達の久しくあはざりけるにまかりてあひて詠み侍りける
逢はぬまは戀しきみちも知りにしをなど嬉しきにまどふ心ぞ
題しらず
いかなりし節にか糸の亂れけむしひてくれども解けずみゆるは
人のめに通ひける見つけられ侍りて　賀朝法師
身なぐとも人にしられじ世の中に知られぬ山を知る由もがな

世の中をとかく思ひ煩ひける程に女友だちなる人猶わがいはむことにつきねと語らひはべりければ

ひとごころいさやしら波たかければ寄らむ渚ぞかねて悲しき（戀イ）

高津内親王

いたくこと好む由を時の人いふと聞きて

直き木に曲れる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなさ

嵯峨后

帝に奉り給ひける

移ろはぬ心の深くありければここら散る花はるにあへるごと

これかれ女の許にまかりて物いひなどしけるに女のあなさむの風やと申しければ

讀人しらず

玉垂のあみめのまより吹く風の寒くばそへて入れむおもひを

男のいひけるを騒ぎければ歸りて朝(あした)に遣しける

かへし　　　　　　　　　　輔臣朝臣

かづきてし沖のもくづを忘れずば底のみるめを我にからせよ

人の裳をぬはせ侍るにぬひて遣すとて　　讀人しらず

かぎりなく思ふ心は筑波嶺のこのもやいかが有らむとすらむ

男のやまひしけるをとぶらはでありありてやみ

がたにとへりければ

思ひ出でてとふ言の葉を誰みまし身の白雲になりなましかば

みそか男したる女をあらくはいはでとへど物も

いはざりければ

忘れなむと思ふ心のつくからに言の葉さへやいへばゆゆしき

男のかくれて女を見たりければつかはしける

隠れるてわがうきさまをみづの上の沫とも早く思ひ消えなむ

望月のこまより遲く出でつればたどるたどるぞ山は越えつる

病して心細しとて大輔につかはしける　藤原敦敏

萬代と契りしことのいたづらに人わらへにもなりぬべきかな

かへし　大輔

かけていへばゆゆしきものを萬代と契りし事や叶はざるべき

あられの降るを袖にうけて消えけるを海のほとりにて　讀人しらず

散るとみて袖にうくれど溜らぬは荒れたる波の花にぞありける

ある所のわらは女五節見に南殿にさぶらひて沓を失ひてけり輔臣朝臣藏人にて沓をかして侍りけるをかへすとて

立ち騷ぐ波まを分けてかづきてし沖のもくづをいつか忘れむ

男につけてみちのくにへむすめを遣したりける
がこのをとこ心かはりたりと聞きて心うしと親
のいひ遣したりければ　　　　　　　　讀人しらず
雲井路の遙けき程のそらごとはいかなる風の吹きてつげけむ
かへし　　　　　　　　　　　　　　女の　　母
天雲のうきたることと聞きしかどなほぞ心はそらになりにし
たまさかに通へりける文をこひかへしければそ
の文にぐして遣しける　　　　　　　もとよしのみこ
やればをしやらねば人に見えぬべし泣々もなほ返すまされり
延喜の御時御馬を遣して早くまゐるべき由おほ
せつかはしたりければ卽ちまゐりておほせ言う
けたまはれる人につかはしける　　　素　性　法　師

めづらしや昔ながらの山の井はしづめる影ぞくちはてにける

宇治のあじろにしれる人の侍りければまかりて　大江興俊

宇治川の波にみなれし君ませば我もあじろによりぬべきかな

院のみかど内におはしましし時人々に扇てうぜさせ給ひける奉るとて　小貳のめのと

ふき出づるねどころ高くきこゆなり初秋風はいざ手ならさじ

かへし　大輔

心してまれにふきつる風なれば（あきかぜをィ）山おろしにはなさじとぞ思ふ

男のふみ多く書きてといひければ　讀人しらず

はかなくて絶えなむ蜘の糸ゆゑに何にか多く（りけるィ）かかむとぞ思ふ（すらむィ）

鞍馬の坂をよる越ゆとてよみ侍る　亭子院いまあことめしける人

昔よりくらまの山といひけるはわがごと人もよるや越えけむ

りて　三條右大臣

かくてのみやむべきものかちはやぶる賀茂の社の萬代をみむ

同じ御時北野の行幸にみこし岡にて　枇杷左大臣

御輿岡いくその世々に年を經て今日の行幸を待ちてみつらむ

戒仙が深き山寺に籠り侍りけるにこと法師まう

できて雨に降りこめられて侍りけるに　讀人しらず

いづれをか雨ともわかむ山ぶしの落つる涙もふりにこそふれ

これかれ逢ひて夜もすがら物語してつとめて送

りける　おきかぜ

思ひにはきゆる物ぞと知りながら今朝しもおきて何にきつらむ

若う侍りける時は志賀に常に詣うでけるを年老

いては參り侍らざりけるに參り侍りて　讀人しらず

ゐにかの家にことにふれて日ぐらしといふこと
なむ侍りける　宣旨
み山よりひびき聞ゆる日ぐらしの聲をこひしみ今もけぬべし
かへし　贈太政大臣
蜩(ひぐらし)のこゑをこひしみ消(け)ぬべくば深山ほとり(とほりィ)にはやも來ねかし
河原に出でてはらへし侍りけるにおほいまうち
君もいであひ侍りければ　敦忠朝臣母
誓はれし賀茂の河原に駒とめてしばし水かへかげをだに見む
人の牛をかりて侍りけるに死に侍りければいひ
遣しける　陽院のご
わがのりしことをうしとや消えにけむ草葉にかかる露の命は
延喜の御時賀茂臨時祭の日御前にてさかづきと

後撰和歌集　卷第十六

雜歌二

思ふ心ありて前太政大臣によせて侍りける　在原業平朝臣

賴まれぬ憂世の中をなげきつつ日陰におふる身をいかにせむ

やまひし侍りて近江の關寺にこもりて侍りける

に前の道より閑院のご石山に詣うでけるをただ

今なむ行き過ぎぬると人のつげ侍りければおひ

てつかはしける　敏行朝臣

逢坂のゆふつけになく鳥の音を聞き咎めずぞ行き過ぎにける

前中宮宣旨贈太政大臣の家よりまかり出でてあ

け侍りける　　　　　　四條御息所女

へだてつるひとの心のうきはしを危きまでもふみ見つるかな

小野好古朝臣西の國のうての使にまかりて二年
といふ年四位には必ずまかりなるべかりけるを
さもあらずなりにければかかる事にしもさされ
にける事の安からぬ由をうれへ送りて侍りける
文の返事の裏にかきつけて遣しける　　　源公忠朝臣

玉櫛笥(たまくしげ)二年あはぬ君が身をあけながらやはあらむとおもひし

かへし　　　　　　　　小野好古朝臣

あけながら年ふる事は玉櫛笥みのいたづらになればなりけり

人わたす事だになきを何しかもながらの橋と身のなりぬらむ

御かへし　伊勢

ふるる身は涙のなかに見ゆればや長柄の橋にあやまたるらむ

京極の御息所尼になりて戒うけむとて仁和寺に

わたりて侍りければ　あつみのみこ

獨のみながめて年をふる里の荒れたるさまをいかに見るらむ

女のあだなりといひければ　朝綱朝臣

まめなれどあだ名は立ちぬたはれ島よる白浪をぬれ衣にきて

あひかたらひける人の家の松の梢のもみぢたり

ければ　讀人しらず

年をへて頼むかひなしときはなる松のこずゑも色かはりゆく

男の女の文を隱しけるを見てもとの妻の書きつ

きたりければ　　大輔

ふるさとの奈良の都のはじめよりなれにけりとも見ゆる衣か

かへし　　雅正

ふりぬとて思ひも捨てじ唐衣よそへてあやなうらみもぞする

世の中の心にかなはぬなど申しければ（人のイ）行くさき頼しき身にてかかる事あるまじと人申し侍りければ　　大江千里

流れてのよをも頼まず水の上の沫に消えぬるうき身と思へば

藤原さねきが藏人よりかうぶり賜りてあす殿上おりむ（まかりをりなむイ）としける夜（やイ）酒たうべけるついで（人イ）に　　兼輔朝臣

うば玉のこよひばかりぞあけ衣あけなば君をよそにこそ見め

法皇御ぐしおろし給ひての頃　　七條后

三條右大臣みまかりてあくる年の春大臣めしありと聞きて齋宮のみこにつかはしける　むすめの女御

いかでかの年ぎりもせぬ種もがな荒れたる宿に植ゑてみるべく

かの女御左のおほいまうち君にあひにけりと聞きて遣しける　齋宮のみこ

春毎に行きてのみ見む年ぎりもせずといふ種はおひぬとか聞く

庶明朝臣中納言になり侍りける時うへのきぬつかはすとて　右大臣

おもひきや君が衣をぬぎかへて濃きむらさきの色をきむとは

かへし　庶明朝臣

いにしへも契りてけりな打ちはぶき飛びたちぬべき天の羽衣

雅正がとのゐ物をとりたがへて大輔が許にもて

兼輔朝臣宰相中將より中納言になりて又の年のり弓のかへりだちのあるじにまかりてこれかれ思をのぶるついでに

兼輔朝臣

ふるさとの三笠の山はとほけれどこゑは昔のうとからぬかな

淡路のまつりごと人の任はててのぼりまうできての頃兼輔朝臣の粟田の家にて

躬恒

ひき植ゑし人はむべこそ老いにけれ松のこ高くなりにける哉

人のむすめに源かねきがすみ侍りけるを女の母聞き侍りていみじうせいし侍りければ忍びたる方にて語らひける間に母しらずして俄にいきければかねきがにげてまかりければ遣しける

女の母

小山田のおどろかしにもこざりしをいとひたぶるににげし君哉

難波潟なにもあらずみをつくしふかき心のしるしばかりぞ

[illegible]元長親王のすみ侍りける時てまさぐりに何いれて侍りける箱にか有りけむしたおびしてゆひて又こむ時にあけむとて物のかみにさし置きていで侍りにける後常明親王にとりかくされて月日久しく侍りてありし家にかへりてこの箱を元長親王に送るとて　中務

明けてだになににかはせむ水の江の浦島の子を思ひやりつつ

忠房朝臣津の守にて新司治方がまうけに屏風てうじて彼の國の名ある所々繪にかかせてさび江[illegible]といふところに書けりける　忠岑

年をへて濁りだにせぬさび江には玉もかへりて今ぞすむべき

月の面白かりけるを見て　　躬恒

晝なれや見ぞ紛へつる月影を今日とやいはむ昨日とや言はむ

五節の舞姫にてもしめしとどめらるる事やある
と思ひ侍りけるをさもあらざりければ　　藤原滋包女

くやしくぞ天つ乙女となりにける雲路たづぬる人もなき世に

太政大臣の左大將にて相撲のかへりあるじし侍
りける日中將にてまかりて事をはりてこれかれ
まかりあがれけるにやんごとなき人二三人ばか
りとどめてまらうどあるじ酒あまたたびの後醉
にのりて子どものうへなど申しけるついでに　　兼輔朝臣

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

女友だちの許につくしよりさし櫛を心ざすとて　　大江玉淵朝臣女

にさぶらひ給ひける三年といふになむみかど歸りおはしましたりける昔のごと同じ所にておほんぐしおろし給うけるついでに　七條のきさき

言の葉のたえせぬ露はおくらむや昔おぼゆるまとゐしたれば

御かへし　伊勢

海とのみ團欒（まとゐ）の中は成りぬめりそながらあらぬ影の見ゆれば

志賀の唐崎にてはらへしける人のしもづかへにみるといふ侍りけり大伴黑主そこにまできてかのみるに心をつけていひ戲ぶれけりはらへはてて車より黑主に物かづけけり其裳の腰にかきつけてみるに送り侍りける　黑主

何せむにへたのみるめを思ひけむ沖つ玉藻をかづく身にして

[illegible]け侍りける[illegible]

おとにきく松が浦島けふぞ見るむべも心あるあまの住みけり

齋院のみそぎの垣下に殿上の人々まかりて曉に
歸りてむまが許につかはしける　右衛門

われのみはたちもかへらぬ曉にわきてもおける袖のつゆかな

しほなきとしたたみあへてと侍りければ　忠岑

鹽といへばなくても辛き世の中にいかにあへたるたたみなるらむ

直垂こひに遣したるに裏なむなきそれは著じと
[illegible]やいかがといひたれば　藤原元輔

住吉のきじともいはじ沖つ浪なほうちかけようらはなくとも

法皇はじめて御ぐしおろし給ひて山ぶみし給ふ
あひだ后をはじめ奉りて女御更衣なほひとつ院

さだめたる男もなくて物思ひけるころ　　小野小町

蜑のすむ浦こぐ船のかぢをなみ世をうみわたるわれぞ悲しき

あひしりて侍りける女心にもいれぬさまに侍りければこと人の心ざしあるにつき侍りけるをなほしもあらず物いはむと申し遣したりけれど返事もせず侍りければ　　讀人しらず

濱千鳥かひなかりけりつれもなき人のあたりはなき渡れども

法皇寺めぐりし給ひける道にてかへでの枝を折りて　　素性法師

この御幸千年かへても見てしがな（まくほしィ）かかる山ぶし時にあふべく

西院の后おほんぐしおろさせ給ひておこなはせ給ひける時彼の院の中島の松をけづりて書きつ

はちすのはひをとりて　　讀人しらず

蓮葉のはひにぞ人はおもふらむよにはこひぢの中におひつつ

姿あやしと人の笑ひければ

伊勢の海のつりのうけなるさまなれど深き心は底にしづめり

おほきおほいまうち君の白河の家にまかりわたりて侍りけるに人のざうしにこもり侍りて　　中[とイ]務

白河の瀧のいと見まほしけれどみだりに人をよせじものをや

かへし　　おほきおほいまうち君

白河の瀧のいとなみみだれつつよるをぞ人はまつといふなる

逢坂の關に庵室を造りて住み侍りけるに行きかふ人を見て　　蟬丸

これやこのゆくもかへるも別れつ[てはイ]つ知るもしらぬも逢坂の關

こと繁ししばしはたてれ宵のまにおくらむ露は出でて拂はむ

家に行平朝臣まうできたりけるに月の面白かりける夜酒などたうべてまかりたたむとしけるほどに

河原左大臣

照る月を正木のつなによりかけてあかず別るる人をつながむ

かへし

行平朝臣

限なきおもひの綱のなくばこそ正木のかつらよりもなやまめ

世の中を思ひうじて侍りける頃

業平朝臣

住みわびぬ今はかぎりと山里につま木こるべき宿もとめてむ

我をしりがほにないひそと女のいひ侍りける返事に

躬恒

あしびきの山におひたる白樫のしらじなひとを朽木なりとも

侍りて年はいくらばかりになりぬると問ひ侍り
けれは四十餘になむなりぬると申しければ　贈太政大臣

今迄になどかは花の咲かずしてよそとせあまり年きりはする

かへし　友則

はるばるの數は忘れずありながら花さかぬ木を何に植ゑけむ

外吏にしばしばまかりありきて殿上おりて侍り
ける時兼輔朝臣の許に送り侍りける　平なかき

よとともに峰へ麓へおりのぼり行く雲の身は我にぞありける

まだ后になり給はざりける時かたはらの女御た
ちそねみ給ふけしきなりけるとき帝御ざうしに
忍びて立ちより給へりけるに御對面はなくて奉
り給ひける　嵯峨后

後撰和歌集　巻第十五

雜歌一

仁和の帝嵯峨の御時の例にて芹川に行幸し給ひける日

在原行平朝臣

嵯峨の山みゆきたえにし芹川のちよのふるみち跡はありけり

同じ日鷹飼にてかりぎぬに鶴のかたをぬひて書きつけたりける

翁さびひとなとがめそかり衣今日はかりとぞたづもなくなる

行幸の又の日なむ致仕の表奉りける

紀友則まだつかさ賜らざりける時ことのついで

かへし　　讀人しらず

白雪のつもるおもひも頼まれず春よりのちはあらじと思へば

心ざし侍る女みやづかへし侍りければあふ事難く侍りけるを雪のふるにつかはしける

我がこひし君があたりを離れねばふる白雪もそらに消ゆらむ

かへし

山がくれ消えせぬ雪の佗しきは君まつの葉にかかりてぞふる

物いひ侍りける女に年のはてのころほひ遣しける　　藤原ときふる

あらたまの年は今日あすこえぬべし逢坂山をわれやおくれむ

しける　　　　贈太政大臣

飛鳥川せきてとどむるものならば淵瀬になると何かいはれむ

久しうまかり通はずなりにければ十月ばかりに
雪の少し降りたるあしたいひ侍りける　　右近

身をつめば哀とぞ思ふ初雪のふりぬることもたれにいはまし

源正明朝臣十月ばかりに常夏を折りて送りて侍
りければ　　讀人しらず

冬なれど君が垣ね（ほイ）に咲きた（ぬイ）ればむべとこなつに戀しかりけり

女の恨むる事ありて親の許にまかり渡りて侍り
けるに雪の深く降りて侍りければあしたに女の
むかへに車遣しける消息にくはへて遣しける　　兼輔朝臣

白雪のけさは積れるおもひかなあはでふる夜の程もへなくに

瀬を早みたえず流るる水よりもたえせぬ物は戀にぞありける
こふれども逢ふよなき身は忘草夢路にさへやおひしげるらむ
世の中の憂はなべてもなかりけり頼むかぎりぞ恨みられける

頼めたる人に

夕されば思ぞしげきまつ人のこむやこじやのさだめなければ

女につかはしける　源よしの朝臣

厭はれて歸りこしぢの白山はいらぬに惑ふものにぞ有りける

題しらず　讀人しらず

人なみにあらぬ我が身は難波なる蘆のねのみぞ下にながるる
白雲のゆくべき山はさだまらずおもふかたにも風はよせなむ
世の中に猶ありあけのつきなくて闇に惑ふをとはぬつらしな
さだまらぬ心ありと女のいひたりければつかはは

む門さゝであひまてと申してこざりければ（までこざりイ）　讀人しらず

八重葎さしてし門をいまさらに何にくやしくあけて待ちけむ

人をいひわづらひてこと人にあひ侍りて後いかがありけむはじめの人に思ひかへりて程へにければ文はやらずして扇に高砂のかた書きたるにつけて遣しける　源庶明朝臣

きを鹿のつまなきこひを高砂のをのへの小松ききもいれなむかへし　讀人しらず

きを鹿の聲高砂にきこえしは妻なきときの音にこそありけれ

思ふ人にえあひ侍らで忘られにければ

せきもあへず涙の川の瀬を早みかからむものと思ひやはせし

題しらず

いひ遣したりければ　讀人しらず

忘草名をもゆゆしみかりにても生ふてふ宿は行きてだに見じ

かへし

憂きことのしげきやどには忘草植ゑてだに見しあきぞ佗しき

女どもろともに侍りて

數しらぬおもひは君にある物をおきどころなき心地こそすれ

かへし

おき所なき思とし聞きつればわれにいくらもあらじとぞ思ふ

元長親王に夏のさうぞくしておくるとて添へたりける　南院式部卿のみこの女

わがたちてきるこそうけれ夏衣おほかたとのみ見べき薄さを

久しうとはざりける人の思ひ出でて今宵までこ

ど近うはえあはずして　　讀人しらず

ま近くてつらきを見るはうけれども憂は物かは戀しきよりは

女の許につかはしける　　藤原さねただ

筑紫なるおもひそめがは渡りなば水やまさらむ淀むときなく

かへし　　讀人しらず

わたりてはあだになるてふ染川の心づくしに成りもこそすれ

男のもとより花盛にこむといひてこざりければ

花ざかり過しし君はつらけれど言の葉をさへかくしやはせむ

をとこの久しうとはざりければ　　右近

とふ事をまつに月日はこゆるぎの磯にや出でて今はうらみむ

あひしりて侍りける人の許に久しうまからざりければ忘草なにをか種と思ひしはといふことを

男のとはずなりにければ　　讀人しらず

音もせずなりも行くかな鈴鹿山こゆてふ名のみ高く立てつつ

かへし

越えぬてふ名をな恨みそ鈴鹿山いとどま近くならむと思ふを

女に物いはむとてきたりけれどこと人に物いひけれぱ歸りて

我が僞に且はつらしとみ山木のこりともこりぬかかる戀せじ

かへし

あふごなき身とはしるしる戀すとて嘆きこりつむ人はよきかは

人につかはしける　　戒仙法師

朝ごとに露はおけども人こふるわが言の葉はいろもかはらず

來て物いひける人のおほかたむつまじかりければ

うだの野はみみなしやまか呼子鳥よぶ聲にさへ答へざるらむ

かへし　宇多院の女五のみこ

みみなしの山ならずとも呼子鳥なにかはきかむ時ならぬ音を

つれなく侍りける人に　忠岑

戀ひ佗びて死ぬてふ事はまだなきに世の例にもなりぬべき哉

立ちよりけるに女にげて入りければつかはしける　讀人しらず

影みればおくへ入りぬる君によりなどか涙のとへは出づらむ

逢ひにける女の又あはざりければ

知らざりし時だにこえしあふ坂をなど今さらに我まどふらむ

女の許にまかりそめてあしたに　藤原蔭基

あかずして枕のうへにわかれにし夢路を又もたづねてしがな

もろめのみ數多みゆれば三笠山しるしる如何さして行くべき

女の許よりいといたくな思ひ佗びそと賴めおこせて侍りければ

なぐさむる言の葉にだにかからずばいまも消ぬべき露の命を

元慶親王のみそかにすみ侍りける頃今來むとたのめて來ずなりにければ　　兵衞

人しれずまつにねられぬ有明の月にさへこそあざむかれけれ

忍びて住み侍りける人の許よりかかるけしき人に見すなといへりければ　　元方

龍田川たちなば君が名ををしみいはせの森のいはじとぞ思ふ

宇多院に侍りける人にせうそこつかはしける返事も侍らざりければ　　讀人しらず

りける
ちはやぶる神にもあらぬ我がなかの雲井遙になりもゆくかな
かへし
ちはやぶる神にも何かたとふらむおのれ雲井に人をなしつつ
女三のみこに　敦慶親王
うきしづみ淵瀬に騷ぐ鳰鳥(にほどり)はそこものどかに有らじとぞ思ふ
甲斐に人の物いふと聞きて　藤原守文
松山になみたかき音ぞきこゆなる我よりこゆる人はあらじを
男の許に雨ふる夜かさをやりて呼びけれど來ざりければ　讀人しらず
さしてこと思ひしものを三笠山かひなく雨のもりにけるかな
かへし

いかにしてことかたらはむ郭公なげきの下（した）になけばかひなし

思ひつつ經にける年をしるべにてなれぬるものは心なりけり

文などつかはしける女のことをとこにつき侍り
けるに遣しける　　源　整

我ならぬ人すみの江の岸に出て難波のかたをうらみつるかな

整（ととのふ）がかれがたになり侍りにければとどめ置きた
る笛を遣すとて　　讀人しらず

濁り行く水（家イ）には影の見えばこそあしまよふえを止めても見め

菅原のおほいまうち君の家に侍りける女に通ひ
侍りける男中たえて又とひて侍りければ

すがはらや伏見の里のあれしより通ひし人のあとも絶えにき

女の男を厭ひてさすがにいかがおぼえけむ言へ

いひかはしける男の親いといたうせいすと聞き
下女のいひつかはしける
いひさしてとどめらるなる池水の波いづかたに思ひよるらむ
同じ所に侍りける人の思ふ心侍りけれどいはで
忍びけるをいかなる折にかありけむあたりに書
きて落せりける
知られじな我がひとしれぬ心もて君をおもひの中にもゆとも（はイ）
心ざしをばあはれと思へど人めになむつつむと
いひて侍りければ
あふばかりなくてのみふるわが戀を人めにかくる事の侘しさ
題しらず
夏衣身にはなるともわがためにうすき心はかけずもあらなむ

伊衡朝臣の女いまき

をこひに遣したりければ

月にだに待つ程多く過ぎぬれば雨もよにこじと思ほゆるかな

はじめて人に遣しける

讀人しらず

思ひつつまだいひそめぬわが戀をおなじ心にしらせてしがな

いひわづらひてやみにけるを又思ひ出でてとぶ

らひ侍りければ定めなき心かなといひて飛鳥川

の心をいひつかはして侍りければ

飛鳥川こころのうちに流るれば底のしがらみいつかよどまむ

思ひかけたる女の許に

朝頼朝臣

富士のねをよそにぞ聞きし今はわが思ひにもゆる煙なりけり

かへし

讀人しらず

驗なきおもひとぞきく富士の嶺もかごとばかりの煙なるらむ

題しらず

とふやとて杉なき宿にきにけれど戀しき事ぞしるべなりける

物いひわびて女のもとにいひ遣しける

露の命いつとも知らぬ世の中になどかつらしと思ひおかるる

女のほかに侍りけるをそこにと教ふる人も侍らざりければ心づからとぶらひ侍りける返事に遣しける

狩人の尋ぬる鹿はいなみ野にあはでのみこそ有らまほしけれ

忍びたる女の許よりなどか音もせぬと申したりければ　右大臣

小山田の水ならなくにかくばかり流れそめてはたえむ物かは

男のまうでこでありありて雨のふる夜おほがさ

玉蔓(たまかづら)頼めくる日の數はあれどたえだえにてはかひなかりけり

男の久しう音づれざりければ

いにしへの心はなくや成りにけむ頼めしことのたえて年ふる

かへし

いにしへも今も心のなければぞうきをもしらで年をのみふる

男のただなりける折には常にまできけるが物いひて後は門よりわたりけれどまでこざりければ

絶えたりし昔だに見しうきはしを今はわたると音にのみ聞く

いひ侘びて二年ばかり音もせずなりにける男の五月ばかりにまできて年頃久しう有りつるなどいひてまかりにけるに

忘られてとしふるさとの郭公なににひとこゑなきて行くらむ

恨むれど戀ふれど君がよと共にしらず顔にてつれなかるらむ

かへし

恨むとも戀ふともいかが雲井より遙けき人をそらに知るべき

いひわづらひて止みにける人に久しう有りて又

遣しける

しづ機にへつるほどなり白糸のたえぬる身とは思はざらなむ

かへし

へつるよりうすくなりにし賤機(しづはた)の糸は絶えでもかひやなからむ

男のまできてすき事をのみしければ人やいかが

見るらむとて

くることは常ならずとも玉蔓(たまかづら)たのみは絶えじと思ほゆるかな

かへし

後撰和歌集　卷第十四

戀歌六

人のもとにつかはしける　　　　讀人しらず

逢ふ事をよどにありてふみづの森つらしと君を見つる頃かな

かへし

みづの森もるこのごろのながめにはうらみもあへず淀の川波（水イ）

みづからまできて夜もすがら物いひ侍りけるに

程もなくあけ侍りければまかりかへりて

うきよとは思ふ物から天のとの明くるはつらき物にぞ有りける

女の許に遣しける

又をとこ

上にのみおろかに燃ゆる蚊遣火のよにもそこには思ひ焦れじ

又かへし

かはとのみ渡るをみるに慰まで苦しきことぞいやまさりける

又をとこ

水増る心地のみしてわがために嬉しき瀬をば見せじとやする

かへし

中たえてくる人もなきかつらぎのくめぢの橋は今もあやふし

白ききぬども著たる女どものあまた月あかきに侍りけるを見てあしたに一人がもとにつかはしける

藤原有好

白雲のみなひとむらに見えしかど立ち出て君を思ひそめてき

女の許に遣しける

讀人しらず

外なれど心ばかりはかけたるをなどかおもひに乾かざるらむ

題しらず

我が戀の消ゆるまもなく苦しきは逢はぬ嘆きやもえ渡るらむ

かへし

消えずのみ燃ゆる思ひは遠けれど身も焦れぬる物にぞ有りける

けるにもとの男の東へまかりけるを聞きて遣し
ける

ありとだに聞くべき物を逢坂の關のあなたぞはるけかりける

かへし

關守のあらたまるてふ逢坂のゆふつけどりはなきつつぞゆく

又女のつかはしける

行きかへりきてもきかなむ逢坂の關にかはれる人もありやと

かへし

もる人のある（りイ）とは聞けどあふ坂のせきもとどめぬわが涙かな

かれにける男の思ひ出でてまできて物などいひ
て歸りて

葛城や久米路にわたす岩橋のなかなかにてもかへりぬるかな

り過ぎぬるといひければ

濡れつつも來ると見えしは夏引の手引にたえぬ糸にやありけむ

人に忘られて侍りける時

數ならぬ身は浮草と成りななむつれなき人によるべ知られじ

思ひ忘れにける人の許にまかりて

ゆふやみは道もみえねど故郷はもとこし駒にまかせてぞくる

かへし

駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるかな

朝綱朝臣の女に文など遣しけるをこと女にいひ

つきて久しうなりて秋とぶらひて侍りければ

いづかたに言傳やりて雁がねのあふことまれに今はなるらむ

男のかれはてぬにことをとこをあひしりて侍り

あらたまの年の三年は空蟬のむなしき音をやなきてくらさむ

題しらず

流れいづる涙の川のゆくすゑはつひにあふみの海とたのまむ

雨のふる日人につかはしける

雨ふれどふらねど濡るる我が袖は(のイ)かかる思ひに乾かぬやなぞ

かへし

露ばかりぬるらむ袖のかわかぬは君がおもひの程やすくなき

女の許にまかりたるに立ちながらかへしたれば

道よりつかはしける

常よりも惑ふまどふぞ歸りつるあふみちもなき宿に行きつつ

雨にもさはらずまできてそら物語などしける男

の門よりわたるとて雨のいたく降ればなむまか

にのみ侍りければ

數ならぬ身は山の端にあらねども多くの月をすぐしつるかな

久しういひ渡り侍りけるにつれなくのみ侍りければ

業平朝臣

たのめつつ逢はで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ

かへし

伊勢

夏蟲のしるしる惑ふおもひをば懲りぬ悲しとたれか見ざらむ

返事せぬ人に遣しける

讀人しらず

うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

かへし

山彦の聲のまにまに訪ひゆかばむなしき空に行きやかへらむ

かくいひ交す程に三年ばかりになり侍りければ

諸共にいざといはずば死出の山こゆともこさむ物ならなくに

年をへてかたらふ人のつれなくのみ侍りければ

移ろひたる菊につけて遣しける　　清蔭朝臣

かくばかり深きいろにも移ろふをなほ君きくの花といはなむ

人の許にまかりたりけるに門よりのみ歸しける

にからうじて簾のもとに呼びよせてかうてさへ

や心ゆかぬといひ出したりければ　　讀人しらず

いさやまだ人の心もしらつゆのおくにもとにも袖のみぞひづ

人のもとにまかりけるを逢はでのみかへし侍り

ければ道よりいひつかはしける

よる汐のみちくる空も思ほえず逢ふ事なみにかへると思へば

（浦イ）

人を思ひかけていひわたり侍りけるをまちどほ

おほかたは瀬とだにかけじ天の川ふかき心をふちとたのまむ

かへし　讀人しらず

淵とてもたのみやはする天の川としにひとたび渡るてふ瀬を

みくしげ殿の別當につかはしける　清蔭朝臣

身のならむことをもしらず漕ぐ船は波の心もつつまざりけり

事いできて後に京極御息所につかはしける　元良親王

佗びぬれば今はた同じ難波なるみをつくしてもあはむとぞ思ふ

忍びてみくしげ殿のべたうにあひかたらふと聞きて父の左大臣のせいし侍りければ　敦忠朝臣

いかにして（でか）（はイ）かく思ふてふことをだに人傳ならで君にかたらむ

公頼朝臣のむすめに忍びてすみ侍りけるにわづらふ事ありて死ぬべしといへりければ遣しける　朝忠朝臣

左大臣に遣しける　　中務

有りしだに憂かりし物をあはずとて何處(いづこ)にそふるつらさ(こころイ)なるらむ

右近につかはしける　　左大臣

思ひわび君がつらきに立ちよらば雨も人目ももらさざらなむ

高明朝臣に笛(ふみつかはすイ)をおくるとて　　讀人しらず

笛竹のもとの古ねは變るとも己がよにはならずもあらなむ

こと女に物いふと聞きてもとのめの内侍(ないし)のふす
べ侍りければ　　好古朝臣

めも見えず涙のあめのしぐるれば身の濡衣(ぬれぎぬ)はひるよしもなし

かへし　　中將内侍

にくからぬ人のきせけむ(たろイ)濡衣はおもひにあへず今かわきなむ

題しらず　　小野道風

せきもあへず淵にぞ迷ふ涙川わたるてふ瀬を知るよしもがな

かへし

淵ながら人かよはさじなみだがは渡らば淺き瀬をもこそみれ（もこそはみめイ）

常にまうできて（つつイ）物などいふ人の今はなまうでこそ人もうたていふなりといひ出して侍りければ

きてかへる名をのみぞたつから衣したゆふひもの心とけねば

左大臣河原にいであひて侍りければ　内侍平子

たえぬともなに思ひけむ涙川ながれあふ瀬もありけるものを

大輔につかはしける　左大臣

いまははやみやまを出でて郭公けぢかき聲をわれにきかせよ

かへし

人はいさみやまがくれの郭公ならはぬさとは住みうかるべし

公頼朝臣今まかりける女のもとにのみまかりければ　寛湛法師母

ながめつつ人待つよひの呼子鳥いづ方へとか行きかへるらむ

忍びたる人に　讀人しらず

人ごとの賴みがたさは難波なる蘆のうら葉のうらみつべしな

忍びて通ひ侍りける人今歸りてなどたのめ置きておほやけの使に伊勢の國にまかりて歸りまうできて後久しうとはず侍りければ　少將內侍

人はかる心のくまはきたなくて淸きなぎさをいかで過ぎけむ

かへし　兼輔朝臣

たがためにわれが命をながはまの浦に宿りをしつつかはこし

女の許につかはしける　讀人しらず

男のいかにぞえまうでこぬことといひて侍りければ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず
來ずやあらむ來ややせむとのみ河岸のまつの心を思ひやらなむ
とまれと思ふ男の出でてまかりければ
しひてゆく駒の足をるはしをだになど我が宿に渡さざりけむ
物いひ侍りける人の久しう訪れざりけるからう
じてまうできたりけるになどか久しうといへりければ
年をへて生けるかひなき我が身をば何かは人にありとしられむ
いと忍びてまできたりける男をせいしける人ありけりののしりければ歸りまかりて遣しける
あさりする時ぞ佗しき人知れずなにはの浦にすまふ我が身は

女のもとより定なき心ありなど申したりければ　贈太政大臣

深く思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる

男の心かはるけしきありければただなりける時

この男の心ざせりける扇にかきつけて侍りける　讀人しらず

人をのみうらむるよりは心からこれ忌まざりし罪とおもはむ

忍びたる女の許に消息つかはしたりければ

あしびきの山下しげくゆく水のながれてかくしとはば頼まむ

男の忘れ侍りにければ　伊勢

侘びはつる時さへものの悲しきはいづこをしのぶ心なるらむ

親のまもりける女をいなともせとも言ひはなて

と申しければ

いなせともいひ放たれず憂き物は身を心ともせぬ世なりけり

なりにければこと女にいひつきて消息もせずな（ざりけれ ばイ）りにければ　本院のくら

忘れねと言ひしに叶ふ君なれど訪はぬはつらき物にぞありける

題しらず　讀人しらず

春霞はかなく立ちてわかるとも風よりほかにたれか訪ふべき

かへし　伊勢

目に見えぬかぜに心をたぐへつつやらば霞のわかれこそせめ

土佐が許よりせうそこ侍りける返事につかはしける　貞元親王

深綠そめけむ松のえにしあらばうすき袖にもなみはよせてむ

かへし　土佐

松山のすゑこす波のえにしあらば君の袖にはあともとまらじ

忘れなむといひし事にもあらなくに今はかぎりと物思ふかは

題しらず

現にはふせど寐られずおきかへり昨日の夢をいつかわすれむ

女につかはしける

さゝら波まなく立つめる浦をこそよに淺しとも見つゝ忘れめ

西四條の齋宮まだみこにものし給ひし時心ざしありて思ふ事はべりける間に齋宮に定り給ひにければそのあくるあしたに榊の枝につけてさしおかせ侍りける　敦忠朝臣

伊勢の海の千尋の濱に拾ふとも今はなにてふかひか有るべき

朝頼朝臣の年頃せうそこ通し侍りける女の許より用なし今は思ひ忘れねとばかり申して久しう

君があたり雲井に見つつ宮路山うち越えゆかむ道もしらなく

男の返事につかはしける　　　　　　　　　　　　　　俊　　子

思ふてふ言の葉いかになつかしな後うき物とおもはずもがな

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　兼茂朝臣女（兵衛イ）

思ふてふことこそうけれ呉竹のよにふる人のいはぬなければ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

思はむとわれをたのめし言の葉はわすれ草とぞ今はなるらし

男の病にわづらひて罷らで久しくありて遣しける

今迄も消えでありつる露の身はおくべき宿のあればなりけり

かへし

言の葉もみな霜枯になりゆけば露のやどりもあらじとぞ思ふ

恨みおこせて侍りける人の返事に

忍びてまできける人の霜のいたくふりける夜まからでつとめて遣しける

置く霜のあかつきおきを思はずば君が夜殿に夜がれせましや

かへし

霜おかぬ春より後のながめにもいつかは君がよがれせざりし

心にもあらで久しく訪はざりける人の許に遣しける　源英明朝臣

伊勢の海の蜑のまてがた暇なみ長らへにける身をぞうらむる

えがたう侍りける女の家の前よりまかりけるを見ていづこへいくぞといひ出して侍りければ　藤原篤世

あふ事のひた野へとてぞ我はゆく身を同じ名に思ひなしつつ

題しらず　讀人しらず

けれは鬼のかたをかきてやるとて　　一條

戀しくばかげをだに見て慰めよ我がうちとけてしのぶ顏なり

かへし　　伊

影みればいとど心ぞまどはるる近からぬけのうときなりけり

人のむすめに忍びて通ひ侍りけるにつらげに見

え侍りければ消息ありける返事に　　讀人しらず

人每のうきをも知らずありかせし昔ながらの我が身ともがな

見なれたる女に物いはむとてまかりたりけれど

聲はしながら隱れければ遣しける

郭公なつきそめにしかひもなく聲をよそにも聞きわたるかな

人の許にはじめてまかりてつとめて遣しける

常よりもおきうかりつる曉は露さへかかるものにぞ有りける

降りやめば跡だに見えぬ泡沫(うたかた)の消えてはかなき世を賴むかな
　女の許にまかりてえあはで歸りてつかはしける
あはでのみあまたの夜をも歸るかな人めのしげき逢坂にきて
　女に物いふ男二人ありけりひとりに返事すと聞
　きて今一人が遣しける
靡く方ありけるものをなよ竹のよにへぬものと思ひけるかな
　女の心かはりぬべきを聞きてつかはしける
ねになけば人笑へなり吳竹のよにへぬをだに勝ちぬと思はむ
　文遣しける女の親の伊勢へまかりければ共にま
　かりけるにつかはしける
伊勢の蜑と君しなりなば同じくば戀しき程にみるめからせよ
　一條がもとにいとなむ戀しきといひにやりたり

かへし　　讀人しらず

いふからにつらさぞ増る秋の夜の草のとざしにさはるべしやは

桂のみこにすみ初めけるあひだに彼のみこあひ思はぬけしきなりければ　　さだかずのみこ

人しれず物思ふころの我が袖はあきの草葉におとらざりけり

忍びたる人につかはしける　　贈太政大臣

しづはたに思ひ亂れて秋の夜の明くるもしらず歎きつるかな

消息かよはしけれどもまだあはざりける男をこれかれあひにけりといひ騷ぐをあらがはざる（なりイ）をと恨みければ　　讀人しらず

蓮葉（はちすは）のうへはつれなき裏にこそ物あらがひはつくといふなれ

男のつらうなりゆく頃雨の降りければ遣しける

小町が姉

獨ぬる時は待たるゝ鳥の音もまれにあふ夜はわびしかりけり

女の恨みおこせて侍りければ遣しける　　深養父

空蟬のむなしきからになるまでも忘れむと思ふ我ならなくに

あだなる男をあひしりて心ざしはありと見えながら猶疑はしく覺えければ遣しける　　讀人しらず

いつまでのはかなき人の言の葉か心のあきのかぜを待つらむ

題しらず

うたゝねの夢ばかりなるあふ事を秋の夜(夜イ)すがら思ひつるかな

女の許にまかりたりけるに門をさしてあけざりければまかり歸りて朝に遣しける　　兼輔朝臣

秋の夜の草のとざしの佗しきは明くれどあけぬ物にぞありける

後撰和歌集 卷第十三

戀歌五

題しらず　　業平朝臣

伊勢の海に遊ぶ蜑(あま)ともなりにしが波かき分けてみるめ潜(かづ)かむ

かへし　　伊勢

おほろけの蜑やは潜く伊勢の海の波高き浦におふるみるめを(はイ)

つれなく見え侍りける人に　　讀人しらず

つらしとやいひはててまし白露の人に心はおかじとおもふを

題しらず

ながらへば人の心もみるべきに露のいのちぞかなしかりける

大輔がもとに遣しける　敦忠朝臣

池水のいひ出づる事の難ければみごもりながら年ぞへにける

何にかは袖のぬるらむ白波のなごりありげも見えぬこころを

好古朝臣に更にあはじと誓言をして又のあしたにつかはしける　　藏内侍

誓ひてもなほ思ふにはまけにけり誰がためをしき命ならねば

忍びてまかりけれどあはざりければ　　道風

難波女にみつとはなしに蘆のねのよの短くて明くるわびしさ

物いはむとてまかりたりけれどさきだちてむねもちが侍りければはや歸りねといひ出し侍りければ

かへるべきかたもおぼえず涙川いづれかわたる淺瀬なるらむ

かへし　　大輔

涙川いかなる瀬より歸りけむこころなるみをもあやしかりしを

君が名のたつに咎なき身なりせばおほよそ人になしてみましや

かへし　女五のみこ

絶えぬると見ればあひぬる白雲のいとおほよそに思はずもがな

みくしげ殿にはじめて逢ひて遣しける　敦忠朝臣

今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり

道風忍びてまうできけるに親聞きつけてせいしければつかはしける　大輔

いとかくてやみぬるよりは稲妻の光のまにもきみを見てしが

大輔が許にまうできたりけるに侍らざりければ歸りて又のあしたに遣しける　朝忠朝臣

いたづらに立ちかへりにし白波のなごりに袖のひる時もなし

かへし　大輔

ていひ侍りけれどきかざりければ三にあたる女
に遣しける　　　　　　　　　　　　讀人しらず
關山のみねの杉むら過ぎゆけどあふみは猶ぞはるけかりける
朝忠朝臣久しう音もせで文おこせて侍りければ
思ひ出でておとづれしける山彦のこたへにこりぬ心なになり
いと忍びてまかりありきて
まどろまぬ物からうたてしかすがに現にもあらぬ心地のみする
かへし
うつつにもあらぬ心はゆめなれや見てもはかなき物を思へば
うづまさわたりに大輔が侍りけるに遣しける　　　　小野道風朝臣
かぎりなく思ひ入る日のともにのみ西の山邊をながめやる哉
女五のみこに　　　　　　　　　　　　忠房朝臣

ければかさねて遣しける

思寐の夢といひてもやみなましなかなか何にありと知りけむ

六和のかみに侍りける時かの國のすけ藤原清秀が女をむかへむと契りておほやけごとによりてあからさまに京にのぼりたりける程にこのむすめ眞延法師に迎へられてまかりにければ國に歸りてたづねてつかはしける

忠房朝臣

いつしかの音になき歸りこしかども野邊の淺茅は色付にけり

せうそこ遣しける女の返事にまめやかにしもあらじなどいひて侍りければ

引き眉のかく二籠(ふたごもり)せまほしみくはこきたれてなくをみせばや

ある人のむすめあまたありけるを姉よりはじめ

篝火にあらぬおもひのいかなれば涙のかはとうきて燃ゆらむ
人のもとにまかりて朝につかはしける
待ち暮す日は菅の根に思ほえて逢ふ夜しもなど玉の緒ならむ
大江千里まかり通ひける女を思ひかれがたにな
りて遠き所にまかりにたりといはせて久しうま
からずなりにけりこの女思ひわびてねたる夜の
夢にまうできたりと見えければうたがひにつか
はしける
はかなかる夢のしるしにはかられて現にまくる身とやなりなむ
かくて遣したりければ千里見侍りてなほざりに
誠にをとゝひなんかへりまうでこしかど心地の
なやましくてありつるとばかりいひ送りて侍り

人のむすめのもとに忍びつつ通ひ侍りけるを親聞きつけていといたくいひければかへりて遣しける
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貫　　之

風をいたみくゆる煙の立ち出ても猶こりずまの浦ぞこひしき

　はじめて女の許に遣しける　　　　　　讀人しらず

いはねども我がかぎりなき心をば雲井にとほき人も知らなむ

　題しらず

君がねにくらぶのやまの郭公（呼子鳥イ）いづれあだなるこゑまさるらむ

　消息かよはしける女おろかなるさまに見え侍りければ

戀ひてぬる夢路に通ふたましひのなるるかひなくうとき君哉

　女につかはしける

逢坂のせきとめらるる我なればあふみてふらむかたも知られず

女のもとに遣しける　よしの朝臣

あしびきの山した水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

かへし　讀人しらず

木がくれてたぎつ山水何れかは目にしもみゆる音にこそきけ

人の許より歸りて遣しける　貫之

曉のなからましかば白つゆのおきてわびしきわかれせましや

かへし　讀人しらず

おきてゆく人の心をしらつゆのわれこそまづは思ひ消えぬれ

女の許に男かくしつつよをやつくさむ高砂のと

いふことをいひ遣したりければ

高砂のまつといひつつ年をへてかはらぬ色ときかばたのまむ

まだあはず侍りける女の許に死ぬべしといへり
ければ返事にはや死ねかしといへりければ又遣
しける

同じくば君とならびの池にこそ身を投げつとも人にいはれめ（きかせめイ）

女につかはしける

陽炎（かげろふ）のほのめきつれば夕暮のゆめかとのみぞ身をたどりつる

かへし

ほの見ても目馴れにけりと聞くからに臥返（ふしかへり）こそしなまほしけれ

せうそこしばしば遣しけるを父母侍りてせいし
侍りければえ逢ひ侍らで　源よしの朝臣

あふみてふかたの案内（しるべ）もえてしがなみるめなき事ゆきてうらみむ

かへし　春澄善縄朝臣の女

うらむともかけてこそみめ唐衣身に馴れぬればふりぬとかきく

人につかはしける

歎けどもかひなかりけり世の中に何にくやしく思ひそめけむ

忘れがたになり侍りける男に遣しける　承香殿中納言

こぬ人をまつの葉にふる白雪の消えこそかへれくゆる思ひに

忘れ侍りにける女に遣しける　讀人しらず

菊の花うつる心をおくしもにかへりぬべくもおもほゆるかな

かへし

今はとてうつりはてにし菊の花かへる色をばたれか見るべき

人の女にいと忍びて通ひ侍りけるにけしきを見て親のまもりければ五月長雨の頃遣しける

ながめしてもりも佗びぬる人め哉いつか雲まのあらむとすらむ

枝もなく人にをらるる女郎花ねをだにのこせ植ゑしわがため

人の許にまかりて侍るに呼び入れねば簀子にふしあかしてつかはしける　藤原成國

秋の田のかりそめぶしもしてけるが徒いねをなにつましまし

平かねきがやうやうかれがたになりにければ遣しける　中務

秋風の吹くにつけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし

年月をへて消息し侍りける人につかはしける　讀人しらず

君見ずていくよ經ぬらむ年つきのふるとともにもおつる涙か

女につかはしける

なかなかに思ひかけては唐衣身になれぬをぞうらむべらなるかへし

れば　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

花薄ほにいづることもなき物をまだき吹きぬるあきの風かな

心ざしおろかに見えける人につかはしける　　　　なかきが女

待たざりし秋はきぬれど見し人の心はよそになりもゆくかな

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　源是茂朝臣

君をおもふ心ながさは秋の夜にいづれまさると空にしらなむ

ある所にあふみといふ人をいとしのびて語らひ

侍りけるを夜あけてかへりけるを人見てささや

きければその女の許につかはしける　　　　　　坂上つねかげ

鏡山あけてきつれば秋ぎりのけさや立つらむあふみてふ名は

あひしりて侍る女の人にあだ名たち侍りけるに

遣しける　　　　　　　　　　　　　　　　　　　平まれよの朝臣

水鳥のはかなき跡に年をへて通ふばかりのえにこそ有りけれ

かへし

波の上にあとやはみゆる水鳥のうきてへぬらむ年はかずかは

にけむイ

せうそこ遣しける女の許よりいな舟のといふ事を返事にいひて侍りければ頼みていひ渡りける

に猶あひ難きけしき侍りければしばしどありし

をいかなればかくはといへりける返事につかは

しける

ながれよる瀬々の白波淺ければとまるいな舟かへるなるべし

かへし　　　　　　　　　三條右大臣

最上川ふかきにもあへずいな舟の心かろくもかへるなるかな

いと忍びて語らふ人のおろかなるさまに見えけ

かへし　伊勢

世の常の人の心をまだ見ねばなにかこのたび消(け)ぬべきものを

浄藏くらまの山へなむ入るといへりければ　平中興が女

墨染のくらまのやまに入る人はたどるたどるも歸りきななむ

あひしりて侍りける人の稀にのみ見えければ　伊勢

日をへても影にみゆるは玉蔓(たまかづら)つらきながらも絶えぬなりけり

わざとにはあらず時々物いひ侍りける女程久しう問はず(ざりイ)侍りければ　讀人しらず

高砂のまつをみどりと見しことは下の紅葉を知らぬなりけり

かへし

時わかぬ松のみどりもかぎりなきおもひには猶色やもゆらむ

文かはすばかりにて年へ侍りける人に遣しける

見し夢の思ひ出らるるよひごとに言はぬを知るは涙なりけり

題しらず　讀人しらず

白露のおきてあひみむ事よりは衣かへしつつ寐なむとぞ思ふ

人の許につかはしける

言の葉はなけなる物といひながら思はぬためは君もしるらむ

女のもとに遣しける　朝忠朝臣

白波のうち出づる濱の濱千鳥あとやたづぬるしるべなるらむ

女につかはしける　大江朝綱朝臣

おほしまに水をはこびし早船のはやくも人にあひ見てしがな

伊勢なむ人に忘られて歎き侍ると聞きてつかはしける　贈太政大臣

ひたぶるに思ひな侘びそふるさるる人の心はそれよ世のつね

住の江のめにちかからば岸にゐて波の數をもよむべきものを

つらかりける人の許に遣しける

戀ひて經むと思ふ心のわりなさ(きイ)は死にても知れよ忘れ形見に

かへし　　贈太政大臣

若もやとあひ見む事を賴まずはかくする(ふイ)程にまづぞけなまし

題しらず　　讀人しらず

逢ふとだにかたみに見ゆる物(夢イ)ならば忘るる程もあらまし物を

おとにのみ聲をきくかなあしびきの山下水にあらぬものから

秋霧の立ちたるつとめていとつらければ此度ば

かりなむいふべきといへりければ　　伊勢

秋とてや今はかぎりの立ちぬらむ思ひにあへぬ物ならなくに

心のうちに思ふ事やありけむ

いにしへの野中の清水みるからにさしぐむものは涙なりけり

思ふ事侍りて男の許に遣しける

あま雲のはるる夜もなくふるものは袖のみ濡るる涙なりけり

方ふたがるとて男のこざりければ

あふことのかたふたがりて君こずば思ふ心のたがふばかりぞ

相語らひける人の久しう來ざりければ遣しける

常磐にと賴めし事はまつ程の久しかるべき名にこそありけれ

題しらず

濃さまさる涙の色もかひぞなき見すべき人のこの世ならねば

女のもとにつかはしける

すみよしの岸にきよする沖つ波まなくかけても思ほゆるかな

かへし　　伊勢

ひたすらに厭ひ果てぬる物ならば吉野の山にゆくへ知られじ

かへし　伊勢

我が宿と頼む吉野に君しいらば同じかざしをさしこそはせめ

題しらず　讀人しらず

くれなゐに袖をのみこそ染めてけれ君をうらむる涙かかりて

つれなく見えける人に遣しける

紅になみだうつると聞きしをばなどいつはりとわれ思ひけむ

かへし

くれなゐに涙し濃くばみどりなる袖も紅葉と見えましものを

あひすみける人心にもあらで別れにけるが年月をへてもあひ見むと書きて侍りける文を見いでて遣しける

忘らるる身をうつせみのからころも返すはつらき心なりけり

物いひける女のかゞみをかりてかへすとて　讀人しらず

影にだに見えもやすると頼み（めイ）つるかひなくこひをます鏡かな

男の物などいひつかはしける女の田舍の家にまかりてたたきけれども聞きつけずやありけむ門もあけずなりにければ田のほとりにかへるの鳴きけるを聞きて

足引の山田のそほづうちわびて一人かへるの音をぞなきぬる

文遣しける女の母のこひをし戀ひばといへりけるが年頃へにければ遣しける

種はあれどあふ事難き岩の上のまつにて年をふるはかひなし

女につかはしける　贈太政大臣

返事侍らざりければ又かさねて遣しける

みるもなくめもなき海の濱(磯イ)に出てかへるがへるもうらみつる哉

あだに見え侍りける男に　讀人しらず

こりずまの浦の白波たちいでてよるほどもなく歸るばかりか

相知りて侍りける人の近江の方へ罷りければ

關こえてあはづの森のあはずとも淸水に見えし影をわするな

かへし

近けれど何かはしるしあふさかの關のほかぞと思ひたえなむ

つらくなりにける男のもとに今はとて裝束など

返し遣すとて　平なかきが女

今はとて梢にかかるうつせみのからを見むとは思はざりしを

かへし　城(宗イ)巨城

後撰和歌集　巻第十二

戀歌四

女につかはしける　　敏行朝臣

我が戀のかずをかぞへば天の原くもりふたがりふる雨のごと

忘れにける女を思ひ出でてつかはしける　　讀人しらず

うちかへし見まくぞほしき古里のやまと撫子いろやかはれる

女につかはしける　　枇杷左大臣

山彦の聲にたてても年はへぬ我がものおもひを知らぬ人きけ

身よりあまれる人を思ひかけて遣しける　　紀友則

玉藻かる蜑(あま)にはあらねどわたつみの底ひもしらず入る心かな

逢ひ見ては慰むやとぞ思ひしになごりしもこそ戀しかりけれ

わが爲は見るかひもなし忘草わするばかりの戀にしあらねば

忍びて通ひける人に　藤原有好

あひみてもつつむ思の佗しきは人まにのみぞ音はなかれける

物いひける男いひわづらひていかがはせむいな

ともいひはなちてよといひ侍りければ　讀人しらず

小山田のなはしろみづは絕えぬとも心の池のいひははなたじ

方たがへに人の家に人を具してまかりて歸りて

遣しける　源重光朝臣

千代へむと契りおきてし姬松のねざしとめてし宿はわすれじ

物いひける女に蟬のからを包みて遣すとて

これをみよ人もすさめぬ戀すとて音をなくむしのなれる姿を

人のもとより歸りまうできて遣しける　坂上是則

女のもとに遣しける　　源　中　正

あふみぢを案内(しるべ)なくても見てしがな關の此方(こなた)は侘しかりけり

かへし　　下　野

道しらでやみやはしなぬ逢坂の關のあなたはうみといふなり

女の許にまかりたるにはや歸りねとのみいひければ　　讀人しらず

つれなきを思ひしのぶのさね蔓(かづら)はてはくるをも厭ふなりけり

あつよしのみこの家にやまとといふ人につかはしける　　左　大　臣

いまさらに思ひ出でじと忍ぶるを戀しきにこそ忘れわびぬれ

いひかはしける女の今は思ひ忘れねといひ侍りければ　　紀長谷雄朝臣

忘れなむと思ふ心のやすからばつれなき人をうらみましやは（ざらましィ）

宵に女にあひて必ず後にあはむと誓言（ちかごと）をたてさせてあしたに遣しける　藤原滋幹

千早振神ひきかけて誓ひてしこともゆゆしくあらがふなゆめ

院のやまとに扇つかはすとて　右大臣

おもひには我こそ入りて惑はるれあやなく君や涼しかるべき

兼通の朝臣かれがたになりて年こえてとぶらひて侍りければ　元平の親王の母

あらたまの年もこえぬるまつ山のなみの心はいかがなるらむ

もとの女にかへりすむときゝて男のもとに遣しける　讀人しらず

わがためはいとど淺くやなりぬらむ野中の淸水深さまされば

釣殿のみこに遣しける　陽成院御製

筑波根の嶺より落つるみなのがは戀ぞつもりて淵となりける

相しりて侍りける人のまうでこずなりて後心にもあらず聲をのみきくばかりにてまた音もせず侍りければ遣しける　讀人しらず

雁が音のくもゐ遙にきこえしは今はかぎりの聲にぞありける

かへし　兼覽王

今はとて行きかへりぬる聲ならば追風にてもきこえましやは

男のけしきやうやうつらげに見えければ　小町

心からうきたる船にのりそめてひとひも波にぬれぬ日ぞなき

男の心つらく思ひかれにけるを女なほざりになどか音もせぬといひ遣したりければ　讀人しらず

心ざしはありながらえあはざりける人につかはしける

みるめ刈るかたぞあふみになしと聞く玉藻をさへや蜑は潜かぬ

かへし

名のみして逢ふ事なみの繁きまにいつか玉藻を蜑はかづかむ

心ざしありて人にいひかはし侍りけるをつれなかりければいひわづらひて止みにけるを思ひ出でてしきりにいひ送りける返事に心ならぬさまなりといへりければ

葛城やくめぢの橋にあらばこそ思ふこころをながぞらにせめ

人のもとにつかはしける　右大臣

隱沼にすむ鴛鴦の聲たえずなけどかひなきものにぞ有りける

思ひねのよなよな夢にあふことをただ片時のうつつともがな

かへし

時のまのうつつをしのぶ心こそはかなき夢にまさらざりけれ

題しらず　　　　黒主

玉津島ふかき入江をこぐふねのうきたる戀もわれはするかな

紀内親王

津の國のなにはたたまく惜しみこそすくもたく火の下にこがるれ

人の許にまかりていれざりければ簀子にふしあかして歸るとていひいれ侍りける　　　讀人しらず

夢路にもやどかす人のあらませば寐覺に露ははらはざらまし

かへし

涙川ながすねざめもあるものをはらふばかりの露やなになり

人の心つらくなりにければ袖といふ人をつかひにて　　讀人しらず

人しれぬ我が物おもひの涙をば袖につけてぞ見すべかりける

文などおこする男ほかざまになりぬべしと聞きて　　藤原眞忠が妹

山のはにかかる思のたえざらば雲井ながらもあはれと思はむ

町尻の君に文つかはしたりける返事に見つとのみありければ　　もろうぢの朝臣

なき流す涙のいとどそひぬればはかなきみづも袖ぬらしけり（身はイ）

題しらず　　源たのむ

夢のごとはかなき物はなかりけり何とて人に逢ふとみつらむ

心ざし侍りける女のつれなきに　　讀人しらず

かへし　　　伊勢

わたつみとあれにし床を今さらにはらはば袖や沫とうき(きえイ)なむ

心ざしありていひかはしける女のもとより人數ならぬやうにいひ侍りければ　　長谷雄朝臣

汐のまに漁(あさり)する蜑(あま)もおのがよよかひありとこそ思ふべらなれ

題しらず　　贈太政大臣

あぢきなくなどかまつ山波こさむことをば更に思ひはなるる

かへし　　伊勢

岸もなく汐しみちなばまつ山をしたにて波はこさむとぞ思ふ

まもりをおきて侍りける男の心かはりにければ其まもりを返しやるとて　　伊衡朝臣の女いまき

よと共に歎きこりつむ身にしあればなぞ山守の有るかひもなき

飛鳥川せきてとどむるものならば淵瀬になるとなにかいはせむ

女四のみこにおくり侍りける　右大臣

あしたづの澤邊に年はへぬれどもこころは雲の上にのみこそ

かへし

芦鶴の雲井にかかる心あらばよをへて澤に住まずぞあらまし

消息つかはしける女のまたこと人に文つかはすと聞きて今は思ひたえねといひ送りて侍りける

返事に　贈太政大臣

松山につらきながらも波こさむことはさすがに悲しきものを

宮づかへし侍りける女程久しくありて物いはむといひ侍りけるに遲くまかり出でければ　枇杷左大臣

宵のまにはや慰めよいそのかみふりにし床もうちはらふべく

あひしりて侍りける女の心ならぬやうに見え侍りければつかはしける　藤原後蔭朝臣

いづ方に立ち隱れつつ見よとてか思ひぐまなく人のなりゆく

男の心やうやうかれがたに見えゆきければ　土佐

つらきをも憂をも外に見しかども我が身に近きよにこそ有りけれ

女に心ざしあるよしをいひ遣しければ世の中の人の心さだめなければ頼み難きよしをいひて侍りければ　在原元方

淵は瀬になり變るてふ飛鳥川わたり見てこそ知るべかりけれ

題しらず　伊勢

厭はるる身をうれはしみいつしかと飛鳥川をも頼むべらなり

かへし　贈太政大臣

同じ所に宮づかへし侍りて常に見ならしける女に遣しける

躬恒

伊勢の海にしほやくあまの藤衣なるとはすれどあはぬ君かな

題しらず

是則

わたのそこかづきて知らむ君がためおもふ心の深さくらべに

人のをとこにてはべる人をあひしりてつかはしける

右近

からころもかけて頼まぬ時ぞなき人のつまとは思ふものから

人の許にまかれりけるに簾のとにすゑて物いひけるを簾を引きあげければいたく騷ぎければまかりかへりて又のあしたにつかはしける

藤原守正

あらかりし波の心はつらけれどすごしによせし聲ぞこひしき

題しらず

賀茂朝臣女

夕されば我が身のみこそ悲しけれいづれのかたに枕さだめむ

在原元方

夢にだにまだ見えなくに戀しきはいつにならへる心なるらむ

壬生忠岑

思ふてふ事をぞねたく古しける君にのみこそいふべかりけれ

戒仙法師

あなこひし行きてや見まし津の國のいまもありてふ浦の初島

やむことなき事によりて遠き所にまかりてたた

む月ばかりになむまかり歸るべきといひてまか

りくだりて道よりつかはしける

貫之

月かへて君をば見むといひしかど日だに隔てず戀しきものを

けるにかかるからに疎き心地なむするといへりければ

小野遠興がむすめ

つらからぬ中にあるこそ疎しといへ隔て果てし衣にやはあらぬ

五節の所にて閑院のおほい君につかはしける

もろまさの朝臣

ときはなる日蔭のかづら今日しこそ心の色にふかく見えけれ

かへし

誰となくかかるおほみに深からむ色をときはにいかが頼まむ

藤壺の人々月夜にありきけるを見て一人がもとに遣しける

清正

たれとなくおほろに見えし月影にわくる心をおもひしらなむ

左兵衛督師尹朝臣に遣しける

本院兵衛

春をだに待たで鳴きぬる鶯はふるすばかりのこころなりけり

逢ひ見ても別るゝ事のなかりせばかつがつ物は思はざらまし

人のもとより曉かへりて　　閑院左大臣

いつのまに戀しかるらむ唐衣ぬれにしそでのひるまばかりに

　　貫之

別れつる程もへなくに白波の立ちかへりても見まくほしきか

女のもとにつかはしける　　これまさの朝臣

人しれぬ身はいそげども年をへてなど越えがたきあふ坂の關

かへし　　小野好古朝臣女

東路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えむあふさかの關

女のもとに遣しける　　藤原清正

つれもなき人にまけじとせし程に我もあだ名は立ちぞしにける

かれがたになりにける男の許に裝束調じて送り

あふさかの木の下露にぬれしよりわが衣手はいまもかわかず

題しらず　躬恒

君をおもふ心を人にこゆるぎのいその玉藻やいまもからまし

親ある女に忍びて通ひけるを男もしばしば人に

しられじといひ侍りければ　讀人しらず

なき名ぞと人にはいひて有りぬべし心のとはばいかが答へむ

なき名たちける頃　伊勢

清けれど玉ならぬ身の佗しきはみがける物にいはぬなりけり

忍びてすみ侍りける女につかはしける　敦忠朝臣

逢ふことをいざほに出なむしの薄忍びはつべき物ならなくに

あひ語らひける人これもかれも包む事ありて離

れぬべく侍りければ遣しける　讀人しらず

女の許にきぬをぬぎ置きてとりに遣すとて　伊尹朝臣

すずかやま伊勢をの海士の捨衣しほなれたりと人やみるらむ

題しらず　貫之

いかでなほ人にもとはむ曉のあかぬわかれやなにに似たりと

在原行平朝臣

戀しき（さイ）に消えかへりつつ朝露のけさはおきゐむ心地こそせね

讀人しらず

しののめにあかでわかれし袂をぞ露やわけしと人は（のイ）とがむる

平中興

こひしき（さイ）も思ひこめつつあるものを人にしらるる涙なになり

からうじてあへりける女につつむ事侍りて又え

あはず侍りければ遣しける　兼輔朝臣

かへし　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

からころもたつをゝしみし心こそふたむら山の關となりけめ

人のもとに遣しける　　　　　　　　清成が女

夢かとも思ふべけれど覺束な寐ぬに見しかばわきぞかねつる

少將實忠通ひ侍りける所をさりてこと女につき

てそれより春日の使に出で立ちてまかりければ　　もとの女

空しらぬ雨にもぬるゝ我が身かな三笠の山をよそにききつゝ

朝顏の花まへにありけるざうしより男のあけて

出で侍りけるに　　　　　　　　　讀人しらず

諸共にをるともなしにうちとけて見えにけるかな朝顏のはな

内にまゐりて久しう音せざりける男に　　　　女

もゝしきは斧の柄くたす山なれや入りにし人の音づれもせぬ

なに書き付け侍りける　平定文

昔せし我がかねごとの悲しきはいかに契りしなごりなるらむ

かへし　讀人しらず

うつつにて誰ちぎりけむ定めなき夢路に迷ふわれはわれかは

おほやけづかひにて東の方へまかりける程にはじめてあひしりて侍る女にかくやんごとなき道なれば心にもあらずまかりぬるなど申して下り侍りけるを後に改め定めらるる事ありてめしかへされければこの女聞きて喜びながら問ひに遣したりければ道にて人の心ざし送りて侍りける

くれはとりといふ綾を二むら包みて遣しける　淸原諸實

くれはとりあやに戀しくありしかば二むら山もこえずなりにき

かへし　　源信明

死ぬ死ぬと聞く聞くだにも相見ねば命をいつの世にか殘さむ

時々みえける男のゐる所のさうじに鳥のかたをかきつけて侍りければあたりにおしつけはべりける　　本院侍從

繪にかける鳥とも人を見てしがな同じところを常にとふべく

大納言國經朝臣の家に侍りける女に平定文いと忍びて語らひ侍りて行末まで契り侍りける頃この女俄に贈太政大臣に迎へられて渡り侍りにければ文だにも通はす方なくなりにければかの女の子のいつつばかりなるが本院の西の對に遊びありきけるを呼びよせて母に見せ奉れとてかひ

みやづかへする女の逢ひ難く侍りけるに　　貫之

たむけせぬわかれする身の侘しきは人目を旅と思ふなりけり

かりそめなる所にはべりける女に心かはり（にイ）ける男のここにてはかくびんなき所なれば心ざしはありながらなむえ立ちよらぬといへりければ所をかへて待ちけるに見えざりければ　　女

宿かへて待つにも見えずなりぬればつらき所の多くもある哉

題しらず　　讀人しらず

思はむと頼めし人はかはらじを訪はれぬ我やあらぬなるらむ

源さねあきら頼む事なくば（思ふ事ならずばイ）死ぬべしといへりければ　　中務

徒（いたづら）にたびたび死ぬといふめれば逢ふには何をかへむとすらむ

後撰和歌集　卷第十一

戀歌三

女のもとにつかはしける　　三條右大臣

名にしおはば逢坂山のさねかづら人にしられでくる由もがな

在原元方

戀しとはさらにもいはじ下紐のとけむを人はそれと知らなむ

かへし　　讀人しらず

下紐のしるしとするも解けなくに語るが如は戀ひずもある哉

女のいと思ひ離れていふに遣しける

現にもはかなきことの佗しきはねなくに夢とおもふなりけり

かへし　　おほつぶね

行く水の瀬毎にふまむ跡ゆゑに頼むしるしを（もイ）いづれとか見む

人の許に初めて文遣したりけるに返事はなくて
ただ紙をひき結びて（とイ）返したりければ　　源もろあきらの朝臣

つまにおふることなし草をみるからに頼む心ぞ數まさりける

かくておこせて侍りけれど宮づかへする人なり
ければいとまなくて又のあしたに常夏の花につ
けておこせて侍りける　　讀人しらず

置く露のかかるものとは思へどもかれせぬものは常夏（なでしこイ）の花

かへし

かれずともいかが頼まむ撫子の花はときはの色にしあらねば

といひて侍りける返事に

くさ枕このたびへつる年月のうきはかへりてうれしからなむ

をとこの程久しうありてまできてみ心のいとつらさに十二年の山ごもりしてなむ久しうきこえざりつるといひ入れたりければ呼び入れて物などいひて返しつかはしけるが又おともせざりければ

出でしより見えずなりにし月影は又山のはに入りやしにけむ

かへし

足引の山に生ふてふもろかづら諸ともにこそ入らまほしけれ

人を思ひかけて遣しける　平定文

濱千鳥たのむをしれと蹈みそむる跡うちけつなわれをこす波

人を思ひかけて心地もあらずやありけむ物もいはずして日くるればおきもあがらずと聞きてこのおもひかけたる女の許よりなどかくすきずきしくはといひて侍りければ

いはで思ふ心ありそのはまかぜに立つ白波のよるぞわびしき

心かけて侍りけれどいひつかむ方もなくつれなきさまの（にイ）見えければつかはしける

ひとりのみ戀ふればくるし呼子鳥聲になき出て君にきかせむ

をとこの女に文つかはしけるを返事もせで絶えにければ又つかはしける

ふしなくて君がたえにし白糸はよりつき難き物にぞありける

をとこの旅よりまできて今なむまできつきたる

れば　　　　　　　　　　讀人しらず

獨寐の佗しきまゝに起き居つゝ月をあはれといみぞかねつる

男のもとに遣しける

唐錦をしき我が名はたちはてゝ如何にせよとか今はつれなき

はじめて人にのたまひ遣しける

人づてにいふ言の葉の中よりぞ思ひつくばのやまは見えける

みそかに人を見て遣しける　　　　　貫之

便にもあらぬおもひのあやしきは心をひとにつくるなりけり（わが身イ）

人の家より物見に出づる車を見て心づきにおほえ侍りければたそと尋ねとひければいでける家のあるじと聞きてつかはしける　　　　　讀人しらず

ひとづまに心あやなくかけはしの危きものは戀にぞありける

逢ふことは遠山ずりのかり衣きてはかひなき音をのみぞなく
（山どりのすり衣イ）
題しらず　あつよしのみこ
深くのみ思ふ心はあしのねのわけても人にあはむとぞおもふ
忍びてあひわたりける人に　藤原忠國
漁火のよるはほのかにかくしつつありへば戀の下にけぬべし
寛平の帝御ぐしおろさせたまうての頃御帳のめぐりにのみ人はさぶらはせ給ひて近うもめしよせられざりければかきて御帳に結びつけける　小八條御息所
たちよらば影ふむばかり近けれど誰かなこその關をすゑけむ
男のもとに遣しける　土佐
わがそでは名にたつ末の松山かそらより波のこえぬ日はなし
（うイ）
月をあはれといふはいむなりといふ人の有りけ

今はてふ心つくばのやま見ればこずゑよりこそ色かはりけれ
女の許より歸りてあしたに遣しける　源重光朝臣
歸りけむ空もしられずをばすての山よりいでし月を見しまに
兼輔朝臣にあひはじめて常にしもあはざりける
程に　清正母
ふりとげぬ君が雪げのしづくゆゑたもとにとけぬ氷しにけり
方ふたがりける頃たがへにまかるとて　藤原有文朝臣
片時もみねば戀しき君をおきてあやしや幾夜ほかに寐ぬらむ
題しらず　大江千古
思ひやる心にたぐふ身なりせばひと日にちたび君はみてまし
忍びて通ひける女の許より狩さうぞく送りて侍・
りけるにすれるかりきぬ侍りけるに　元良のみこ

題しらず　藤原治方

世の常の音をしなかねば逢ふ事の涙の色もことにぞありける

大伴黒主

白波のよするいそまを漕ぐ舟のかぢとりあへぬ戀もするかな

源うかぶ

戀しさはねぬに慰むともなきにあやしくあはぬめをも見る哉

年を經ていひわたりける女に　源すぐる

久しくもこひわたるかな住の江の岸に年ふるまつならなくに

題しらず　藤原清正

逢ふ事のよよをへだつるくれ竹のふしの數なき戀もするかな

かれがたになりにける人に末もみぢたる枝につけてつかはしける　讀人しらず

忘られて思ふなげきの茂るをや身をはづかしの森といふらむ

人の心がはりければ　右近

思はむと頼めし人(卿イ)はありと聞くいひし言の葉いづちいにけむ

定國の朝臣の御息所と清蔭の朝臣とみちのくに
にある所々をつくして歌によみかはしていまは
よむべき所なしといひければ　源清蔭朝臣

さてもなほ籬(まがき)の嶋のありければ立ちよりぬべく思ほゆるかな

こと女の文を(てうらみければイ)妻(め)の見むといひけるに見せざりけ(侍らずと)
れば恨みけるに其文の裏にかきつけて遣しける　讀人しらず

これはかくうらみ所もなき物をうしろめたくは思はざらなむ

久しうあはざりける女に遣しける　源さねあきら

思ひきや逢ひ見ぬ事をいつよりと數ふばかりになさむ物とは

女の許にまかりたりけるをただにてかへし侍りければいひいれ侍りける　貫之

うらみても身こそつらけれ唐衣きていたづらに返ると思へば

あひしりて侍りける人を久しうとはずしてまかりたりければ門より返し遣しけるに　壬生忠岑

住の江のまつに立ちよる白波のかへる折にやねはなかるらむ

をとこの許より今はこと人あんなればといへりければ女にかはりて　讀人しらず

思はむと頼めし事もあるものをなき名をたてでただに忘れね

かへし

春日野のとぶひの野守みし物をなき名といはば罪もこそうれ

題しらず

かげろふに見しばかりにや濱千鳥ゆくへもしらぬ戀に惑はむ

あり所しりながらえあふまじかりける人につかはしける　藤原兼茂朝臣

わたつみのそこの在所(ありか)は知りながら潜きていらむ波のまぞなき

女のもとに遣しける　橘實利朝臣

つらしともおもひぞはてぬ涙川ながれて人をたのむこころは

かへし　讀人しらず

流れてとなにたのむらむ涙川かげ見ゆべくもおもほえなくに

人をいひわづらひて遣しける　平定文

何事を今はたのまむちはやぶる神もたすけぬ我が身なりけり

かへし　おほつぶね

ちはやぶる神も耳こそなれぬらしさまざま祈る年もへぬれば

題しらず　在原元方

みるめかる渚(なぎさ)やいづこあふごなみ立ちよる方も知らぬわがみは

東宮に鳴門といふ戸のもとに女と物いひけるに
親の戸をさしてゐて入りにければ又のあしたに
遣しける　藤原滋幹

鳴門よりさしいだされし船よりも我ぞよるべもなき心地せし

題しらず　讀人しらず

高砂のみねのしらくもかかりける人のこころを頼みけるかな

長明のみこの母の更衣さとに侍りけるにつかは
しける　延喜御製

外(よそ)にのみまつぞはかなき住の江の行きてさへこそ見まくほしけれ

題しらず　源等朝臣

涙にもおもひの消ゆる物ならばいとかく胸はこがさざらまし

坂上是則

しるしなき思やなぞと蘆たづの音になくまでにあはず佗しき

年久しくかよはし侍りける人に遣しける

貫之

玉の緒のたえて短きいのちもてとしつきながき戀もするかな

題しらず

平定文

我のみや燃えてきえなむ世と共に思もならぬ富士の嶺のごと

かへし

きのめのと

ふじのねの燃え渡るとも如何せむ消ちこそしらね水ならぬみは

心ざせる女の家のあたりにまかりていひいれ侍りける

貫之

わびわたる我が身は露をおなじくば君が垣根の草にきえなむ

住の江のなみにはあらねど夜とともに心を君によせ渡るかな

兵衞に遣しける　讀人しらず

見ぬほどに年の變れば逢ふ事のいやはるばると思ほゆるかな

まかり出でて御文つかはしたりければ　中將更衣

今日すぎば死なまし物を夢にても何處をはかと君がとはまし

御かへし　延喜御製

現にぞとふべかりける夢とのみ惑ひしほどやはるけかりけむ

題しらず　藤原ちかぬ

流れてはゆくかたもなし淚川わがみのうらやかぎりなるらむ

在原棟梁

我が戀の數にしとらばしろたへの濱の眞砂もつきぬべらなり

貫之

おほつぶねに物のたうびつかはしけるを更にきき入れざりければ遣しける　元貞親王（元良イ）

大かたはなぞやわが名のをしからむ昔のつまと人にかたらむ

かへし　おほつぶね

人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今もしらずとをいはむ

返事せざりける女の文をからうじてえて　讀人しらず

あと見れば心なぐさのはまちどり今は聲こそきかまほしけれ

同じ所にて見かはしながらえあはざりける女に

かはとみてわたらぬ中に流るるはいはで物おもふ涙なりけり

心ざしありける女に遣しける　橘公賴朝臣

あま雲に鳴きゆく雁の音にのみ聞き渡りつつ逢ふよしもなし　貫之

をとこ侍る女をいとせちにいはせ侍りけるを女
いとわりなしといはせければ　　元良のみこ

わりなしといふこそ且は嬉しけれおろかならずと見えぬと思へば

女の許より心ざしの程をなむえ知らぬといへり
ければ　　藤原興風

我が戀をしらむと思はば（ならばイ）田子の浦にたつらむ波の數を數へよ

いひかはしける女の許よりなほざりにいふにこ
そあめれといへりければ　　貫之

色ならばうつるばかりも染めてまし思ふ心をえやは見せける

物のたうびける女の許に文遣したりけるに心地
あしとて返事もせざりければ又つかはしける　　大江朝綱朝臣

足引のやまひはすともふみかよふ跡をもみぬは苦しきものを

難波潟かりつむ蘆のあしづつのひとへも君をわれやへだつる

遠き所にまかりける道よりやむことなき事によりて京へ人遣しけるついでに文のはしにかきつけ侍りける　　讀人しらず

わがごとや君もこふらむ白露のおきてもねても袖ぞかわかぬ

あひしりて侍りける人の許より久しうとはずしていかにぞまだいきたりやとたはぶれて侍りければ

つらくとも有らむとぞ思ふ外にても人やけぬると聞かまほしさに

人のもとにしばしばまかりけれどあひ難く侍りければ物にかきつけ侍りける　　在原業平朝臣

暮れぬとてねて行くべくもあらなくに辿る辿るも歸る優れり

あづまぢの佐野の船橋かけてのみ思ひわたるをしる人のなき

人につかはしける　紀長谷雄朝臣

ふしてぬる夢路にだにもあはぬ身はなほ淺ましき現とぞ思ふ

女につかはしける　讀人しらず

天の戸をあけぬあけぬといひなしてそらなきしつる鳥の聲哉

よもすがらぬれて佗びつる（つイ）唐衣あふさかやまに道まどひして

男につかはしける

思へどもあやなしとのみいはるれば夜の錦のここちこそすれ

女のもとに遣しける

音にのみききこし三輪の山よりも杉の數をばわれぞ見えま（にイ）し

おのれを思ひ隔てたる心ありといへる女の返事

に遣しける　兼輔朝臣

ければ　藤原顯忠朝臣

鶯のくもゐに侘びてなくこゑを春のさがとぞわれはききつる

ふみかよはしける女のこと人にあひぬと聞きて

つかはしける　平時望朝臣

かくばかり常なき世とはしりながら人を遙になにたのみけむ

男のこざりければ遣しける　小町があね（いとこイ）

我がかどのひとむら薄かりかはむ君が手なれの駒もこぬかな

題しらず　枇杷左大臣

よをうみの沫と消えぬる身にしあれば恨むる事ぞ數なかりける

かへし　伊勢

わたつみと頼めし事（のイ）もあせぬれば我ぞわが身のうらは恨むる

人のもとに遣しける　源等朝臣

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　橘　敏　仲

わび人のそほつてふなる涙川おりたちてこそ濡れわたりけれ

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　輔

ふちせともこころも知らず涙川おりやたつべき袖のぬるるに

又　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　敏　仲

こころみになほおりたたむ涙川うれしき瀬にも流れあふやと

わざとにはあらで時々物いひふれ侍りける女の

心にもあらで人にさそはれてまかりにければと

のるものにかきつけて遣しける　　　　　　　藤原敦忠朝臣

かかりける人の心をしらつゆのおけるものとも頼みけるかな

あひしりて侍りける女を久しうとはず侍りけれ

ばいといたうなむ侘びはべると人のつげはべり

人をいひはじむとて　　兼覧王

あしびきの山下しげくはふ葛のたづねて戀ふる我としらずや

（一本）年月をへて忍びていひ侍りける人に　　忠房朝臣

隱沼（かくれぬ）にしのびわびぬる我が身かな井手の蛙となりやしなまし

女のざうしによるよる立ちよりつつ物などいひて後　　藤原輔文（仁イ）

阿武隈の霧とはなしによもすがら立ち渡りつつよをもふる哉

文つかはせども返事もせざりける女の許に遣しける　　讀人しらず

あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき（くイ）

くにもちが音もせざりければ遣しける　　本院右京

ともかくもいふ言の葉の見えぬかないづらは露のかかり所は

後撰和歌集 卷第十

戀歌二

女の許にはじめて遣しける　藤原忠房朝臣

人をみて思ふおもひは（もイ）ある物を空に戀ふるは（ぞイ）はかなかりけり（るイ）

壬生忠岑

ひとりのみ思へ（ふ・はイ）ばくるしいかにしておなじ心に人ををしへむ

紀友則

わが心いつならひてか見ぬ人をおもひやりつつ戀しかるらむ

まだ年若かりける女につかはしける　源中正

葉を若みほにこそいでねはなすすき下の心にむすばざらめや

女のあはず侍りけるに

しらなみのよるよる岸にたちよりてねも見しものを住吉の松

男に遣しける

ながらへてあらぬまでにも言の葉の深きはいかに哀なりける　リイ

女につかはしける

人しれずおもふ心はおほしまのなるとはなしに歎くころかな

男のもとに遣しける　　　　中務

はかなくて同じ心になりにしを思ふがごとはおもふらむやぞ

かへし　　　　源信明

侘しさをおなじ心ときくからに我が身をすてて君ぞかなしき

罷らずなりにける女の人に名たちけれ(もイ)ば遣しける

さだめなくあだに散りぬる花よりは常磐の松の色をやはみぬ

かへし　　　　讀人しらず

住吉のわが身なりせば年ふともまつよりほかの色をみましや

をとこにつかはしける

にもはかなき事のあやしきは寐なくに夢の見ゆるなりけり

大輔につかはしける　右大臣

いろふかく染めし袂のいとどしく涙にさへもこさまさるかな

題しらず　讀人しらず

見る時はことぞともなく見ぬ時はことあり顔に戀しきやなぞ

男のこむとてこざりければ

山里のまきの板戸もささざりきたのめし人を待ちしよひより

はじめて女のもとに遣しける

行く方もなくせかれたる山水のいはまほしくも思ほゆるかな

女につかはしける

人の上のこととしいへば知らぬかな君も戀する折もこそあれ

かへし

つらからば同じ心につらからむつれなき人を戀ひむともせず

（　　）心みじかきやうに聞ゆる人なりといひければ　讀人しらず

伊勢の海にはへてもあまる拷繩のながき心はわれぞまされる

　人につかはしける

色にいでて戀すてふ名ぞたちぬべき涙にそむる袖のこければ

かく戀ふる物としりせば夜はおきて明くればきゆる露ならましを

逢ひもみず歎きもそめずありし時思ふ事こそ身になかりしか

戀のごとわりなき物はなかりけりかつ睦れつつかつぞ戀しき

　女のもとに遣しける

わたつ海に深き心のなかりせばなにかは君をうらみしもせむ

みなかみにいのるかひなく涙川うきても人をよそに見るかな

　かへし

祈りける水上さへぞうらめしき今日よりほかに影のみえねば

かへし

こがらしの森の下草かぜはやみ人のなげきは生ひそひにけり

男のこと女迎ふるを見て親の家に罷り歸るとて

別をば悲しき物とききしかどうしろやすくもおもほゆるかな

題しらず

なきたむる袂こほれるけさ見れば心とけてもきみをおもはず

身をわけてあらまほしくぞ思ほゆる人は苦しといひける物を

雲井にて人を戀しと思ふかなわれはあしべのたづならなくに

人につかはしける　　源ひとしの朝臣

淺茅生の小野のしのはら忍ぶれどあまりてなどか人の戀しき

兼覽王イ　兼覽王

雨やまぬ軒のたまみづ數しらず戀しきことのまさるころかな

男のはじめて女の許にまかりてあしたに雨のふるに歸りてつかはしける

いまぞしるあかぬわかれの曉は君をこひぢに濡るるものとは

かへし

よそにふる雨とこそきけ覺束な何をか人のこひぢといふらむ

つらかりける男に

たえはつる物とはみつつささがにの糸をたのめる心ほそさよ

かへし

うちわたしながき心はやつ橋のくもでに思ふことはたえせじ

思ふ人侍りける女に物のたうびけれどつれなかりければ遣しける

思ふ人おもはぬ人のおもふ人おもはざらなむおもひ知るべく

磐瀬山たにのした水うちしのび人のみぬまはながれてぞふる

人をあひしりて後久しう消息も遣さざりければ

嬉しげに君が頼めし言の葉はかたみに汲める水にぞ有りける

題しらず

行きやらぬ夢路にまどふ袂にはあまつそらなき露ぞおきける（やおくらむイ）

身ははやく奈良の都となりにしを戀しき事のまたもふりぬる（かイ）

住吉のきしの白波よるよるは海士(あま)のよそめに見るぞかなしき

君こふとぬれにし袖の乾かぬはおもひの外(ほか)にあればなりけり

あはざりし時いかなりしものとてか唯今のまも見ねば戀しき

世の中に忍ぶる戀のわびしきはあひての後に（のイ）あはぬなりけり

戀をのみ常にするがの山なれば富士のねにのみ泣かぬ日はなし

君により我が身ぞつらき玉だれのみずば戀しと思はましやは

かへし　たいふのごといふ人（いひける）

植ゑてみる我は忘れであだ人にまづ忘らるる花にぞありける

平定文が許より難波の方へなむまかるといひお
くりて侍りければ　土佐

浦わかずみるめかるてふ蜑（あま）の身はなにか難波の方へしもゆく

かへし　定文

君を思ふ深さくらべに津の國の堀江みにゆく我にやはあらぬ

つらくなりにける人につかはしける　伊勢

いかでかく心一つをふたしへに憂くもつらくもなして見すらむ

題しらず　讀人しらず

ともすれば玉にくらべしますかがみ人の寶と見るぞかなしき

忍びたる人につかはしける

とはざりければ女も又いろごのみなる名たちけるを恨み侍りける返事に　源たのむがむすめ

つらしともいかがうらみむ郭公わがやどちかく鳴く聲はせで

かへし　あつよしのみこ

里ごとになきこそ渡れほととぎすすみか定めぬ君たづぬとて

えがたかるべき女を思ひかけてつはしける　春道列樹

數ならぬみやまがくれの郭公ひとしれぬ音をなきつつぞふる

いと忍びたる女にあひ語らひて後人めにつつみて又あひ難く侍りければ　これただのみこ

あふ事のかた糸ぞとは知りながら玉の緒ばかり何によりけむ

女の許より忘草に文をつけておこせて侍りければ　讀人しらず

思ふとはいふ物からにともすれば忘るる草の花にやはあらぬ

月日をも數へけるかな君こふる數をもしらぬ我が身なりけり　なになりイ

女に年をへて心ざしある由をのたまひわたりけるを女なほ今年をだに待ちくらせとたのめけるをその年もくれてあくる春までいとつれなく侍りければ

このめはる春の山田をうちかへし思ひやみにし人ぞこひしき

心ざしありながらえあはず侍りける女のもとにつかはしける　贈太政大臣

ころをへてあひみぬ時はしらたまの涙も春はいろまさりけり

かへし　伊勢

人こふる涙は春ぞぬるみけるたえぬおもひのわかすなるべし

男のここかしこに通ひすむ所おほくて常にしも

をやみせず雨さへふれば澤水のまさるらむとも思ほゆるかな

題しらず

夢にだに（をさへイ）見ることぞなき年を經て心のどかにぬる夜なければ

見そめずて（ずしてイ）あらまし物を唐衣たつ名のみしてきる夜なきかな

女のもとに遣しける

かれはつる花の心はつらからで時すぎにける（たイ）身をぞうらむる

かへし

あだにこそ散ると見るらめ君にみなうつろひにける花の心を

その程に歸りこむとて物にまかりける人の程を

過ぐしてござりければ遣しける

こむといひし月日を過す姨捨（をばすて）の山のはつらき物にぞありける

かへし

淺してふ事をゆゆしみ山の井はほりしにごりに影はみえぬぞ

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

幾たびかいく田の浦に立ちかへる波に我が身をうち濡すらむ

かへし

立ち歸りぬれては干ぬる汐なれば生田の浦のさがとこそみれ

女の許に

逢ふ事はいとど雲井の大空に立つ名のみしてやみぬばかりか

かへし

よそながらやまむともせず逢ふ事は今こそ雲の絶間なるらめ

又をとこ

今のみと賴むなれども白雲のたえまはいつか有らむとすらむ
（とのみイ）

かへし

題しらず

光まつつゆに心をおける身はきえかへりつつ世をぞうらむる

ある所にあふみといひける人のもとにつかはし
ける　　貫之

汐みたぬ海ときけばやよと共にみるめなく(どィ)して年のへぬらむ

あつよしの親王まうできたりければ逢はずして
かへして又のあしたに遣しける　　桂のみこ

唐衣きてかへりにしさ夜すがらあはれと思ふを恨むらむはた

あひ待ちける人の久しう消息なかりければ遣し
ける　　紀のめのと

影だにも見えずなりゆく山の井は淺きよりまた水やたえにし

かへし　　平定文

題しらず

ほしがてに濡れぬべきかな唐衣乾くたもとのよよになければ

よと共にあぶくま川の遠ければそこなる影を見ぬぞわびしき

わがごとくあひおもふ人のなき時は深き心もかひなかりけり

いつしかと我がまつ山に今はとてこゆなる波にぬるる袖かな

女のもとにつかはしける

人ごとは誠なりけりしたひもの解けぬにしるき心とおもへば

結び置きし我が下紐の今までにとけぬは人のこひぬなりけり

女のもとに遣しける

ほかの瀬は深くなるらし飛鳥川きのふの淵ぞ我が身なりける

かへし

淵瀬ともいさやしら波たち騒ぐ我が身ひとつはよる方もなし

女につかはしける

人こふる心ばかりはそれながら我はわれにもあらぬなりけり

まかる所しらせず侍りける頃又あひしりて侍りけ
る男のもとより日頃尋ね侘びてうせにたると
なむ思ひつるといへりければ
伊勢

思川たえずながるゝ水のあわのうたかた人にあはで消えめや

題しらず
三統公忠

おもひやる心はつねに通へどもあふ坂の關こえずもあるかな

女につかはしける
讀人しらず

消え果ててやみぬばかりか年をへて君をおもひの驗なければ

かへし

思ひだに驗なしてふ我が身にぞあはぬなげきの數はもえけれ

て遣しける　　　　　　　　　　するが

まどろまぬかべにも人を見つるかな正しからなむ春の夜の夢

あひしりて侍りける人のもとに返事見むとてつ

かはしける　　　　　　　　元良親王

くやくやと待つ夕暮といまはとてかへる朝といづれまされる

かへし　　　　　　　　　藤原かづみ

夕暮はまつにもかかる白露のおくるあしたや消えははつらむ

大和にあひしりて侍りける人のもとにつかはし

ける　　　　　　　　　　讀人しらず

うちかへし君ぞ戀しき大和なるふるのわさ田の思ひ出でつつ

かへし

秋の田のいねてふ事をかけしかば思ひ出づるが嬉しげもなし

後撰和歌集　巻第九

戀歌一

からうじてあひしりて侍りける人につつむ事ありて又あひがたく侍りければ　　・源宗于朝臣

東路のさやの中山なかなかにあひみてのちぞわびしかりける

忍びたりける人に物語し侍りけるを人のさわがしく侍りければまかりかへりて遣しける　　貫之

曉と(をイ)なにかいひけむ別るればよひもいとこそわびしかりけれ

源おほきが通ひけるを後々はまからず(とぶらはずイ)なり侍りにければ隣の壁のあなよりをほきをはつかに見

關こゆる道とはなしにちかながら年にさはりて春をまつかな

みくしげどのの別當に年をへていひわたり侍り

けるをえあはずして其年のしはすのつごもりの

日遣しける　　　　　　　　　藤原敦忠朝臣

物思ふと過ぐる月日も知らぬまに今年もけふに果てぬとかきく

降る雪はきえでもしばしとまらなむ花も紅葉も枝になきころ

涙川身なぐばかりのふちはあれど氷とけねば行くかたもなし

降る雪に物思ふわが身おとらめや積り積りて消えぬばかりぞ

よるならば月とぞみまし我が宿の庭しろたへにふりつもる雪

梅が枝に降りおける雪を春近みめのうちつけに花とこそ見れ

いつしかと山の櫻もわがごとや（くイ）年のこなたにはるをまつらむ

年ふかくふりつむ雪を見るときぞこしの白根にすむ心地する

年くれてはるあけがたになりぬれば花のためしにまがふ白雪

春ちかくふる白雪はをぐらやまみねにぞ花のさかりなりける

冬の池にすむにほ鳥のつれもなく下にかよはむ人にしらすな

むばたまのよるのみ降れる白雪はてる月影のつもるなりけり

この月のとしのあまりにたら（たイ）ざらば鶯ははや鳴きぞしなまし

思ひつつ寐なくにあくる冬の夜の袖の氷は解けずもあるかな
あらたまの年をわたりてあるが上にふりつむ雪のたえぬ白山
まこもかる堀江にうきてぬる鴨の今宵の霜にいかにわぶらむ
白雲のおりゐる山とみえつるは降りつむ雪のきえぬなりけり
故郷のゆきは花とぞふりつもるながむるわれも思ひきえつつ
流れゆく水こほりぬる冬さへやなほうき草のあとはとどめぬ
心あてに見ばこそわかめ白雪のいづれか花の散るにたがへる
あまのがは冬は氷にとぢたれや石間にたぎつおとだにもせぬ
おしなべて雪のふれれば我が宿の杉をたづねてとふ人もなし
冬の池の水にながるるあしかもの浮寐ながらに幾夜へぬらむ
山ちかみめづらしげなくふる雪の白くやならむ年つもりなば
松の葉にかかれる雪のうれをこそ冬の花とはいふべかりけれ

年ごとにしらがの數をますかがみ見るにぞ雪の友は知りける

題しらず　讀人しらず

年ふれどいろもかはらぬ松が枝にかかれる雪を花とこそみれ
しもがれの枝となわびそ白雪のきえぬかぎりは花とこそ見れ
こほりこそ今はすらしもみ吉野の山の瀧つ瀬こゑもきこえず
夜を寒みね覺てきけば鴛ぞ鳴くはらひもあへず霜やおくらむ

雪のすこしふる日女に遣しける　藤原かげもと

かつきえて空もみだるる沫雪は物おもふ人のこころなりけり

師氏朝臣のかりして家の前よりまかりけるをききて　讀人しらず

白雪のふりはへてこそ訪はざらめとくる便をすぐさざらなむ

題しらず

式部卿敦實のみこ忍びてかよふ所はべりけるをのちのちたえだえになりたる(侍りければイ)ころほひ妹の前齋宮のみこの許よりこの女のもとにこの頃はいかにぞとありければ其返事に女

白山にゆきふりぬればあとだえて今はこしぢに人もかよはず

雪のあした老を歎きて　　貫之

降りそめて友まつ雪はむばたまのわが黒髪のかばるなりけり

かへし　　兼輔朝臣

黒髪の色ふりかぶる白雪のまちいづる友はうとくぞありける

[illegible]又[illegible]　　貫之

黒髪と雪との中のうきみれば友かがみをもつらしとぞおもふ

かへし　　兼輔朝臣

神無月しぐれふるにもくるる日を君まつほどは長しとぞ思ふ

題しらず

身をわけて霜やおくらむあだ人の言の葉さへに枯れも行く哉

冬の日むさしに遣しける

人しれず君につけてし我が袖のけさしも解けず氷るなるべし（りけりィ）

題しらず

かきくらし霰ふりしけしらたまをしける庭とも人の見るべく

神無月しぐるる時ぞみよし野の山のみゆきも降りはじめける

けさの嵐さむくもあるかな足引の山かきくもり雪ぞふるらし

黒髪の白くなり行く身にしあればまづ初雪をあはれとぞ見る

霰ふるみやまの里のわびしきは來てたはやすくとふ人ぞなき

ちはやぶる神無月こそ悲しけれ我が身時雨（しぐれ）にふりぬと思へば

もみぢ葉も時雨もつらし稀にきて歸らむ人を降りやとどめぬ

題しらず　讀人しらず

神無月かぎりとや思ふもみぢ葉のやむ時もなく夜さへにふる

ちはやぶる神垣山のさかき葉はしぐれに色もかはらざりけり

すまぬ家にまできてもみぢばにかきていひつかはしける　枇杷左大臣

人すまずあれたる宿をきてみればいまぞ木の葉は錦おりける

かへし　伊勢

涙さへ時雨にそひてふるさとは紅葉のいろもこさまさりけり

題しらず　讀人しらず

冬の池の鴨のうは毛におく霜のきえて物思ふ頃にもあるかな

親の外にありて遲くかへりければ遣しける　人の娘のやつなりける

秋はてて我が身しぐれとふりぬれば言の葉さへに移ひにけり

神無月時雨ばかりは降らずしてゆきがてにさへなどかなるらむ

神無月しぐれとともに神なびの森の木の葉はふりにこそふれ

女につかはしける

頼む木も枯れはてぬれば神無月しぐれにのみもぬるる袖かな

山にいるとて　　増基法師

神無月しぐればかりを身にそへて知らぬ山路に入るぞ悲しき

十月ばかりに大江千古がもとにあはむとてまかりたりけれども侍らぬほどなれば帰りまできてたづねて遣しける　　藤原忠房朝臣

もみぢ葉はをしき錦とみしかども時雨と共に降りてこそこし

かへし　　大江千古

後撰和歌集　卷第八

冬　歌

題しらず　　　　　　　　　　讀人しらず

初時雨ふれば山邊ぞおもほゆるいづれの方かまづもみづらむ
初しぐれ降るほどもなく佐保山の梢あまねくうつろひにけり
神無月ふりみふらずみ定めなきしぐれぞ冬のはじめなりける
冬くればさほの河瀨にゐるたづも獨ねがたき音をぞ鳴くなる
ひとりぬる人のきかくに神無月にはかにもふる初しぐれかな
秋はてて時雨ふりぬるわれなれば散る言の葉をなにか恨みむ
吹く風はいろも見えねど冬くれば獨ぬる夜の身にぞしみける

宇治山の紅葉をみずは長月の過ぎゆくひをも知らずぞあらまし

九月つごもりに　　貫之

ながめつの有明の月はありながらはかなく秋は過ぎぬべらなり

同じ夜　　躬恒

いづかたに夜はなりぬらむおほつかなおけぬ限は秋と思はむ

秋風に(ごとイ)つらをはなれぬ雁がねは春かへるともかはらざらなむ

をとこの花かづらゆはむとて菊ありける所にこ
ひに遣したりければ花につけて遣しける

みな人に折られにけりときくの花君のためにぞ露は(もイ)おきける

題しらず

吹く風にまかする船や秋の夜の月のうへよりけふは漕ぐらむ

紅葉のちりつもれるもとにて

紅葉(もみぢば)はちる木(こ)の下(もと)にとまりけり過ぎ行く秋やいづちなるらむ

忘れにける男の紅葉を折りて送りて侍りければ

思ひ出でてとふにはあらじあきはつる色の限を見するなりけり(るらむイ)

長月の(て侍イ)つごもりの日もみぢに氷魚(ひを)をつけておこ
せたりければ

ちかねがむすめ

あかからば見るべき物を雁がねの何處ばかりに鳴きて行くらむ

菊の花折れりとて人のいひ侍りければ　讀人しらず

いたづらに露におかるる花かとて心もしらぬひとや折りけむ

身のなりいでぬ事など歎き侍りける頃紀友則が
もとよりいかにぞととぶらひにおこせて侍りけ
れば返事に菊の花を折りてつかはしける　藤原忠行

枝も葉も移ろふ秋の花〔菊なイ〕みればはてはかげ〔ひイ〕なくなりぬべらなり

かへし　友則

しづくもて齢のぶてふ花なれば千代の秋にぞかげはしげらむ

延喜の御時秋の歌めしありければ奉りける　貫之

秋の月光さやけみもみぢ葉のおつるかげさへ見えわたるかな

題しらず　讀人しらず

秋ふかみよそにのみきく白露のたが言の葉にかかるなるらむ

かれにける男の秋とぶらへりけるに　昔の承香殿のあこぎ

とふことの秋しもまれに聞ゆるばかりにや我を人のためし

紅葉と色こきさいでとを女のもとに遣して　源とゝのふ

君こふる涙にぬるるわがそでと秋のもみぢといづれまされり

題しらず　讀人しらず

照る月の秋しも殊にさやけきば散るもみぢ葉を夜も見よとか

故宮の内侍に兼輔朝臣しのびてかよはし侍りけ
る文をとりてかきつけて内侍に遣しける

など我が身下葉紅葉となりにげむ同じなげきの枝にこそあれ

秋やみなる夜かれこれ物語し侍るあひだに雁の
なきて渡りければ　源わたすの朝臣

ひぐらしの聲もいとなくきこゆるは秋夕暮になればなりけり

讀人しらず

風の音のかぎりと秋やせめつらむ吹きくるごとに聲の侘しき

もみぢ葉にたまれる雁の涙には月のかげこそうつるべらなれ

あひ知りて侍りける男の久しうとはず侍りければ長月ばかりにつかはしける

右近

おほかたの秋の空だに侘しきに物思ひそふる君にもあるかな

題しらず

讀人しらず

我がごとく物思ひけらし白露の夜をいたづらにおき明しつつ

あひしりて侍りける人のちのちまでこずなりにければ男の親聞きてなほまかりとへと申し敎ふとききて後まうできたりければ

平伊望朝臣女

たつたがは秋にしなればやまちかみ流るる水ももみぢしにけり　貫之

もみぢばの流るる秋は川ごとににしきあらふと人や見るらむ　讀人しらず

龍田川あきは水なくあせななむあかぬ紅葉のながるればをし　文屋朝康

波わけて見るよしもがなわたつ海の底のみるめも紅葉ちるやと　藤原興風

木の葉ちる浦に波たつ秋なればもみぢに花も咲きまがひけり　讀人しらず

わたつみの神にたむくる山姫のぬさをぞ人は紅葉といひける　貫之

もみぢ葉を分けつつゆけば錦きて家にかへると人や見るらむ

貫之

うちむれていざわぎもこが鏡山こえて紅葉の散らむかげみむ

讀人しらず

山風の吹きのまにまに紅葉(もみぢは)はこのもかのもに散りぬべらなり

秋の夜に雨ときこえて降りつるは風にみだるる紅葉なりけり

立ちよりて見るべき人のあればこそ秋のはやしに錦しくらめ

木のもとに織らぬ錦のつもれるは雲のはやしの紅葉なりけり

あきかぜに散るもみぢ葉は女郎花やどにおりしく錦なりけり

足引のやまのもみぢ葉散りにけり嵐のさきに見てましものを

もみぢ葉のふりしく秋の山邊こそたちてくやしき錦なりけれ

龍田川いろくれなるになりにけり山のもみぢぞ今はちるらし

題しらず　讀人しらず

菊の花なが月ごとに咲きくればひさしきこころ秋や知るらむ

名にしおへば長月ごとに君がため垣根の菊はにほへとぞ思ふ

ほかの菊を移しうゑて

故郷をわかれて咲ける菊のはなたびながらこそ匂ふべらなれ

男の久しくまでこざりければ

なにゝきく色そめかへし匂ふらむ花もてはやす君もこなくに

月の夜に紅葉のちるを見て

もみぢ葉の散りくる見れば長月のありあけの月の桂なるらし（りけり）

題しらず

いくちはた織ればか秋の山ごとにかぜにみだるる錦なるらむ

なほぎりに秋のやまぢを越えくればおらぬ錦をきぬ人ぞなき

貫之

たまかづら葛城山のもみぢ葉はおもかげにのみ見え渡るかな

秋霧の立ちしかくせばもみぢ葉は覺束なくも散りぬべらなり

鏡山をこゆとて　素性法師

鏡山やまかきくもりしぐるればもみぢあかくぞ秋は見えける

隣に住み侍りける時九月八日伊勢が家の菊に綿をきせに遣しければ又の朝折りてかへすとて　伊勢

かずしらず君が齢をのばへつゝなだたるやどの露とならなむ

かへし　藤原雅正

露だにもなだたる宿の菊ならば花のあるじやいくよなるらむ

なが月の九日鶴のなくなりにければ　伊勢

菊の上に置きゐるべくもあらなくに千年の身をも露になす哉

もる山を越ゆとて　貫之
あしびきの山のやまもりもる山も紅葉せさする秋はきにけり
題しらず
唐錦たつたのやまもいまよりは紅葉ながらにときはならなむ
唐衣たつたのやまのもみぢ葉ははた物もなきにしきなりけり
人々もろともに濱づらをまかる道に山の紅葉を
これかれよみ侍りけるに　忠岑
いく木ともえこそ見わかね秋山のもみぢの錦よそにたてれば
題しらず　讀人しらず
秋風のうち吹くからにやまも野もなべて錦におりかへすかな
などさらにあきかとはむ唐錦たつたのやまの紅葉するよを
あだなりと我は見なくにもみぢ葉を色の變れる秋しなければ

雁なきてさむきあしたの露ならし龍田の山をもみだすものは
見る毎に秋にもなるかな龍田姫もみぢそむとや山もきるらむ
源宗于朝臣
あづさゆみいるさの山は秋霧のあたるごとにや色まさるらむ
はらからどちいかなる事か侍りけむ
讀人しらず
君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬる物にぞありける
題しらず
元方
遲ぐ疾く色づく山のもみぢ葉はおくれさきだつ露や置くらむ
龍田山をこゆとて
友則
かくばかりもみづる色のこければや錦たつたの山といふらむ
題しらず
讀人しらず
からころも龍田の山のもみぢ葉はものおもふ人の袂なりけり

いそのかみふる野の草も秋は猶色ことにこそあらたまりけれ

讀人しらず

秋の野の錦のごとも見ゆるかな色なき露はそめじとおもふに

秋の野にいかなる露の置きつめばちぢの草葉の色かはるらむ

いづれをかわきて忍ばむ秋の野にうつろはむとて色かはる草

紀友則

聲たてて鳴きぞしぬべき秋霧に友まどはせる鹿にはあらねど

讀人しらず

たれきけと聲たかさごにさを鹿の長々し夜をひとり鳴くらむ

うちはへてかげとぞ(ぢイ)たのむ峯の松いろどる秋の風にうつるな

初時雨ふれば山べぞおもほゆるいづれの方かまづもみづらむ

妹がひもとくとむすぶとたつたやま今ぞもみぢの錦おりける

秋毎にくれど歸ればたのまぬを聲にたてつゝかりとのみなく

一向（ひたすら）に我がおもはなくに己さへかりかりとのみ鳴き渡るらむ

人の雁は來にけると申すを聞きて　　躬恒

年ごとに雲路まどはぬかりがねは心づからやあきを知るらむ

大和にまかりける時これかれともにて　　讀人しらず

天の川かりぞとわたるさほ山のこずゑはむべも色づきにけり

兼輔の朝臣左近少將に侍りける時武藏の御馬むかへにまかりたつ日俄にさはる事ありてかはりに同じつかさの少將にてむかへにまかりて逢坂より隨身を返していひ送り侍りける　　藤原忠房朝臣

秋霧のたち野の駒をひくときはこころにのりて君ぞこひしき

題しらず　　在原元方

越の方に思ふ人侍りける時に　　貫　之

秋の夜に雁かもなきて渡るなりわが思ふ人のことづてやせし

題しらず

秋風に霧とびわけてくる雁のちよにかはらぬこゑきこゆなり

讀人しらず

物思ふと月日のゆくもしらざりつ雁こそ鳴きて秋と[たイ]つげけれ

大和にまかりけるついでに

かりがねの鳴きつるなべに唐衣たつたのやまは紅葉しにけり

題しらず

秋風にさそはれわたる雁がねはものおもふ人の宿をよかなむ

誰きけと鳴くかりがねぞ我が宿の尾花が末を過ぎがてにして

往き返りここもかしこも旅なれやくる秋毎にかりかりとなく

後撰和歌集　巻第七

秋歌下

題しらず　　讀人しらず

藤袴きるひとなみやたちながらしぐれの雨にぬらし初めぬる（つイ）

秋かぜにあひとしあへば花薄いづれともなく穗にぞいでぬる（けイ）

寛平の御時后の宮の歌合に　　在原棟梁

花薄そよともすれば秋かぜの吹くかとぞきくひとりぬる夜は

題しらず　　讀人しらず

花薄ほに出でやすき草なればみにならむとはたのまれなくに

秋風にさそはれ渡るかりがねは雲井はるかに今日ぞきこゆる

女郎花折りも折らずもいにしへを更にかくべき物ならなくに

をみなへし色にもあるかな松蟲をもとに(ともイ)宿して誰を待つらむ

前栽にをみなへし侍りける所にて

女郎花匂ふさかりを見る時ぞわが老いらくはくやしかりける

すまひのかへりあるじの暮つかた女郎花を折りて敦慶(あつよし)の親王(みこ)のかざしにさすとて　三條右大臣

女郎花はなの名ならぬ物ならばなにかは君がかざしにもせむ

年ごろ家のむすめにせうそこ通はし侍りけるを女のためにかるがるしなどいひてゆるさぬあひだになむ侍りける

法皇伊勢が家のをみなへしをめしければ奉るを　枇杷左大臣

ききて

女郎花をりけむ枝(袖イ)のふしごとに過ぎにし君をおもひ出やせし

かへし　伊勢

秋霧のはるるはうれし女郎花たちよる人やあらむとおもへば

題しらず　　讀人しらず

をみなへし草むらごとにむれたつは誰まつ蟲の聲にまよふぞ

女郎花ひる見てましを秋の夜の月のひかりはくもがくれつつ

をみなへし花のさかりに秋風のふくゆふぐれを誰にかたらむ

貫之

しろたへの衣かたしき女郎花さける野邊にぞこよひねにける

名にしおへば（はイ）しひてたのまむ女郎花花の心のあきはうくとも

躬恒

たなばたに似たるものかな女郎花秋よりほかにあふ時もなし

讀人しらず

秋の野によるもや寐なむ女郎花はなの名を（にイ）のみ思ひかけつつ

消えかへりものおもふ秋の衣こそなみだの川の紅葉なりけれ

讀人しらず

吹く風にふかきたのみのむなしくば秋の心をあさしと思はむ

是貞のみこの家の歌合の歌

秋の夜は人を靜めてつれづれとかきなす琴の音にぞなきぬる

露をよめる　藤原清正

ぬきとむる秋しなければ白露のちぐさにおける玉もかひなし

八月十五夜

秋風にいとど更けゆく月影を立ちなかくしそあまのかはぎり

延喜の御時秋の歌めしありければ奉りける　貫之

をみなへし匂へる秋の武藏野は常よりもなほむつましきかな

人につかはしける　兼覽王

いつとても月みぬ秋はなきものをわきてこよひの珍しきかな

讀人しらず

月かげはおなじひかりの秋の夜をわきて見ゆるは心なりけり

月を見て　紀淑望（光イ）朝臣

空とほみ秋やよくらむひさかたの月のかつらの色もかはらぬ（ずイ）

貫之

ころもでは寒くもあらねど月影をたまらぬ秋の雪とこそ見れ

讀人しらず

天の川しがらみかけてとどめなむあかず流るる月やよどむと

あきかぜに波やたつらむ天の川わたる瀬もなく月のながるる

秋くれば思ふ心ぞみだれつつまづもみぢ葉とちりまさりける

深養父

讀人しらず

秋の夜の月のかげこそ木のまよりおちば衣と身にうつりけれ

袖にうつる月のひかりは秋ごとに今宵かはらぬ影とみえつつ

秋の夜のつきにかさなる雲はれて光さやかに見るよしもがな

小野美材

秋の池（夜イ）の月のうへこぐ船なればかつらのえだに棹やさは（すイ）らむ

深養父

秋の海にうつれる月をたちかへり波はあらへど色もかはらず

是貞のみこの家の歌合に　讀人しらず

秋の夜の月のひかりは淸けれど人のこころのくまは照らさず

秋の月常にかく照るものならば闇にふる身はまじらざらまし

八月十五夜　藤原雅正

秋の野におく白露をけさ見れば玉やしけるとおどろかれつつ

題しらず　　讀人しらず

おくからに千ぐさの色になるものを白露とのみ人のいふらむ

白玉の秋の木の葉にやどれると見ゆるは露のはかるなりけり

秋の野に置く白露のきえざらば玉にぬきてもかけて見てまし

唐衣そでくつるまでおく露は我が身をあきの野とやみるらむ

大空に我が袖ひとつあらなくにかなしく露やわきておくらむ

朝ごとにおく露そでにうけためて世のうきときの涙にぞかる

秋の歌とてよめる　　貫之

秋の野の草もわけぬを我が袖の物思ふなべにつゆけがるらむ

深養父

いくよへて後かわすれむ散りぬべき野邊の秋萩みがく月夜を

題しらず　天智天皇御製

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我が衣手は露にぬれつつ

讀人しらず

わがそでに露ぞおくなる天の川くものしがらみ波やこすらむ

秋萩のえだもとををになりゆくは白露おもくおけばなりけり

わがやどの尾花がうへの白露をけたずて玉にぬくものにもが

延喜の御時歌めしければ　貫之

さを鹿のたちならす小野の秋萩における白露われもけぬべし

秋の野の草は糸とも見えなくに置くしらつゆを玉とぬくらむ

文屋朝康

白露にかぜのふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

忠岑

秋の田のかりほの庵（宿イ）の匂ふまで咲ける秋萩みれどあかぬかも
秋の夜をまどろまずのみ明す身は夢路とだにも頼まざりけり

萩の花を折りて人につかはすとて

時雨ふりふりなば人にみせもあへず散りなばをしみをれる秋萩

秋の歌とて　　貫之

往きかへり折りてかざさむ朝な朝な鹿立ちならす野邊の秋萩

宗于朝臣

我が宿の庭の秋萩ちりぬめりのち見む人やくやしとおもはむ

讀人しらず

白露のおかまくをしき秋萩を折りてはさらにわれやかざさむ

年の積りにける事をかれこれ申しけるついでに　　貫之

秋萩の色づく秋を（時イ）いたづらにあまたかぞへて老いぞしにける

おほかたに置く白露もいまよりは心してこそ見るべかりけれ

右大臣

露ならぬ我が身と思へど秋の夜をかくごそ明せおきゐながらに

秋のころほひある所に女どもの數多みすの内に侍りけるに男の歌のもとをいひ入れて侍りければ末はうちより

讀人しらず

白露のおくにあまたの聲すれば花のいろいろ有りとしらなむ

八月中の十日ばかりに雨のそほ降りける日女郎花ほりに藤原のもろただを野邊にいだして遲く歸りければつかはしける

左大臣

暮れはてば月もまつべし女郎花あめやめてとは思はざらなむ

題しらず

讀人しらず

白露のうへはつれなくおきゐつつ萩の下葉のいろをこそみれ

かへし　伊勢

心なき身は草葉にもあらなくにあきくる風にうたがはるらむ

男のもとに遣しける　讀人しらず

人はいさことぞともなきながめにも我は露けき秋も知らるる

人のもとに尾花のいと高きを遣したりければ返事に忍草をくはへて　中宮宣旨

はなすすきほに出ることもなき宿は昔しのぶの草をこそ見れ

かへし　伊勢

宿もせに植ゑなめつつぞわれはみる招く尾花に人やとまると

題しらず　讀人しらず

秋の夜を徒(いたづら)にのみおきあかす露はわが身のうへにぞありける

大輔が後涼殿に侍りけるに藤壺より女郎花を折りてつかはしける　　右大臣

折りてみる袖さへぬるる女郎花つゆけきものと今やしるらむ

かへし　　大輔

萬代にかからむつゆを女郎花なにおもふとかまだき濡るらむ

又　　右大臣

置き明す露のよなよな經にければまだきぬるとも思はざりけり

かへし　　大輔

いまははやうちとけぬべき白露の心おくまで夜をやへにける

あひしりて侍りける女のあだ名たちて侍りければ久しく訪（とぶら）はざりけり八月ばかりに女の許よりなどかいとつれなきといひおこせて侍りければ　　讀人しらず

秋の野のつゆにおかるる女郎花はらふ人なみぬれつつやふる
女郎花はなの心のあだなればあきにのみこそあひわたりけれ
母のぶくにて里に侍りけるに先帝の御文給へり
ける御返事に　近江更衣（衛イ）
さみだれにぬれにし袖にいとどしく露おきそふる秋の侘しさ
御かへし　延喜御製
おほかたも秋は侘しきときなれど露けかるらむ袖をしぞ思ふ
亭子院の御前の花のいと面白く朝露のおけるを
めして見せさせたまひて　法皇御製
白露のかはるも何か惜しからむありての後もややうきものを
御かへし　伊勢
植ゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらむ

後撰和歌集　卷第六

秋歌中

延喜の御時に秋の歌めしありければ奉りける　紀貫之

秋霧のたちぬる時はくらぶ山おぼつかなく(どイ)ぞ見えわたりける

花見にと出でにしものを秋の野の霧にまよひて今日は暮しつ

寛平の御時后の宮の歌合に　讀人しらず

うらちかくたつ秋霧はもしほやく煙とのみ(のイ)ぞ見えわたりける

おなじ御時の女郎花合に　藤原興風

折るからに我が名はたちぬ女郎花いざおなじくば花々に見む

讀人しらず

穂には出でぬいかにかせましすべき花薄身を秋風にすてや果ててむ

二人の男に物いはれけるひ女のひとりにつきにけ

れば今ひとりがいひつかはしける　　　　讀人しらず

明け暮し守るたのみをからせつつ袂そほづの身となりぬる

かへし

心もておふる山田のひつぢ穂は君まもらねどかるひともなし

題しらず　　　　　　　　　　　　　藤原守文

草の糸にぬく白玉とみえつるは秋のむすべる露にぞありける

秋風のやや吹きしけば野をさむみわびしきこゑに松蟲ぞ鳴く

藤原元善朝臣

行きくれば野もせに蟲のおり亂る聲のあやをば誰かきるらむ

讀人しらず

秋さむみ鳴くまつむしの涙こそ草葉いろどるつゆと置くらめ

秋風の吹きしく松は山ながらなみ立ちかへるおとぞきこゆる

是貞のみこの家の歌合に

壬生忠岑

まつのねに風のしらべをまかせては龍田姫こそ秋はひくらし

秋大輔がうづまさの傍なる家に侍りけるに萩の葉に文をさしてつかはしける

左大臣

山里のものさびしきは萩の葉のなびくごとにぞ思ひやらるる

題しらず

小野道風朝臣

行くほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くとかりにつげこせ

讀人しらず

秋風に（のイ）草葉そよぎて吹くなべにほのかにしつるひぐらしの聲

貫之

ひぐらしの聲きく山の近ければや鳴きつるなべに夕日さすらむ

讀人しらず

日ぐらしの聲きくからにまつ蟲の名にのみ秋をおもふ頃かな

心ありて鳴きもしつるか日ぐらしの何れも物のあきて（はイ）うければ

秋風の吹きくる宵はきりぎりす草の根ごとに鳴きみだれけり

わがごとく物や悲しききりぎりす草のやどりに聲たえずなく

來むといひしほどや過ぎぬる秋の野に誰まつ蟲ぞ聲の悲しき

秋の野に來宿る人もおもほえずたれをまつ蟲ここらなくらむ

天の川こひしきせにぞ渡りぬるたぎつなみだに袖はぬれつつ

たなばたの年と（あかぬイ）はいはじ天の川雲立ちわたりいざみだれなむ

秋の夜のながきわかれを棚機はたてぬきにこそ思ふべらなれ

七月八日のあしたに　兼輔朝臣

たなばたの歸るあしたの天の川ふねもかよはぬ波もたたなむ

おなじ心を　貫之

朝戸あけてながめやすらむ棚機はあかぬ別のそらをこひつつ

思ふこと侍りて　讀人しらず

秋風の吹けばさすがに佗しきは世のことわりと思ふものから

題しらず　業平朝臣

まつむしの初聲さそふあきかぜは音羽山より吹きそめにけり

逢ふことの（七夕イ）今宵すぎなば棚機におとりやしなむ戀はまさりて

七日　讀人しらず

棚機のあまの戸わたる今宵さへをちかた人の（やイ）つれなかるらむ

七夕をよめる

天の川とほきわたり（にあられイ）はなけれども君がふなでは年にこそまて

天の川岩こすなみの立ちゐつつ秋のなぬかの今日をしぞまつ

紀友則

今日よりや（はイ）天の川原はあせななむ底ひともなくただ渡りなむ

讀人しらず

天の川ながれてこふるたなばたの涙なるらしあきのしらつゆ

天の川せぜの白波たかけれどただわたり來ぬまつにくるしみ

秋くれば川霧わたる天の川かはかみ見つつこふる日のおほき

ひこ星の稀にあふ夜の床なつは（ればイ）うちはらへども露けかりけり

七日人のもとより返事にこよひあはむといひおこせて侍りければ

こひこひて逢むと思ふ夕暮はたなばたつめも斯くやあるらし

かへし

類（たぐひ）なき物とはわれぞなりぬべきたなばたつめは人めやはもる

題しらず

天の川流れて戀ひばうくもぞあるあはれと思ふせに早くみむ

玉かづらたえぬものからあら玉の年のわたりはただ一夜のみ

秋の夜の心もしるく棚機のあへるこよひは明けずもあらなむ

契りけむ言の葉今はかへしてむ年のわたりによりぬるものを

七日の日に越後の藏人につかはしける　藤原敦忠朝臣

逢ふ事は棚機女にとひしくてたちぬふ業はあえずぞありける
題しらず　讀人しらず
天の川わたらむそらもおもほえずたえぬ別とおもふものから
七月七日に夕方までこむといひて待りけるに雨ふり待りければまでこで　源中正
雨ふりて水まさりけり天の川こよひはよそに戀ひむとやみし
かへし　讀人しらず
水まさり淺き瀬しらずなりぬとも天のとわたる舟はなしやは
七日の日に女の許に遣しける　藤原兼三
たなばたも逢ふ夜ありけり天の川此わたりには渡る瀬もなし
かれにける男の七日の夜までできたりければ女のよみて待りける　讀人しらず

題しらず

秋かぜのうちふきそむる夕ぐれはそらに心ぞわびしかりける

大江千里

露かけし袂ほすまもなきものをなどあき風のまだき吹くらむ

女のもとよりふみ月ばかりにいひおこせて侍りける

讀人しらず

秋萩をいろどる風の吹きぬれば人のこころもうたがはれけり

かへし

在原業平朝臣

あき萩をいろどるかぜはふきぬとも心はかれじ草葉ならねば

源昇朝臣時々まかり通ひける時に文月の四五日ばかりに七日の日の料に裝束てうじてといひつかはして侍りければ

閑院

後撰和歌集　卷第五

秋歌上

是貞の親王の家の歌合に　　　讀人しらず

俄にも風のすずしくなりぬるか秋たつ日とはむべもいひけり

題しらず

うちつけにものぞ悲しき木の葉ちる秋の初をけふぞと思へば

物思ひける頃秋立つ日人につかはしける

たのめこし君はつれなし秋風はけふよりふきぬ我が身悲しも

思ふ事侍りける頃

いとどしく物思ふ宿の荻の葉にあきとつげつる風のわびしさ

みな月二つありける年

たなばたは天の川原を七かへり後のみそかをみそぎにはせよ（と イ）

月頃わづらふ事ありてまかりありきもせでまで
こぬよしいひて文のおくに　　貫之
花もちり郭公さへいぬるまできみにも行かずなりにけるかな
かへし　　藤原雅正
花鳥の色をも音をもいたづらに物憂かる身はすぐすのみなり
題しらず　　讀人しらず
夏蟲の身をたきすてて魂しあらば我とまねばむ人めもる身ぞ（はイ）
夏の夜月おもしろく侍りけるに
こよひかくながむる袖のつゆけきは月の霜をや秋とみつらむ
みな月祓しに河原にまかり出でて月のあかきを
見て
賀茂川の水底すみて照る月をゆきて見むとやなつばらへする

撫子はいづれともなくにほへどもおくれて咲くは哀なりけり

題しらず　　讀人しらず

なでしこの花ちり方になりにけり我がまつ秋ぞ近くなるらし

よひ(ゐイ)ながら晝にもあらなむ夏なれば待ち暮すまの程なかるべく

夏の夜の月は程なく明けぬれど(ばイ)あしたのまをぞかこちよせつ(たイ)る

かささぎの峯とびこえてなきゆけば夏の夜わたる月ぞ隱るる

秋近み夏はてゆけばほととぎす鳴く聲かたきここちこそすれ

桂のみこの螢を捕へてといひはべりければ童の

かざみの袖につつみて

つつめども隱れぬ物は夏蟲の身よりあまれるおもひなりけり

題しらず

天の川水まさるらしなつの夜はながるる月のよどむまもなし

いかにせむ小倉のやまの郭公おぼつかなしと音をのみぞなく

題しらず　　　　讀人しらず

ほとゝぎす曉がたの一こゑはうきよのなかをすぐすなりけり

人しれずわがしめし野の撫子は花さきぬべきときぞきにける

わがやどの垣根に植ゑし撫子は花にさかなむよそへつゝみむ

常夏の花をだに見ばことなしにすぐす月日もみじかかりなむ

とこなつに思ひそめては人しれぬ心のほどはいろに見えなむ

かへし

色といへば濃きもうすきも賴まれず大和撫子ちる世なしやは

師尹朝臣のまだわらはにて侍りける時常夏の花を折りて持ちて侍りければこの花につけて內侍のかみの方におくり侍りける　　太政大臣

りけるに物などいひかはして後に遣しける　伊勢

郭公はつかなる音を聞き初めてあらぬもそれとおぼめかれつつ

五月ふたつ侍りける年イにおもふこと侍りて　讀人しらず

五月雨のつづける年のながめには物思ひあへる我ぞわびしき

女にいと忍びて物いひてかへりて

ほととぎす一こゑにあくる夏の夜の曉がたやあふごなるらむ

題しらず

うちはへて音をなきくらす空蟬のむなしき戀も我はするかな

つねもなき夏の草葉におくつゆを命とたのむせみのはかなさ

八重むぐらしげき宿には夏むしの聲よりほかにとふ人もなし

空蟬の聲きくからにものぞ思ふわれも空しき世にしすまへば

人のもとにつかはしける　藤原師忠朝臣

女子もて侍りける人に思ふ心侍りて遣しける　讀人しらず

ふた葉よりわがしめゆひし撫子の花のさかりを人にをらすな

題しらず

足引の山ほとゝぎすうちはへて誰かまさると音をのみぞ鳴く

五月ながあめの頃久しくたえ侍りにける女のもと

にまかりたりければ　女

つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞ音はなかれける

題しらず

いろかへぬ花たちばなに郭公ちよをならせるこゑきこゆなり

旅寐してつま戀すらしほとゝぎす神なび山にさ夜更けてなく

夏の夜に戀しき人の香をとめば花たちばなぞしるべなりける

女の物見にまかり出でたりけるにこと車傍に來

五月ばかりに物いふ女に遣しける

数ならぬわが身山邊のほとゝぎす木の葉がくれの聲は聞ゆや

題しらず

とこ夏になきても經なむ郭公しげきみやまになにかへるらむ

ふすからにまづぞ侘しき郭公なきもはてぬに明くる夜なれば

三條右大臣少將に侍りける時しのびに通ふ所侍りけるをうへのをのこども五六人ばかり五月の長雨少しやみて月朧なりけるに酒たうべむとておし入りて侍りけるを少將はかれがたにて侍らざりければ立ちやすらひてあるじいだせなど戯ぶれ侍りければ

あるじの女

五月雨にながめくらせる月なればさやかに見えず雲隠れつゝ

人のもとに遣しける　　藤原安國

逢ふと見し夢に習ひて夏の日の暮れがたきをも歎きつるかな

讀人しらず

思ふ事侍りける頃郭公を聞きて

うとまるる心しなくばほととぎす飽かぬ別にけさは鳴かまし

をりはへて音をのみぞなく郭公しげきなげきの枝ごとにゐて

四五月ばかり遠き國へまかり下らむとするころ

郭公を聞きて

ほととぎす聞けば（來ては イ）たびとや鳴きわたるわれは別のをしき都を

題しらず

ひとり居てものおもふわれを郭公ここにしも鳴く心あるらし

玉くしげ明けつるほどの郭公ただふたこゑも鳴きてこしかな

同じ心を　貫之

あしびきの山下水は行き通ひことのねにさへながるべらなり

題しらず　藤原高經朝臣

夏の夜はあふ名のみして敷たへの塵拂ふまに明けぞしにける

壬生忠岑

夢よりもはかなきものはなつの夜の曉がたのわかれなりけり

おひしりて侍りける中のかれもこれも志はあり

ながら包む事ありてえあはざりければ　讀人しらず

外ながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

夏の夜しばし物語して歸りにける人の許に又の

あしたつかはしける　伊勢

ふた聲ときくとはなしに郭公夜ふかくめをもさましつるかな

かへし

木綿襷かけてもいふなあだびとのあふひてふ名は禊にぞせし

題しらず

このごろはさみだれ近み郭公おもひみだれてなかぬ日ぞなき

待つ人はたれならなくに郭公おもひのほかに鳴かばうからむ

にほひつつ散りにし花ぞおもほゆる夏は緑の葉のみしげれば

朱雀院の春宮におはしましける時帶刀等五月ばかり御書所にまかりて酒などたうべてこれかれ歌よみけるに

大春日師範

さみだれに春のみやびとくるときは郭公をやうぐひすにせむ

夏の夜深養父が琴ひくを聞きて

藤原兼輔朝臣

みじか夜の更けゆくままに高砂のみねの松風ふくかとぞきく

あひ見しもまだ見ぬこひも郭公月に鳴く夜ぞよに似ざりける
女のもとに遣しける
ありとのみ音羽の山の郭公ききにきこえてあはずもあるかな
題しらず　伊勢
木がくれてさ月まつとも郭公はねならはじにえだうつりせよ
藤原のかつみの命婦にすみ侍りける男人の手に
うつり侍りにける又の年杜若につけてかつみに
遣しける　良岑義方朝臣
いひそめし昔の宿のかきつばた色ばかりこそかたみなりけれ
賀茂の祭の物見侍りける女の車にいひいれて侍
りける　讀人しらず
行きかへるやそ氏人の玉かづらかけてぞ頼むあふひてふ名を

物いひかはし侍りける人のつれなく侍りければ

其家の垣根の卯花を折りていひ入れて侍りける

恨めしき君が垣根のうの花はうしと見つつもなほたのむかな

憂き物と思ひしりなばうの花のさける垣根もたづねざらまし

卯花の垣根ある家にて

時わかずふれる雪かとみるまでに垣根もたわにさけるうの花

友達のとぶらひまでこぬ事を恨みつかはすとて

白妙ににほふかきねのうの花のうくも來てとふ人のなきかな

時わかず月か雪かと見るまでにかきねのままに咲けるうの花

なきわびぬいづちかゆかむ郭公なほうの花のかげははなれじ

卯月ばかりの月面白かりける夜人に遣しける

後撰和歌集　卷第四

夏歌

題しらず　　讀人しらず

今日よりは夏の衣になりぬれど著る人さへはかはらざりけり

うのはなの咲ける垣根のつききよみいねず聞けとや鳴く郭公

卯月ばかり友達のすみ侍りける所近く侍りて必ず消息遣してむと侍りけるに音なく侍りければ

郭公きゐる垣根はちかながらまちどほにのみこゑのきこえぬ

かへし

郭公こゑまつほどは遠からでしのびに鳴くを聞かぬなるらむ

行先をゝしみし春のあすよりは來にし方にもなりぬべきかな　躬恒

やよひのつごもり　貫之

ゆく先になりもやすると頼みしを春の限はけふにぞありける

讀人しらず

花しあらば何かは春の惜しからむ暮るともけふは歎かざらまし　躬恒

暮れて又あすとだになき春の日を花の陰にて今日はくらさむ

三月のつごもりの日久しうまうでこぬよしいひてはべる文の奥にかきつけ侍りける　貫之

又もこむ時ぞと思へど頼まれぬ我が身にしあれば惜しき花かな

貫之かくて同じ年になむ身まかりにける

かへし　左大臣

常よりものどけかるべき春なれば光にひとの逢はざらめやは

常にまうでき通ひける所にさはる事侍りて久しくまできあはずして年かへりにけりあくる春彌生のつごもりに遣しける　藤原雅正

君こずて年は暮れにき立ちかへり春さへ今日になりにける哉

かへし　貫之

共にこそ花をもみめとまつ人のこぬものゆゑに惜しき春かな

君にだにとはれでふれば藤の花たそがれ時もしらずぞありける

題しらず　讀人しらず

やへむぐら心のうちに深ければ花見にゆかむいでたちもせず

をしめども春のかぎりのけふの又夕暮にさへなりにけるかな

あさぼらけしたゆく水は淺けれどふかくぞ花の色はみえける

題しらず　讀人しらず

うぐひすのいとによるてふ玉柳ふきなみだりそ春のやまかぜ

櫻の花のちるを見て　躬恒

いつのまに散りはてぬらむ櫻花おもかげにのみ色をみせつつ

敦實のみこの花見侍りける所にて　源仲宣朝臣

散る事のうきも忘れてあはれてふことを櫻にやどしつるかな

櫻のちるを見て　讀人しらず

櫻いろにきたる衣のふかければ過ぐる月日もをしけくもなし

やよひにうるふ月ある年つかさめしのころ申文に添へて左大臣家につかはしける　貫之

あまりさへ有りて行くべき年だにも春に必ずあふ由もがな

の邊にてかれこれ大みきたうべけるついでに　三條右大臣

限なき名におふふぢの花なればそこひもしらぬ色のふかさか

兼輔朝臣

色ふかくにほひしことは藤波のたちもかへらで君とまれとか

貫之

棹させど深さもしらぬふちなれば色をば人もしらじとぞ思ふ

ことふえなどしてあそび物語などし侍りける程に夜更けにければまかりとまりて又のあしたに　三條右大臣

きのふ見し花の顔とてけさ見ればねてこそ更に色まさりけれ

兼輔朝臣

一夜のみねてしかへらば藤の花こころとけたる色みせむやは

貫之

題しらず　　讀人しらず

我が宿のかげともたのむ藤の花たちよりくとも波に折らるな

花ざかりまだも過ぎぬに吉野川かげにうつろふ岸のやまぶき

人の心たのみがたくなりにければ山吹のちりさしたるをこれ見よとてつかはしける

しのびかねなきて蛙のをしむをも知らずうつろふ山吹のはな

やよひばかりの花の盛に道まかりけるに　　僧正遍昭

折りつればだぶさにけがるたてながら三世(みよ)の佛にはな奉つる

題しらず　　讀人しらず

みなぞこの色さへふかき松が枝に千年をかねてさける藤波

三月の下の十日ばかりに三條右大臣兼輔朝臣の家にまかり渡りて侍りけるに藤の花さける遣水

宮づかへし侍りける女のいそのかみといふ所に
住みて京の友だちのもとに遣しける　讀人しらず

神さびてふりにし里に住む人はみやこににほふ花だにも見ず

法師にならむの心ありける人大和にまかりて程
久しく侍りてのちあひしりて侍りける人のもと
より月ごろはいかにぞ花は咲きたりやといひて
侍りければ

みよしのの吉野の山のさくらばな白雲とのみ見えまがひつつ

亭子院の歌合の歌

山ざくら咲きぬるときは常よりも峯のしら雲たちまさりけり

山櫻を見て　貫之

しらくもと見えつるものを櫻花けふは散るとや色ことになる

春雨の花の枝よりながれこばなほこそぬれめ香もやうつると

和泉の國にまかりけるに海のつらにて　讀人しらず

春ふかき色にもあるかな住の江のそこもみどりに見ゆる濱松

女ども花見むとて野邊に出でて　典侍因香朝臣

春くれば花見むと思ふこころこそ野邊の霞とともにたちけれ

あひしれりける人の久しうとはざりければ花盛にいひつかはしける　讀人しらず

我をこそとふにうからめ春霞はなにつけても立ちよらぬかな

かへし　源清蔭朝臣

たちよらぬ春のかすみをたのまれよ花の邊(あたり)と見ればなるらむ

山櫻を折りておくり侍るとて　伊勢

君みよとたづねて折れる山櫻ふりにしいろとおもはざらなむ

だしける　讀人しらず
いまよりは風にまかせむ櫻花ちる木のもとにきみとまりけり
かへし　敦忠朝臣
風にしもなにかまかせむ櫻花にほひあかぬに散るはうかりき
櫻川といふ所ありとききて　貫之
つねよりも春べになれば櫻川なみのはなこそまなくよすらめ
前栽に山吹あるところにて　兼輔朝臣
わがきたるひとへ衣は山吹の八重のいろにもおとらざりけり
題しらず　在原元方
一年にふたたびさかぬ花なればむべ散ることを人はいひけり
寛平の御時櫻の花の宴ありけるに雨のふり侍り
ければ　藤原敏行

法皇のめしてかの院にさぶらひければえあふ事
も侍らざりければあくる年の春櫻の枝にさして
彼のざうしにさしおかせける　元良のみこ
花のいろは昔ながらに見しひとの心のみこそうつろひにけれ
月の面白かりける夜花を見て　源さねあきら
あたら夜の月とはなとをおなじくば心(哀イ)しれらむ人に見せばや
あがたの井戸といふ家より藤原治方につかはし
ける　橘公平女
みやこびと來てもをらなむ蛙なくあがたのゐどの山吹のはな
助信が母のみまかりて後も時々かの家に敦忠朝
臣のまかり通ひけるに櫻の花のちりけるをりに
まがりて木のもとに侍りければ家の人のいひい

しけるついでに　貫之

春くれば咲くてふ事を濡衣にきするばかりの花にぞありける

春花見に出でたりけるを見つけて文を遣したりける其返事もなかりければあくるあした昨日の返しとこひにまうできたりければいひ遣したりける　讀人しらず

春霞立ちながら見し花ゆゑにふみとめてけるあとのくやしさ

男のもとよりたのめおこせて侍りければ

春日さす藤のうらばのうらとけて君しおもはば我もたのまむ

題しらず　伊勢

鶯に身をあひかへば散るまでもわがものにして花は見てまし

元良のみこ兼茂朝臣のむすめにすみ侍りけるを

父のみこのこゝろざせるやうにもあらで常に物思ひける人
にてなむありける。

春の池のほとりにて　　讀人しらず

春の日のかげそふ池のかがみには柳のまゆぞまづはみえける

春の暮にかれこれ花惜みける所にて

かくながら散らで世をやは盡してぬ花の常磐もありとみるべく

延喜の御時殿上のをのこどもの中にめしあげら
れておのおのかざしさしけるついでに　　凡河内躬恒

かざせども老も隠れぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなる

題しらず　　讀人しらず

一とせに重なる春のあらばこそふたたび花をみむとたのまめ

花のもとにてかれこれ程もなく散ることなど申

え侍りければ庭にある菫の花をつみていひつか
はしける　　　　讀人しらず

我が宿にすみれの花の多か(けイ)ればきやどる人やあると待つかな

題しらず

やまたかみ霞をわけてちる花をゆきとやよその人はみるらむ

吹く風のさそふ物とはしりながら散りぬる花のしひて戀しき

清原深養父

うちはへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらむ

常にせうそこ遣しける女ともだちの許より櫻の
花のいと面白かりける枝を折りてこれそこの花
に見くらべよとありければ　　こわかぎみ

わが宿のなげきは春もしらなくに何にか花をくらべてもみむ

題しらず　　　　　　　　　　　　讀人しらず

散りぬべき花の限はおしなべていづれともなくをしき春かな

朝忠朝臣の家の隣に侍りけるに櫻のいたう散りけれぱいひ遣しける　　　　　　　　　　　　伊勢

垣越にちりくる花を見るよりは根ごめに風の吹きもこさなむ

女につかはしける　　　　　　　　　　　　讀人しらず

春の日のながきおもひはわすれじを人の心にあきや立つらむ

題しらず　　　　　　　　　　　　貫之

よそにても花見る毎に音をぞなくわが身に疎き春のつらさに

風をだにまちてぞ花の散りなまし心づからにうつろふがうき

荒れたる所に住み侍りける女つれづれにおもほ

後撰和歌集 卷第三

春歌下

贈太政大臣あひわかれて後ある所にてその聲を聞きてつかはしける　藤原顯忠朝臣母

鶯の鳴くなるこゑは昔にてわが身ひとつのあらずもあるかな

櫻の花の瓶にさせりけるが散りけるを見て中務に遣しける　貫之

久しかれあだにちるなと櫻花かめにさせれどうつろひにけり

かへし

千代ふべき瓶にさせれど櫻花とまらぬことは常にやはあらぬ

装束一くだりてうじて遣すとて櫻色の下襲(したがさね)に添
へて侍りける

我がやどの櫻の色はうすくとも花のさかりはきてもをら(りイ)なむ

忘れ侍りにける人の家に花をこふとて　　兼覧王

年をへて花の便(たより)にこととはばいとどあだなる名をや立てな(ちイ)む

呼子鳥を聞きて隣の家におくり侍りける　　春道列樹

わが宿のはなにな鳴きそ呼子鳥よぶかひありて君もこなくに

壬生忠岑が左近のつがひのをさにて文おこせて
侍りけるついでに身を恨みて侍りける返事に　　紀貫之

ふりぬとて痛くな侘びそ春雨のただにやむべき物ならなくに

題しらず　　宮道高風

春の池の玉藻にあそぶにほどりの足のいとなき戀もするかな

寛平の御時花の色霞にこめて見せずといふ心を
よみて奉れとおほせられければ　　藤原興風

やまかぜの花の香かどふふもとには春の霞ぞほだしなりける

題しらず　　讀人しらず

春雨のよにふりにたる心にもなほあたらしく花をこそおもへ（みれイ）

京極の御息所におくり侍りける

春霞たちてくもゐになりゆくは雁のこころのかはるなるべし

題しらず

寐られぬをしひてわがぬる春の夜の夢を現になすよしもがな

忍びたりける男の許に春行幸あるべしと聞きて

女のもとにつかはしける　　藤原師尹朝臣

青柳のいとつれなくもなりゆくかいかなる筋に思ひよらまし

衛門の御息所の家うづまさに侍りけるにそこの

花面白かなりとて折りにつかはしたりければき

こえたりける（させたりけるイ）

やまざとに散りなましかば櫻花匂ふさかりも知られざらまし

御かへし

にほひこき花の香もてぞしられける植ゑてみるらむ人の心は

小貳につかはしける　　藤原朝忠朝臣

ときしもあれ花の盛につらければ思はぬ山に入りやしなまし

かへし

わがためにおもはぬ山のおとにのみ花さかりゆく（人イ）春を恨みむ

出でて　大將御息所

咲きさかずわれになつげそ櫻花人づてにやはきかむと思ひし

題しらず　讀人しらず

春くれば木がくれ多きゆふづく夜おぼつかなくも花陰にして

たちわたる霞のみかはやまたかみ見ゆる櫻のいろもひとつを

大空におほふばかりの袖もがなはるさく花をかぜにまかせじ

やよひのついたちごろに女に遣しける

なげきさへ春をしるこそ侘しけれもゆとは人に見えぬ物から

春雨のふらばおもひのきえもせでいとどなげき

のめをもやすらむといふ古歌の心ばへを女にい

ひ遣したりければ

もえ渡るなげきは春のさがなればおほかたにこそあはれとも見れ

けふ櫻雫にわが身いざぬれむ香ごめにさそふかぜのこぬまに

家より遠き所にまかる時前栽の櫻の花にゆひつけ侍りける　　菅原右大臣

櫻花ぬしをわすれぬものならば吹きこん風にことづてはせよ

春のこころを　　伊勢

あをやぎのいとよりはへて織るはたをいづれの山の鶯かきる

花のちるを見て　　凡河内躬恒

あひ思はで移ろふ色をみる物を花にしられぬながめするかな

歸る雁をききて　　讀人しらず

かへるかり雲路にまどふ聲すなり霞ふきとけこのめはるかぜ

朱雀院の櫻の面白きことと延光朝臣のかたり侍りければ見るよしもあらまし物をなど昔を思ひ

やまもりはいはばいはなむ高砂のをのへの櫻をりてかざさむ

面白き櫻を折りて友だちのつかはしたりければ　讀人しらず

櫻花いろはひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに

かへし　伊勢

見ぬ人の形見がてらは折らざりき身に准ふる花にしあらねば

櫻の花をよめる　讀人しらず

吹く風をならしの山の櫻花のどけくぞみる散らじとおもへば

前裁に竹の中に櫻のさきたるを見て　坂上是則

櫻花けふよく見てむくれたけの一よのほどにちりもこそすれ

題しらず　讀人しらず

櫻花にほふともなく春くればなどかなげきのしげりのみする

貞觀の御時弓のわざつかうまつりけるに　河原左大臣

後撰和歌集 卷第二

春歌中

年老いて後梅の花植(木イ)ゑてあくる年の春おもふところありて　藤原扶幹朝臣

植ゑし時花見むとしも思はぬに咲きちるみれば齡老いにけり

ねやの前に竹のある所に宿り侍りて　藤原伊衡朝臣

竹ちかくよどこねはせじ鶯の鳴くこゑきけばあさいせられず

大和のふるの山をまかるとて　僧正遍昭

いそのかみふるのやまべの櫻花うゑけむときをしる人ぞなき

花山にて道俗酒たうべけるをりに　素性法師

の枝を折りてみすのうちよりこれはいかがといだしてければ
春毎に咲きまさるべき花なれば今年をもまだあかずとぞ見る
はじめて宰相になりて侍りける年になむ

いもがいへのはひりにたてる青柳にいまやなくらむ鶯のこゑ
松の下にこれかれ侍りて花を見やりて　坂上是則
深みどりときはの松の陰にゐてうつろふ花をよそにこそ見れ
藤原雅正
花の色はちらぬまばかりふるさとにつねには松の緑なりけり
紅梅の花を見て　躬恒
紅にいろをばかへて梅のはな香ぞことごとににほはざりける
これかれまとゐして酒たうべけるまへに梅の花
に雪のふりかかりけるを　貫之
ふる雪はかつもけななむ梅の花ちるに惑はず折りでかざさむ
兼輔朝臣のねやの前に紅梅を植ゑて侍りけるを
三とせばかりの後花さきなどしけるを女どもそ

花だにもまださかなくに鶯のなくひところをはるとおもはむ

君がため山田の澤にゑぐつむとぬれにし袖はいまもかわかず

あひしりて侍りける人の家にまかれりけるに梅の木侍りけりこの花さきなむ時は必ずせうそこせむといひけるを音なく侍りければ　朱雀院の兵部卿のみこ

うめの花いまは盛になりぬらむたのめし人のおとづれもせぬ

かへし　紀長谷雄朝臣

春風（雨イ）にいかにぞ梅やにほふらむわが見る枝はいろもかはらず

春の日ことのついでありてよめる　讀人しらず

うめの花ちるてふなべにはるさめのふりでつつなく鶯のこゑ

かよひすみ侍りける人の家の前なる柳を思ひやりて　躬恒

梅の花をればこぼれぬ我が袖ににほひかうつせ家づとにせむ

をとこにつきて外にうつりて　讀人しらず

心もてをるかはあやな梅の花香をとめてだにとふひとのなき

年を經て心かけたる女の今年ばかりをだに待ち

くらせといひけるが又の年もつれなかりければ

人心うさこそまされ春たてばとまらず消ゆるゆきかくれなむ

題しらず

梅の花香をふきかくる春風にこころをそめばひとやとがめむ

はるさめのふらば野山にまじりなむ梅の花笠ありといふなり

かきくらし雪はふりつつしかすがに我が家のそのに鶯ぞなく

谷さむみいまだすだたぬ鶯のなくこゑわかみひとのすさめぬ

鶯のなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞわれは來にける

白玉をつつむ袖のみながるるは春はなみだもさえぬなりけり

人にわすられて侍りけるころ雨のやまず降りければ　　讀人しらず

春たちてわが身ふりぬるながめには人の心のはなもちりけり

題しらず

わがせこに見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪のふれれば

きて見べき人もあらじなわがやどの梅の初花をりつくしてむ

ことならば折り盡してむ梅の花わがまつ人のきても見なくに

吹く風にちらずもあらなむ梅の花わがかり衣ひと夜やどさむ

我がやどのうめの初花ひるは雪よるは月かと見えまがふかな

梅の花外ながら見む吾妹子がとがむばかりの香にもこそしめ　　素性法師

いつのまに霞たつらむ春日野のゆきだにとけぬ冬とみしまに

題しらず　閑院左大臣

なほざりに折りつるものを梅の花こき香にわれや衣そめてむ

前栽(せんざい)に紅梅を植ゑて又の春遲くさきければ　藤原兼輔朝臣

宿近くうつして植ゑしかひもなくまち遠にのみにほふ花かな

延喜の御時歌めしけるに奉りける　紀貫之

はるがすみたなびきにけり久方の月のかつらも花やさくらむ

おなじ御時みづし所にさぶらひけるころしづめるよしを歎きて御覽ぜさせよと覺しくてある藏人におくりて侍りける十二首がうち　躬恒

いづことも春の光はわかなくにまだみよしのの山はゆきふる

人のもとに遣しける　伊勢

しはすばかりに大和へ事につきてまかりける程に宿りて侍りける人の家のむすめを思ひかけて侍りけれどもやむごとなき事によりてまかりのぼりにけりおくる春親のもとに遣しける

躬恒

春日野におふるわかなを見てしより心をつねに思ひやるかな

かれにけるをとこのもとにその住みけるかたの庭の木の枯れたりける枝を折りて遣しける

兼覽王母

もえ出づる木のめを見てもねをぞなく枯れにし枝の春を知らねば

女の宮仕にまかり出でて侍りけるに珍しき程はこれかれ物いひなどし侍りけるを程もなく一人にあひ侍りにければ睦月のついたちばかりにいひ遣し侍りける

讀人しらず

題しらず

霞たつ春日(かすが)の野邊のわかなにもなりみてしがな人もつむやと

子日しにまかりけるに人におくれてつかはしける　　躬恒

春の野に心をだにもやらぬ身は若菜はつまでとしをこそつめ

宇多院に子日せむとありければ式部卿のみこをさそふとて　　行明親王

故郷の野邊みにゆくといふめるをいざ諸ともに若菜つみてむ

はつ春の歌とて　　紀友則

水のおもにあや吹きみだる春風やいけの氷をけふはとくらむ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　讀人しらず

ふく風や春たちきぬとつげつらむ枝にこもれる花さききにけり

久しく經て睦月のついたち頃にまへゆるされたりけるに雨のふるを見て　　讀人しらず

白雲のうへしる今日ぞ春雨のふるにかひある身とは知りぬる

朱雀院の子日におはしましけるにさはる事侍りてえつかうまつらずして延光朝臣につかはしける　　左大臣

松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしか櫻はやもさかなむ

院御かへし

まつにくる人しなければ春の野の若菜もなにもかひなかりけり

子の日にをとこのもとより今日は小松引きになむまかり出づるといへりければ　　讀人しらず

君のみや野邊に小松を引きにゆく我もかたみにつまむ若菜を

後撰和歌集 卷第一

春歌上

元日に二條の后の宮にて白き大うちぎをたまはりて　　藤原敏行朝臣

降る雪のみのしろ衣うちきつつ春きにけりとおどろかれぬる

春たつ日よめる　　凡河内躬恒

春立つとききつるからに春日山きえあへぬ雪の花と見ゆらむ

　　兼盛王

今日よりは荻のやけ原かきわけて若菜つみにと誰をさそはむ（まむイ）

ある人の許ににひまゐりの女の侍りけるが月日

巻第十四

おもふてふことの葉のみや秋をへて下

衣通姫(そとほりひめ)のひとりゐて帝をこひ奉りて

わがせこがくべき宵なりささがにの蛛の振舞かねてしるしも

深養父　戀しとはたがなづけけむことならむ下　貫之

道しらばつみにもゆかむ住の江のきしにおふてふ戀わすれ草

古今和歌集 終

巻第十一

奥山の菅の根しのぎふる雪下

けふひとをこふる心はおほゐがは流るる水におとらざりけり

わぎもこにあふ坂山の篠すすきほには出でずも戀ひ渡るかな

巻第十三

戀しくばしたにを思へ紫の下

犬がみのとこの山なるいさや（なとりイ）川いさと答へよ（てイ）わが名もらすな

この歌ある人あめの帝の近江の采女（うねめ）にたまへると

がへし　うねめの奉れる

やましなの音羽の瀧の音にだに人のしるべくわがこひめやも

なかたまの木　友則下

くれのおも　　貫　　之

こし時と戀つつをれば夕ぐれのおもかげにのみ見え渡るかな

忍草　利貞下

おきの井　みやこじま　小　野　小　町

おきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこしまべの別なりけり

からこと　清行下

そめどの　あはた　あ　や　も　ち

うきめをばよそめとのみぞのがれ行く雲のあはたつ山の麓に

此歌は水のをの帝の染殿より粟田へうつり給うける時によめる

桂宮下

ちはやぶる賀茂のやしろの姫小松萬代ふとも色はかはらじ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

家々稱證本之本乍書入以墨滅歌今別書之

卷第十　物名部

ひぐらし　貫之

杣人は宮木ひくらしあしびきの山のやまびこよびとよむなり

在郭公下空蟬上

かけりても何をかたまのきてもみむからは焰となりにし物を　勝臣

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山なみもこえなむ

さがみ歌

こよろぎの磯立ちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波

ひたち歌

筑波根の此面彼面にかげはあれど君がみ影にますかげはなし

筑波根の嶺のもみぢ葉落ち積りしるもしらぬもなべて悲しも

甲斐うた

かひがねをさやにも見しがけけれなく横をりふせるさやの中山

甲斐が根をねこし山こし吹く風を人にもがもや言づてやらむ

伊勢うた

をふの浦にかたえさし覆ひなる梨のなりもならずもねて語らはむ

冬の賀茂の祭の歌　　藤原敏行朝臣

近江のや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆるきみが千とせは

大伴黒主

これは今上のおほんべの近江の歌

東歌

みちのくうた

あぶくまに霧たちくも〔わたイ〕り明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

みちのくはいづくはあれど鹽竈のうらこぐ舟の綱手かなしも

わがせこを都にやりて鹽竈のまがきのしまのまつぞこひしき

をぐろ崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを

みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露はあめにまされり

最上川のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり

ひるめのうた

さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む

かへしものの歌

あをやぎをかたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅のはながさ

まがねふくきびの中山おびにせるほそ谷川のおとのさやけさ

此歌は承和のおほんべのきびの國の歌

美作やくめのさらやまさらさらにわが名はたてじ萬代までに

これは水の尾のおほんべの美作の國の歌

みののくに關の藤川たえずして君につかへむよろづ代までに

これは元慶のおほんべの美濃の歌

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも

これは仁和のおほんべの伊勢の國の歌

水ぐきの岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

しはつ山ぶり

しはつ山うち出でて見れば笠ゆひの島こぎかくる棚なし小舟

神あそびの歌

とりものの歌

神垣のみむろの山の榊葉はかみのみまへにしげりあひにけり

霜やたびおけどかれせぬ榊葉のたちさかゆべき神のきねかも

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがにやまかづらせよ

みやまには霰ふるらし外山(とやま)なるまさきのかづら色づきにけり

陸奥(みちのく)のあだちのま弓わがひかば末さへよりこしのびしのびに

我が門の板井の清水里とほみ人し汲まねばみくさおひにけり

古今和歌集 卷二十

大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをへめ

日本紀にはつかへまつらめよろづ代までに

ふるきやまと舞のうた

しもとゆふかつらき山に降る雪のまなく時なく思ほゆるかな

近江ぶり

近江より朝立ちくればうねの野に鶴ぞ鳴くなる明けぬ此夜は

みづくきぶり

身は捨てつ心をだにも放(はふ)らさじ終にはいかがなると知るべく　　興風

白雪のともに我が身はふりぬれど心は消えぬ物にぞありける　　千里

題しらず　　讀人しらず

梅の花咲きての後のみなればやすきものとのみ人のいふらむ

法皇西川におはしましたりける日猿山のかひに

さけぶといふことを題にてよませ給うける　　躬恒

佗びしらに猿(ましら)な鳴きそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ

題しらず　　讀人しらず

世を厭ひこのもとごとに立ちよりてうつぶし染の麻の衣(きぬ)なり

大　輔

なげきこる山とし高くなりぬればつら杖のみぞまづつかれける

讀人しらず

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり

人戀ふることを重荷と荷ひもてあふごなきこそ佗しかりけれ

宵の間に出でて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな

そへにとてとすればかかりかくすればあないひ知らずあふさきるさに

世の中の憂きたびごとに身をなげば深き谷こそ淺くなりなめ

在原元方

世の中はいかにくるしと思ふらむここらの人に恨みらるれば

讀人しらず

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき

なかさ

くもはれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ

伊勢

難波なるながらの橋もつくるなり今は我が身を何にたとへむ

讀人しらず

まめなれど何ぞはよけく刈萱の亂れてあれどあしけくもなし

興風

何かその名のたつ事のをしからむ知りて惑ふはわれ一人かは

いとこなりける男によそへて人のいひければ　くそ

外ながら我が身にいとのよるといへばただ僞にすくばかりなり

題しらず　讃岐

ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそ果はなげきの森となるらめ

一本　深養父

思ひけむひとをぞともに思はましまさしや報なかりけりやは

一本　讀人しらず

出でて行かむ人をとどめむよしなきに隣の方に鼻もひぬかな

くれなゐにそめし心もたのまれず人をあくには移るてふなり（たイ）

厭はるる我が身は春の駒なれや野がひがてらに放ち捨てつる

鶯のこぞのやどりのふるすとやわれには人のつれなかるらむ

さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる

平中興

逢ふ事の今ははつかに成りぬれば夜深からで（ればイ）はつきなかりけり

左のおほいまうち君

もろこしの吉野の山に籠るとも後れむと思ふわれならなくに

紀のよしひと

秋の野につまなき鹿の年をへてなぞ我が戀のかひよとぞ鳴く

躬恒

蟬の羽のひとへに薄き夏衣なればよりなむものにやはあらぬ

忠岑

隱沼（かくれぬ）の下より生ふるねぬなはの寐ぬ名はたてじくるな厭ひそ

讀人しらず

ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世のなかの玉襷なる

思ふてふ人の心のくまごとに立ちかくれつつ見るよしもがな

思へども思はずとのみいふなればいなや思はじ思ふかひなし

われをのみ思ふといはばあるべきをいでや心はおほ幣（ぬさ）にして

われを思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人のわれを思はぬ

紀のめのと

富士のねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬ空し煙を

紀のありとも

逢ひ見まくほしは數なく有りながら人につきなみ惑ひこそすれ

小野小町

人に逢はむつきのなきには思ひおきて胸はしり火に心やけけり

寛平の御時后の宮の歌合の歌　藤原興風

春霞たなびく野邊のわかなにもなりみてしがな人もつむやと

題しらず　讀人しらず

思へどもなほうとまれぬ春霞かからぬ山のあらじとおもへば

平貞文

春の野のしげき草葉のつま戀にとびたつ雉のほろろとぞなく

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋かぜにほころびぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりす鳴く

あす春立たむとしける日隣の家の方より風の雪
を吹きこしけるを見て其隣へ詠みて遣しける　清原深養父

冬ながら春のとなりのちかければなか垣よりぞ花はちりける

題しらず　讀人しらず

石(いそ)の上(かみ)ふりにし戀の神さびてたたるにわれはいぞねかねつる

枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞ床なかにをる

戀しきが形(かた)もかたこそありときけたてれをれどもなき心地する

ありぬやと心見がてら逢ひ見ねばたはぶれにくき迄ぞ戀しき

みみなしの山の口なしえてしがなおもひ(てイ)の色の下ぞめにせむ

足引の山田のそほづ己(おのれ)さへわれをほしといふうれはしきこと

いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさを朝な朝なよぶ　藤原敏行朝臣

七月六日たなばたの心をよめる

いつしかとまたく心をはぎにあげて天の河原をけふや渡らむ　藤原かねすけ

題しらず

睦言もまだ盡きなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は　凡河内躬恒

（睦言の・の　イ、明けぬ・にけ　イ）

秋の野になまめきたてる女郞花あなかしがまし花もひととき　僧正遍昭

讀人しらず

秋くれば野邊にたはるる女郞花いづれの人かつまで見るべき

（つまで・てに　イ）

秋霧のはれてくもればをみなへしはなの姿ぞ見えかくれする

花と見て折らむとすれば女郞花うたたある樣の名にこそありけれ

まひなしに　ただなのるべき　花の名なれや

題しらず

はつせ川　ふる川のべに　ふたもとある杉
としを經て　またもあひみむ　二もとある杉

貫之

君がさす　みかさの山の　もみぢ葉のいろ
かみなづき　しぐれのあめの　染めるなりけり

誹諧歌

題しらず　讀人しらず

梅の花見にこそきつれうぐひすのひとくひとくと厭ひしもをる

素性法師

やまぶきの花色衣ぬしやたれ問へどこたへずくちなしにして

伊勢の蜑も　ふねながしたる　ここちして　よらむかたなく
かなしきに　なみだのいろの　くれなゐは　われらがなかの
しぐれにて　あきのもみぢと　ひとびとは　おのがちりぢり
わかれなば　たのむかげなく　なりはてて　とまるものとは
はなすすき　きみなきにはに　むれたちて　そらをまねかば
はつかりの　なきわたりつつ　よそにこそ見め

旋頭歌

題しらず　　　　讀人しらず

うち渡す　をちかた人に　ものまうすわれ
そのそこに　しろくさけるは　なにの花ぞも

かへし

春されば　野邊にまづさく　見れどあかぬ花

ぐすりもが　きみが八千代を　わかえつつ見む

君が世にあふさかやまの岩清水こがくれたりと思ひけるかな

冬のながうた　凡河内躬恒

ちはやぶる　かみなづきとや　けさよりは　くもりもあへず
うち（はつイ）しぐれ　もみぢとともに　ふるさとの　よし野のやまの
山あらしも　さむく日ごとに　なりゆけば　たまの緒とけて
こきちらし　あられみだれて　しもこほり　いやかたまれる
庭のおもに　むらむら見ゆる　ふゆくさの　うへに降りしく
しらゆきの　つもりつもりて　あらたまの　としをあまたも（にイ）
すぐしつるかな

七條の后うせ給ひにける後によみける　伊勢

おきつなみ　あれのみまさる　宮のうちは（にイ）　としへて住みし

みかきより（もりイ）　とのへもる身の　みかきもり（なかイ）　をさをさしくも
おもほえず　ここのかさねの　うちにては　あらしのかぜも
きかざりき　いまは野やまし　ちかければ　はるはかすみに
たなびかれ　なつはうつせみ　鳴きくらし　あきはしぐれに
そでをかし　ふゆはしもにぞ　せめらるる　かかるわびしき
身ながらに　つもれるとしを　しるせれば　いつつ（としイ）のむつに
なりにけり　これに添はれる　わたくしの　おいのかずさへ
やよければ　身はいやしくて　としたかき　ことのくるしさ
かくしつつ　ながらのはしの　ながらへて　なにはのうらに
たつなみの　なみのしわにや　おほほれむ　さすがにいのち
をしければ　こしのくになる　しらやまの　かしらはしろく
なりぬとも　おとはのたきの　おとに聞く　老いず死なずの

板まあらみ　降るはるさめの　もりやしぬらむ

ふる歌にくはへて奉れる長歌　　壬生忠岑

くれたけの　よよのふるごと　なかりせば　伊香保のぬまの
いかにして　おもふこころを　のばへまし　あはれむかしべ
有りきてふ　ひとまろこそは　うれしけれ　身はしもながら
ことの葉を　あまつそらまで　きこえあげ　すゑの世までの
あととなし　いまもおほせの　くだれるは　ちりにつげとや
ちりの身に　つもれることを　問はるらむ　これをおもへば
いにしへも　くすりけがせる　けだものの　くもに吼えけむ
ここちして　ちぢのなさけも　おもほえず　ひとつこころぞ
ほこらしき　かくはあれども　照るひかり　ちかきまもりの
身なりしを　たれかはあきの　くるかたに　あざむきいでて

鳴くごとに　たれも寐覺めて　からにしき　たつたのやまの
もみぢ葉を　見てのみしのぶ　かみなづき　しぐれしぐれて
ふゆの夜の　にはもはだれに　降るゆきの　なほ消えかへり
としごとに　ときにつけづつ　あはれてふ　ことをいひづつ
きみをのみ　千代にといはふ　世のひとの　おもひするがの
富士の嶺の　燃ゆるおもひに(もイ)　あかずして　わかるるなみだ
ふぢごろも　おれるこころも　やちくさの　ことの葉ごとに
すべらぎの　おほせかしこみ　まきまきの　なかにつくすと
伊勢の海の　うらのしほがひ　拾ひあつめ　取れりとすれど
たまの緒の　みじかきこころ　思ひあへず　なほあらたまの
としを經て　おほみやにのみ　ひさかたの　ひるよるわかず
つかふとて　かへりみもせぬ　わがやどの　しのぶ草おふる

おもへども　闇浮の身なれば　なほ止まず　おもひはふかし
あしびきの　やましたみづの　木がくれて　たぎつこころを
たれにかも　あひかたらはむ　色にいでば　ひと知りぬべみ
すみぞめの　ゆふべになれば　ひとり居て　あはれあはれと
歎きあまり　せむすべなみに　庭にいでて　立ちやすらへば
しろたへの　ころものそでに　置くつゆの　消なばけぬべく
おもへども　なほなげかれぬ　はるがすみ　よそにもひとに
あはむとおもへば

ふる歌奉りし時目錄のその長歌　貫　之

ちはやぶる　かみの御代より　くれたけの　よよにもたえず
あまびこの　おとはのやまの　はるがすみ　おもひみだれて
さみだれの　そらもとどろに　さ夜ふけて　やまほととぎす

古今和歌集 巻第十九

雑體

長歌

題しらず　　　　　　　　　　　　讀人しらず

逢ふことの　まれなるいろに　おもひそめ　我が身はつねに
あまぐもの　晴るるときなく　富士のねの　もえつつとはに
おもへども　逢ふことかたし　なにしかも　ひとをうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　おもひてし　おもひはいまは
いたづらに　なりぬべらなり　ゆくみづの　絶ゆるときなく
かくなはに　おもひみだれて　降るゆきの　消なばけぬべく

寛平の御時歌奉りけるついでに奉りける　大江千里

あしたづの獨おくれてなく聲は雲のうへまできこえつがなむ

歌めしける時に奉るとてよみておくに書きつけて奉りける　藤原勝臣

人しれずおもふこころは春霞たちいでて君がめにも見えなむ

伊勢

山川のおとにのみ聞く百敷をみをはやながら見るよしもがな

河内へいくごとに男のこゝろの如くにしつついだしやりければあやしと思ひてもしなきまにことごころもやあるとうたがひて月のおもしろかりける夜河内へいくまねにて前栽の中にかくれて見ければ夜ふくるまで琴をかきならしつつうちなげきてこの歌をよみてねにければこれを聞きてそれよりまたほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつ田の山にうち（おり）はへてなく

わすられむ時しのべとか（ぞイ）濱千鳥ゆくへもしらぬ跡をとどむる

貞観の御時萬葉集はいつばかりつくれるぞと問はせ給ひければよみて奉りける　文屋ありすゑ

神無月時雨降りおけるならの葉の名におふ宮の古（ふる）ことぞこれ

女ともだちと物語して別れて後につかはしける　みちのく

あかざりし袖の中にや入りにけむ我がたましひのなき心地する

寛平の御時にもろこしのはう官にめされて侍りける時に東宮のさぶらひにてをのこども酒たうべけるついでによみ侍りける　藤原ただふさ

なよ竹のよながきうへに初霜のおきゐて物をおもふころかな

題しらず　讀人しらず

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにやきみがひとりこゆらむ

或人この歌はむかし大和の國なりける人のむすめにある人すみ渡りけるこの女おやもなくなりて家もわろくなりゆくあひだこの男河内の國に人を相知りて通ひつつかれやうにのみなりゆきけりさりけれどもつらげなるけしきも見えで

初瀬に詣づる道に奈良の京にやどれりけるとき
よめる　二條

人ふるす里をいとひてこしかどもならの都もうき名なりけり

題しらず　讀人しらず

世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿と定むる

逢坂のあらしの風はさむけれど行方しらねば佗びつつぞぬる

風の上にありか定めぬ塵の身は行方も知らずなりぬべらなり

家をうりてよめる　伊勢

飛鳥川ふちにもあらぬわが宿もせに變りゆく物にぞありける

つくしに侍りける時にまかり通ひつつ碁うちけ
る人の許に京に歸りまうできてつかはしける　紀友則

故鄕は見しごともあらず斧の柄のくちし所ぞこひしかりける

越なりける人に遣しける　紀貫之

思ひやるこしの白山しらねどもひとよも夢にこえぬ夜ぞなき

題しらず　讀人しらず

いざここに我が世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

我が庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひきませ杉たてるかど

喜撰法師

我が庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢやまと人はいふなり

讀人しらず

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ

奈良へまかりける時にあれたる家に女の琴ひきけるをききてよみていれたりける　良岑宗貞

佗人のすむべき宿と見るなべになげきくははる琴の音ぞする

友だちの久しうまうでこざりけるもとによみて（へイ）
遣しける　　躬恒
水の面におふるさ月の浮草のうきことあれや根を絶えてこぬ
人をとはで久しうありけるをりにあひうらみけ
ればよめる
身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり
むねをかのおほよりが越よりまうできたりける
ときに雪の降りけるを見ておのがおもひはこの
雪のごとくなむ積れるといひける折によめる
君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば
かへし　　宗岳大頼
君をのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆるときある

りける人によみておくりける

年をへて住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ

かへし　　　　讀人しらず

野とならば鶉と鳴きて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

題しらず

我を君難波の浦に有りしかば憂きめをみつのあまと成りにき

この歌はある人むかし男ありけるをうなの男とはずなりにければ難波のみつの寺にまかりて尼になりてよみて男に遣せりけるとなむいへる

かへし

難波潟うらむべきまも思ほえず何處(いづこ)をみつのあまとかはなる

今さらにとふべき人もおもほえず八重葎してかどさせりてへ

むけせむとて今日といひおくれりける時にここかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければ遣しける

業平朝臣

今ぞ知る苦しきものと人またむ里をばかれず問ふべかりけり

惟喬のみこの許にまかり通ひけるをかしらおろして小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるに比叡の山の麓なりければ雪いと深かりけりしひて彼のむろにまかりいたりてをがみけるに徒然としていと物悲しくで歸りまうできてよみて送りける

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは

深草の里にすみ侍りて京へまうでくとてそこな

ありはてぬ命待つまの程ばかりうきことしげく思はずもかな（歎かイ）
　みこの宮の帶刀に侍りけるを宮づかへつかうまつらずとて解けて侍りける時によめる　　みやぢのきよき
筑波嶺のこのもと毎に立ちぞよる春のみ山のかげを戀ひつつ
　時なりける人の俄に時なくなりて歎くを見てみづからのなげきもなくよろこびもなきことを思ひてよめる　　淸原深養父
光なき谷には春も外（よそ）なれば咲きてとくちるものおもひもなし
　桂に侍りける時に七條中宮とはせ給へりける御かへり事に奉りける　　伊勢
ひさかたのなかにおひたる里なれば光をのみぞ賴むべらなる
　紀の利貞が阿波の介にまかりける時むまのはな

わが身からうき世の中と歎きつつ人のためさへ悲しかるらむ

隱岐の國に流されて侍りける時によめる　篁朝臣

思ひきやひなの別におとろへて蜑のなはたぎいさりせむとは

田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣しける　在原行平朝臣

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ

左近將監とけて侍りける時に女のとぶらひにおこせたりける返事によみて遣しける　小野春風

あまびこの訪れじとぞ今は思ふわれか人かと身をたどる世に

つかさとけて侍りける時よめる　平貞文

憂世には門させりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする

足引の山のまにまにかくれなむうき世の中はあるかひもなし
世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし
おなじ文字なき歌　　　もののべのよしな
世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ
山の法師のもとへつかはしける　　　凡河内躬恒
世をすてて山にいる人やまにても猶うき時はいづち行くらむ
物おもひける時いときなき子を見てよめる
今更になに生ひいづらむ竹の子のうきふし繁きよとはしらずや
題しらず　　　讀人しらず
よにふればことの葉しげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく
木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべらなり
ある人のいはくたかつの皇子の歌なり

惟喬のみこ

白雲の絶えずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそありけれ

布留今道

知りにけむ聞きても厭へ世の中は波のさわぎに風ぞしくめる

素性

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

讀人しらず

世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれるか

世の中をいとふ山邊の草木とやあなうの花の色に出でにけむ

み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

世にふればうさこそまされみ吉野の岩の陰路ふみならしてむ

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞えこざらむ

みやこびといかにと問はば山高みはれぬ雲井にわぶと答へよ

文屋の康秀が三河のぞうに成りてあがた見にはえ出でたたじやと云ひやれりける返事によめる　小　野　小　町

侘びぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

題しらず

あはれてふ事こそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ

読　人　し　ら　ず

あはれてふ言の葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり

世の中は夢か現かうつつともゆめとも知らずありてなければ

世の中にいづら我が身のありてなし哀とやいはむあなうとやいはむ

山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり

古今和歌集　巻第十八

雑歌下

題しらず　　　讀人しらず

世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬に(とイ)なる

幾世しもあらじ我が身をなぞもかく蜑の刈藻に思ひみだるる

雁のくるみねの朝霧はれずのみおもひつきせぬ世の中のうさ

小野篁朝臣

然りとて背(そむ)かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中

甲斐の守にて侍りける時京へまかりのぼりける人につかはしける　　　小野貞樹

歌よめとさぶらふ人に仰せられければよめる　三條の町

おもひせく心のうちの瀧なれやおつとは見れど音のきこえぬ

屛風の繪なる花をよめる　貫之

咲きそめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

屛風の繪によみ合せてかきける　坂上是則

刈りてほす山田の稻のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

龍門にまうでて瀧のもとにてよめる　伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

朱雀院の帝布引の瀧御覽ぜむとてふん月の七日の日おはしましてありける時にさぶらふ人々に歌よませ給ひけるによめる　橘長盛

主なくてさらせる布をたなばたにわが心とや今日はかさまし

比叡の山なるおとはの瀧を見てよめる　忠岑

落ちたぎつ瀧のみなかみ年積り老いにけらしな黑きすぢなし

おなじ瀧をよめる　躬恒

風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつるみづにぞありける

田村の御時に女房のさぶらひにて御屛風の繪御覽じけるに瀧落ちたりける所面白し是を題にて

水の上に浮べる船の君ならばここぞとまりといはましものを

からことといふ所にてよめる　眞せい法師

都までひびきかよへるからことは波の緒すげて風ぞひきける

布引の瀧にてよめる　在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうきときの涙にぞかる

布引の瀧のもとにて人々あつまりて歌よみける時によめる　業平朝臣

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

吉野の瀧を見てよめる　承均法師

誰が爲にひきて洒せる布なれや世をへて見れどとる人の（もイ）なき

題しらず　神たい法師

きよたきの瀬々の白糸くりためてやまわけ衣おりてきましを

つかはしける　　　　　　　　　　　　壬生忠岑

すみよしと蜑はつぐともながゐすな人忘れ草おふといふなり

難波へまかりけるとき田蓑の島にて雨にあひて

よめる　　　　　　　　　　　　　　貫之

雨により田蓑の島を今日ゆけばなにには隱れぬ物にぞ有りける

法皇西川におはしましたりける日鶴洲にたてり

といふことを題にてよませ給ひける

あしたづのたてる川邊を吹く風によせて歸らぬ波かとぞ見る

中務のみこの家の池に船をつくりておろしはじ

めてあそびける日法皇御覽じにおはしましたり

けり夕さりつかた歸りおはしまさむとしける折

によみて奉りける　　　　　　　　　伊勢

わたつ海の沖つ鹽あひに浮ぶ沫の消えぬ物からよる方もなし
わたつみのかざしにさせる白妙のなみもてゆへるあはぢ島山
わたの原よせくる波のしばしば見まくのほしき玉津島かも
なにはがた汐みちくらしあま衣たみのの島にたづなきわたる

貫之が和泉の國に侍りける時にやまとよりこえ
まうできてよみて遣しける　藤原忠房

君を思ひ沖つの濱に鳴くたづの尋ねくればぞありとだに聞く

かへし　貫之

沖つ波たかしの濱のはままつの名にこそ君をまちわたりつれ

なにはにまかれりける時によめる

難波潟おふる玉藻をかりそめの蜑とぞわれはなりぬべらなる

あひ知れりける人の住吉にまうでけるによみて

うまつれる　　　　　　　　　　　　敏行朝臣

老いぬとてなどか我が身をせめきけむ老いずは今日にあはまし物か

題しらず　　　　　　　　　　　　讀人しらず

千早振うぢの橋守なれをしぞあはれとはおもふ年のへぬれば

我が見てもひさしくなりぬ住吉（すみのえ）のきしの姫松いく世經ぬらむ

すみよしの岸の姫松ひとならば幾代か經しと問はましものを

あづさゆみ磯邊の小松たがよにか萬代かけてたねをまきけむ

この歌はある人のいはく柿本人麿がなり

かくしつつ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに

　　　　　　　　　　　　　　　　藤原興風

たれをかも知る人にせむたかさごのまつも昔の友ならなくに

　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りけるに業平みやづかへすとて時々もえまかりとぶらはず侍りければしはすばかりに母のみこのもとよりとみの事とて文をもてまうできたりあけて見ればことばはなくて有りける歌

老いぬればさらぬ別のありといへば彌々見まくほしき君かな

かへし　業平朝臣

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

白雪のやへふりしけるかへる山かへるがへるも老いにけるかな

同じ御時うへのさぶらひにてをのこどもにおほみき給ひておほみあそびありけるついでにつか

おほあらきの森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし

又はさくらあさのをふの下草おいぬれば

數ふればとまらぬ物をとしといひて今年は痛く老いぞしにける

おしてるや難波のみつに燒く鹽のからくも我は老いにけるかな

又はおほとものみつの濱邊に

老いらくのこむと知りせば門さしてなしと答へて逢はざらましを

此三つの歌は昔ありけるみたりの翁のよめるとなむ

さかさまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齡や共に歸ると

とりとむる物にしあらねば年月を哀あなうとすぐしつるかな

留めあへず宜もとしとは言はれけり然もつれなくすぐる齡か

鏡山いざたちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

此歌はある人のいはく大伴黒主がなり

あかなくにまだきも月の隱るゝか山の端にげて入れずもあらなむ

田村の帝の御時に齋院に侍りけるあきらけいこのみこを母あやまちありといひて齋院をかへられむとしけるを其事やみにければよめる　あま敬信

おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせども光けなくに

題しらず　讀人しらず

石の上ふるから小野のもとがしはもとの心はわすられなくに

いにしへの野中のしみづぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

古のしづのをだまき賤しきもよきもさかりはありしものなり

今こそあれわれもむかしは男山さかゆく時もありこしものを

世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり

笹の葉に降りつむ雪のうれを重みもとくだちゆく我が盛はも

月おもしろしとて凡河内躬恒がまうできたりけるによめる　紀貫之

かつ見れど疎くも有るかな月影の到らぬ里もあらじと思へば

池に月の見えけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなぞこに山の端ならで出づる月影

題しらず　讀人しらず

あまのがは雲のみをにてはやければ光とどめず月ぞながるる

あかずして月の隱るる山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

惟喬のみこの狩しける供にまかりてやどりに歸りて夜ひとよ酒をのみ物語をしけるに十一日の月も隱れなむとしける折にみこ醉ひて內へ入りなむとしければよみ侍りける　業平朝臣

玉垂のをがめやいづらこよろぎの磯の波わけ沖に出でにけり

女どもの見て笑ひければよめる　けんけい法師

かたちこそみやまがくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

方たがへに人の家にまかれりける時にあるじの

きぬを著せたりけるをあしたにかへすとてよみ

ける　紀友則

蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな

題しらず　讀人しらず

遲く出づる月にもあるかな足引の山のあなたも惜むべらなり

我が心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て

業平朝臣

大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

おほはらや小鹽の山も今日こそは神代のことも思ひ出づらめ

五節の舞姫を見てよめる　良岑宗貞

あまつ風雲のかよひぢ吹きとぢよをとめの姿しばしとどめむ

五節のあしたにかむざしの玉の落ちたりけるを見て誰がならむととぶらひて詠める　河原左大臣

ぬしや誰とへどしら玉いはなくにさらばなべてや哀と思はむ

寛平の御時にうへのさぶらひに侍りけるをのこども瓶を持たせて后の宮の御方におほみきのおろしときこえに奉りたりけるを藏人ども笑ひて瓶を御前にもて出でてともかくもいはずなりにければ使の歸りきてさなむありつるといひければ藏人のなかに送りける　壬生忠岑

おくるとてよみてやりける　業平朝臣

紫のいろこきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

大納言藤原のくにつねの朝臣宰相より中納言になりける時にそめぬうへのきぬのあやをおくるとてよめる　近院右大臣

色なしと人や見るらむむかしよりふかき心にそめてしものを

石の上のなんまつが宮仕もせでいその上といふ所にこもり侍りけるを俄にかうぶりたまはれりければ悦いひつかはすとてよみて遣しける　布留今道

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里に花も咲きけり

二條の后のまだ東宮の御息所と申しける時に大原野に詣うで給ひける日よめる　業平朝臣

古今和歌集卷第十七

雜歌上

題しらず　　　　　　　　讀人しらず

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいのしづくか

思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまく惜しき物にぞ有りける

うれしきをなににつつまむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを

かぎりなき君が爲にと折る花は時しもわかぬ物にぞありける

或人のいはく此歌はさきのおほいまうち君のなり

紫のひともとゆゑに武藏野のくさはみながらあはれとぞ見る

めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬを

けるもみぢ葉を風に任せて見るよりもはかなきものは命なりけり
大江千里

みまかりなむとてよめる
藤原これもと

露をなどあだなる物と思ひけむ我が身も草におかぬばかりを
やまひして弱くなりにける時よめる
業平朝臣

終に行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを
甲斐の國にあひ知りて侍りける人とぶらはむとてまかりける道なかにてにはかに病をしていまいまとなりにければよみて京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍りける歌
在原滋春

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今は限のかどでなりけり

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりける
をいくばくもあらで女のみこの身まかりにける
時にかのみこの住みける帳のかたびらのひもに
ふみをゆひつけたりけるを取りてみれば昔の手
にてこの歌をなむ書きつけたりける

かずかずにわれを忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ

をとこの人の國にまかりけるまに女にはかに病
をしていとよわくなりける時よみ置きて身まか
りにける　　　　　　　　　　　　讀人しらず

聲をだに聞かで別るるたまよりもなき床にねむ君ぞかなしき

やまひにわづらひ侍りける秋こころのたのもし
げなくおぼえければよみて人のもとにつかはし

秋の夜ふけて物よりまうできけるついでに見いれければもとありし前栽いと茂く荒れたりけるを見て早くそこに侍りければ昔を思ひやりてよみける　　　　　　　　みはるのありすけ

君が植ゑし一むら薄蟲の音のしげき野邊ともなりにけるかな

惟喬のみこの父の侍りけむ時によめりけむうたどもとこひければかきて送りける奥によみて書ける　　　　　　　　友則

ことならば言の葉さへも消えななむ見れば涙の瀧まさりけり

題しらず　　　　　　　　讀人しらず

なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ

誰みよと花さけるらむ白雲のたつ野とはやくなりにしものを

にかの植ゑける人身まかりにければその花を見
てよめる　　　　　　　　紀のもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれを先に戀ひむとか見し

あるじ身まかりにける人の家の梅の花をみてよ
める　　　　　　　　　　貫　之

色も香もむかしのこさに匂へどもうゑけむ人の影ぞこひしき

河原の左のおほいまうちぎみの身まかりて後か
の家にまかりてありけるに鹽釜といふ所のさま
をつくれりけるを見てよめる

君まさで煙たえにししほがまのうら寂しくも見えわたるかな

藤原の利基の朝臣の右近中將にてすみ侍りける
ざうしの身まかりて後人もすまずなりにけるに

もまじらずして比叡の山に登りてかしらおろし
てけりその又の年みな人御ぶくぬぎてあるはか
うぶり給はりなどよろこびけるを聞きてよめる　僧正遍昭
みな人ははなの衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ
河原のおほいまうち君の身まかりての秋かの家
の邊をまかりけるに紅葉の色まだ深くもならざ
りけるを見てかの家によみていれたりける　近院右大臣
うちつけに寂しくも有るかもみぢ葉も主なき宿は色なかりけり
藤原のたかつねの朝臣の身まかりての又の年の
夏郭公のなきけるを聞きてよめる　貫之
郭公けさなく聲におどろけば君にわかれしときにぞありける
櫻を植ゑてありけるにやうやく花咲きぬべき時

稲葉

朝露のおくての山田かりそめにうきよの中をおもひぬるかな

おもひに侍りける人をとぶらひに罷りてよめる　忠岑

すみぞめの君がたもとは雲なれや絶えず涙のあめとのみふる

めの親のおもひにて山寺に侍りけるをある人の

とぶらひ遣せりければ返事によめる　讀人しらず

あしびきの山邊にいまはすみぞめの衣の袖のひるときもなし

諒闇の年池のほとりの花を見てよめる　篁朝臣

水の面にしづく花の色さやかにも君がみ影のおもほゆるかな

深草の帝の御國忌の日よめる　文屋康秀

草深き霞の谷にかげかくし照る日のくれし今日にやはあらぬ

深草の帝の御時に藏人の頭にてよるひるなれつ

かうまつりけるを諒闇に成りにければ更に世に

まかりける時にとぶらひに遣すとてよめる　閑院

さきだたぬくいの八千度悲しきは流るる水のかへりこぬなり

紀友則が身まかりにける時よめる　貫之

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ

忠岑

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを

母がおもひにてよめる　凡河内躬恒

神無月しぐれにぬるるもみぢ葉はただわびびとの袂なりけり

父がおもひにてよめる　忠岑

ふぢごろもはつるる糸はわびびとの涙の玉の緒とぞなりける

おもひに侍りける年の秋山寺へまかりけるみちにてよめる　貫之

かんつけの岑雄

深草の野邊のさくらし心あらばことしばかりは墨ぞめにさけ

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家に遣しける　紀友則

寝ても見ゆねでも見えけりて大方は空蟬の世ぞ夢には有りける

あひ知れりける人の身まかりにければよめる　紀貫之

夢とこそいふべかりけれ世の中に現あるものと思ひけるかな

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる　壬生忠岑

ぬるが内に見るをのみやは夢と言はむはかなき世をも現とはみず

姉のみまかりにける時によめる

瀬をせけば淵と成りてもよどみけりわかれをとむる柵ぞなき

藤原のただふさが昔あひ知りて侍りける人の身

古今和歌集　卷第十六

哀傷歌

妹の身まかりける時よみける　　小野篁朝臣

泣くなみだ雨とふらなむ渡り川水まさりなばかへりくるがに

さきのおほきおほいまうち君を白河のあたりに
おくりける夜よめる　　素性法

血の涙落ちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそありけれ

堀河のおほきおほいまうち君身まかりにける時
に深草の山にをさめて後に詠みける　　僧都勝延

うつせみはからを見つつもなぐさめつ深草のやま煙だにたて

讀人しらず

秋といへば外にぞ聞きしあだ人の我を古せる名にこそ有りけれ

忘らるる身をうぢ橋の中たえて人もかよはぬとしぞへにける

又はこなたかなたに人も通はず

坂上是則

逢ふ事を長柄(ながら)の橋のながらへて戀ひわたるまに年ぞへにける

友則

うきながらけぬる沫ともなりななむ流れてとだに頼まれぬ身は

讀人しらず

流れてはいもせの山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

夕されば人なき床をうちはらひ歎かむためとなれる我が身か

讀人しらず

わたつみの我が身こす波立ち返り蜑の住むてふ浦みつるかな

あら小田をあらすきかへし返しても人の心を見てこそやまめ

ありそ海の濱の眞砂と頼めしは忘るることの數にぞ有りける

蘆べより雲井をさしてゆく雁のいやとほざかる我が身悲しも

しぐれつつもみづるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき

あき風の吹きとふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

小町

秋風にあふたのみこそ悲しけれ我が身空しくなりぬと思へば

平貞文

秋風の吹きうらがへす葛の葉のうらみても猶うらめしきかな

あひみぬもうきも我が身の唐衣思ひしらずも解くるひもかな　　いなば

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　菅野忠臣

つれなきを今は戀ひじと思へどもこころよわくもおつる涙か

題しらず　　伊勢

人知れず絶えなましかば侘びつつもなき名ぞとだにいはまし物を

讀人しらず

それをだに思ふ事とて我が宿をみきとないひそ人のきかくに

逢ふ事のもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりけれ

侘びはつるときさへ物の悲しきはいづこをしのぶ涙なるらむ

藤原興風

うらみても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

忘れ草かれもやするとつれもなき人のこころに霜は置かなむ

寛平の御時御屏風に歌かかせ給ひける時よみてかきける　素性法師

わすれぐさなにをかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり

題しらず

秋の田のいねてふ事もかけなくに何をうしとか人のかるらむ

紀貫之

初雁の鳴きこそわたれ世の中の人のこころのあきしうければ

讀人しらず

あはれとも憂しとももものを思ふ時などか涙のいとなかるらむ

身を憂しと思ふに消えぬ物なればかくても經ぬる世にこそ有りけれ

典侍藤原直子朝臣

蜑のかる藻に住む蟲の我からとねをこそなかめ世をば恨みじ

讀人しらず

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすきいろにぞありける

心こそうたてにくけれ染めざらばうつろふ事も惜からましや

小町

色みえでうつろふものは世の中のひとの心の花にぞありける

讀人しらず

われのみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花とちりなば

素性法師

思ふともかれなむ人を如何せむあかず散りぬる花とこそ見め

讀人しらず

今はとて君がかれなば我が宿の花をばひとり見てやしのばむ

宗于朝臣

るあひだにやけたるちの葉に文をさしてつかはせりける　　小町が姉

時すぎて枯れゆく小野の淺茅には今はおもひぞ絶えずもえける

物思ひける頃物へまかりける道に野火のもえけるを見てよめる　　伊勢

冬枯の野邊と我が身を思ひせばもえても春をまたましものを

題しらず　　友則

水の沫のきえでうき身といひながら流れて猶も賴まるるかな

讀人しらず

水無瀨川(みなせがは)ありて行く水なくばこそ終に我がみをたえぬと思はめ

躬恒

よしの川よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れじ

ゆきかへり空にのみしてふることは我がゐる山の風早みなり

題しらず　かげのりの王

唐衣なればば身にこそ纒れめかけてのみやは戀ひむとおもひし

友　則

秋風は身をわけてしも吹かなくにひとの心のそらになるらむ

源宗于朝臣

つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける

心地そこなへりける頃あひしりて侍りける人の

とはで心地おこたりて後とぶらへりければよみ

て遣しける　兵衛

しでの山麓を見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

あひしれりける人のやうやくかれがたになりけ

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

題しらず　雲林院のみこ

吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこころの　小野小町

今はとて我が身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

かへし　小野さだき

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りもみだれめ

業平の朝臣紀の有常がむすめにすみけるを恨むることありてしばしのあひだひるはきて夕さりは歸りのみしければよみて遣しける

天雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆる物から

かへし　業平朝臣

こめやとは思ふ物からひぐらしのなく夕暮はたち待たれつつ
今しはとわびにし物をささがにの衣にかかりわれをたのむる
今はこじと思ふ物から忘れつつ待たるる事のまだもやまぬか
月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなむ侘びつつもねむ
植ゑていにし秋田刈る迄見えこねばけさ初雁のねにぞ鳴きぬる
こぬ人をまつ夕ぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ
久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しき物にぞありける

兼覽王

住の江のまつ程久(ひさ)に成りぬれば蘆たづのねになかぬ日はなし

仲平の朝臣あひしりて侍りけるをかれがたに成りにければ父が大和の守に侍りけるもとへまかるとてよみて遣しける

伊勢

山の井のあさき心もおもはぬにかげばかりのみ人の見ゆらむ

忘れ草たねとらましを逢ふ事のいとかく難きものとしりせば

こふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへやおひ茂るらむ

夢にだにあふことかたくなり行くは我やいをねぬ人や忘るる

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　兼藝法師

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬなかぞ遙けかりける

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貞　登

獨のみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞ生ひける

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　僧正遍昭

我が宿は道もなき迄あれにけりつれなき人を待つとせしまに

今こむといひて別れし朝よりおもひくらしのねをのみぞなく

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらむ數ならぬ身は

うきめのみ生ひて流るる浦なればかりにのみこそ蜑はよるらめ

伊勢

逢ひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるるがほなる

讀人しらず

秋ならでおく白つゆはねざめする我がたまくらの雫なりけり

須磨の蜑の鹽燒衣(しほやきごろも)をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

山城の淀のわかごもかりにだにこぬ人たのむわれぞはかなき

逢ひみねば戀こそまされ水無瀨川なにに深めて思ひそめけむ

曉のしぎのはねがきもも羽がき君がこぬ夜はわれぞかずかく

たまかづら今はたゆとや吹く風のおとにも人の聞えざるらむ

わが袖にまだきしぐれのふりぬるは君が心にあきやきぬらむ

花薄われこそしたに思ひしかほに出てひとにむすばれにけり

藤原兼輔朝臣

よそにのみ聞かまし物を音羽川渡るとなしにみなれそめけむ

凡河内躬恒

わがごとくわれを思はむ人もがなさてもやうきと世を試みむ

元方

久方のあまつ空にもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる

讀人しらず

見てもまた又も見まくのほしければなるるを人は厭ふべらなり

紀友則

雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ

讀人しらず

古今和歌集 卷十五

戀歌五

五條のきさいの宮の西の對にすみける人にほいにはあらでものいひ渡りけるを睦月の十日あまりになむ外へ隠れにける。あり所は聞きけれどえ物もいはで又の年の春梅の花ざかりに月の面白かりける夜去年をこひてかの西の對にいきて月の傾くまであばらなる板敷にふせりてよめる　在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

題しらず　藤原仲平朝臣

ののち裳を返すとてよめる　　興　風

逢ふまでの形見とてこそとどめけめ涙に浮ぶもくづなりけり

題しらず　　讀人しらず

形見こそ今はあたなれこれなくば忘るる時もあらましものを

逢坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見め

題しらず　伊勢

故郷にあらぬものからわがためにひとの心のあれてみゆらむ

寵

山がつの垣ほにはへる靑つゞら人はくれどもことつてもなし

さかゐのひとざね

大空はこひしき人の形見かはもの思ふごとにながめらるらむ

讀人しらず

逢ふまでの形見も我はなにせむに見ても心のなぐさまなくに

親の守りける人のむすめにいと忍びにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひければ急ぎかへるとて裳をなむぬぎ置きて入りにけるそ

右のおほいまうち君すまずなりにければかの昔おこせたりける文どもを取りあつめて返すとてよみて送りける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし言の葉今はかへしてむ我が身ふるればおき所なし

かへし

近院右大臣

今はとて返す言の葉ひろひ置きておのが物から形見とやみむ

題しらず

よるかの朝臣

玉ほこの道は常にもまどはなむ人をとふともわれかと思はむ

讀人しらず

待てといはばねてもゆかなむしひて行く駒の足をれ前の棚橋

中納言源の昇の朝臣の近江の介に侍りける時によみてやれりける

閑院

讀人しらす

珍らしき人を見むとやしかもせぬわが下紐のとけわたるらむ

陽炎のそれかあらねか春雨のふるひとなればそでぞぬれぬる

堀江こぐたななし小船こぎ歸りおなじ人にやこひわたりなむ

伊勢

わたつ海とあれにし床を今更にはらはば袖やあわとうきなむ

貫之

いにしへに猶たちかへる心かな戀しきことにものわすれせで

人をしのびにあひしりて逢ひがたくありければ其家のあたりをまかりありきけるをりに雁のなくを聞きてよみてつかはしける

大伴黑主

思ひ出でて戀しきときは初雁のなきてわたると人しるらめや

くれなゐの初花ぞめのいろふかくおもひし心われわすれめや

河原左大臣

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れむと思ふわれならなくに

讀人しらず

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

ちぢの色にうつろふらめど知らなくに心し秋の紅葉ならねば

小野小町

蜑の住む里のしるべにあらなくに恨みむとのみ人のいふらむ

しもつけのをむね

曇日（くもりび）の影としなれるわれなれば（やイ）目にこそ見えね身をば離れず

貫之

色もなき心を人に染めしよりうつろはむとはおもほえなくに

蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむとおもへば

題しらず　　　　讀人しらず

空蟬の世の人ごとのしげければ忘れぬもののかれぬべらなり

あかでこそ思はむなかは離れなめそをだに後の忘れがたみに

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ戀(悲イ)しき

わすれなむわれをうらむな時鳥人のあきにはあはむともせず

絶えずゆくあすかの川のよどみなば心ありとや人のおもはむ

此歌ある人のいはくなかとみのあづま人が歌なり

淀川のよどむと人は見るらめどながれてふかき心あるものを

素性法師

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波はたて

讀人しらず

かへし

大幣(ぬさ)と名にこそたてれ流れても終によるせはありてふものを　業平朝臣

題しらず　讀人しらず

須磨のあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心の嬉しげもなし

誰が里によがれをしてか時鳥たゞここにしもねたるこゑする

いで人はことのみぞよき月草のうつしごころは色ことにして

僞のなき世なりせばいかばかり人のことの葉うれしからまし

いつはりと思ふ物からいまさらにたが誠をかわれはたのまむ

　素性法師

あき風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかがとぞおもふ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　友則

むしまうす

夏引の手びきの糸をくり返しことしげくとも絶えむと思ふな

此歌はかへしによみで奉りけるとなむ

里人のことは夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやは

藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女を

あひ知りて文遣せりける言葉に今まうでく雨の

降りけるをなむみわづらひ侍るといへりけるを

聞きてかの女にかはりてよめりける　在原業平朝臣

數々に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

ある女の業平の朝臣をところ定めずありきすと

思ひてよみてつかはしける　讀人しらず

大幣(おほぬさ)の引く手あまたに成りぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

あな戀しいまも見てしが山賤の垣ほに咲けるやまとなでしこ
津の國のなにはおもはず山城のとはにあひみむことをのみこそ
貫　之
敷嶋のやまとにはあらぬ唐衣ころもへずして逢ふよしもがな
深　養　父
戀しとはたが名づけけむことならむ死ぬとぞ唯にいふべかりける
讀人しらず
みよしのの大川のべの藤波のなみにおもはばわがこひめやは
かく戀ひむ物とはわれも思ひにき心のうらぞまさしかりける
天の原ふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは
梓弓ひき野のつづらすゑつひに我が思ふ人にことのしげけむ
此歌は或人あめのみかどあふみのうねめにたまひけるとな

寛平の御時后の宮の歌合の歌

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物には有るらむ

題しらず

さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治の橋姫

又は宇治のたまひめ

君やこむわれや行かむのいさよひに槇の板戸もささずねにけり

素性法師

今こむといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな

讀人しらず

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず

君こずばねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも

宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそまて

夢にだに見ゆとはみえじ朝な朝な我が面影にはづる身なれば
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず
石間ゆく水の白波立ち返りかくこそは見めあかずもあるかな
伊勢の蜑の朝な夕なに潜くてふみるめに人を飽くよしもがな
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　友　　　則
春霞たなびく山のさくらばな見れどもあかぬ君にもあるかな
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　深　養　父
心をぞわりなきものと思ひぬる見るものからや戀しかるべき
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　凡河内躬恒
かれはてむ後をば知らで夏草のふかくも人のおもほゆるかな
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず
あすか川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ

古今和歌集 巻第十四

戀歌四

題しらず　讀人しらず

みちのくの淺香の沼の花がつみかつ見る人に戀ひやわたらむ

あひみずば戀しき事もなからまし音にぞ人を聞くべかりける　貫之

いそのかみふるの中道なかなかに見ずば戀しと思はましやは　藤原ただゆき

君といへば見まれみずまれ富士の嶺の珍らしげなく燃ゆるわが戀　伊勢

伊勢

知るといへば枕だにせでねし物を塵ならぬ名の空に立つらむ

我が戀を忍びかねてはあしびきの山たちばなの色に出ぬべし

讀人しらず

大方は我が名もみなと漕ぎ出なむよをうみべだにみるめ少なし

平貞文

枕よりまた知るひともなき戀を涙せきあへずもらしつるかな

讀人しらず

風ふけば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり

此歌は或人のいはく柿本人麿がなり

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれど顯れにけり

あふことは玉の緒ばかり名のたつは吉野の川の瀧つ瀬のごと

村鳥の立ちにし我が名今更にことなしぶともしるしあらめや

君により我が名は花に春がすみ野にも山にも立ちみちにけり

題しらず　　　　躬恒

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな

笹の葉におく初霜の夜をさむみしみはつくとも色に出でめや　　讀人しらず

山しなの音羽の山のおとにだに人のしるべくわが戀ひめかも

此歌ある人近江のうねめのとなむ申す

　　　　清原深養父

滿つ汐の流れひるまを逢ひ難みみるめの浦によるをこそまて

　　　　平貞文

白川(波イ)のしらずともいはじ底淸み流れてよよにすまむと思へば

　　　　友則

したにのみ戀ふれば苦し玉の緒の絶えて亂れむ人なとがめそ

思ふどちひとりひとりが戀ひ死なばたれによそへて藤衣きむ

かへし　橘清樹

泣きこふる涙に袖のそほちなばぬぎかへがてら夜こそは著め

題しらず　小町

現にはさもこそあらめ夢にさへひとめをもると見るが侘しさ

限なきおもひのままによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ

夢路には足もやすめず通へども現にひとめ見しことはあらず

讀人しらず

思へども人めつつみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね

たきつせの早き心をなにしかも人めつつみのせきとどむらむ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　紀友則

くれなゐの色には出でじかくれぬの下に通ひて戀は死ぬとも

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは世人さだめよ

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

むば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらも優らざりけり

さ夜更けて天のと渡る月かげにあかずも君をあひ見つるかな

君が名も我が名もたてじ難波なるみつともいふな逢ひきともいはじ

名取川瀨々の埋木あらはればいかにせむとか逢ひみそめけむ

吉野川みづの心ははやくともたきの音にはたてじとぞおもふ

戀しくばしたにを思へむらさきの根ずりの衣色にいづなゆめ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　小野春風

花薄ほに出でてこひば名ををしみ下ゆふひものむすぼほれつつ

橘のきよきが忍びにあひしれりける女のもとよりおこせたりける

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

ほとゝぎす夢かうつゝか朝露のおきて別れしあかつきのころ

玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜深くこしを人みけむかも　　大江千里

今朝はしもおきけむ方もしらざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき

人に逢ひてあしたによみて遣しける　　業平朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり增る哉

業平朝臣の伊勢の國にまかりける時齋宮なりける人にいとみそかに逢ひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりける間に女のもとよりおこせたりける　　讀人しらず

君やこしわれやゆきけむおもほえず夢か現かねてか覺めてか

かへし　　業平朝臣

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬる物を

凡河内躬恒

長しともおもひぞはてぬ昔よりあふ人からのあきの夜なれば

讀人しらず

しののめのほがらほがらと明けゆけば己がきぬぎぬなるぞ悲しき

藤原國經朝臣

明けぬとていまはの心つくからになどいひ知らぬ思そふらむ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

敏行朝臣

あけぬとて歸る道にはこきたれてあめも涙も降りそぼちつつ

題しらず

寵

しののめの別を惜みわれぞまづ鳥よりさきになきはじめつる

讀人しらず

こりずまに又も無き名はたちぬべし人にくからぬ世にし住へば

東の五條わたりに人を知りおきて罷り通ひけり忍びなる所なりければ門よりしもえいらで垣のくづれより通ひけるをたび重りければ主人聞きつけてかの道に夜毎に人をふせて守らすればいきけれどえあはでのみ歸りてよみてやりける　業平朝臣

人しれぬ我が通ひ路の關守はよひよひごとにうちもねななむ

題しらず　貫之

忍ぶれどこひしき時はあしびきの山より月のいでてこそくれ

讀人しらず

戀ひこひて稀に今宵ぞ逢坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ

小野小町

有明のつれなく見えし別よりあかつきばかり憂きものはなし
在原元方

逢ふ事のなぎさにしよる波なればうらみてのみぞ立ち歸りける
讀人しらず

かねてより風に先だつ波なれや逢ふ事なきにまだき立つらむ
忠岑

みちのくにありといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり
みはるのありすけ

あやなくてまだき無き名の立田川渡らでやまむ物ならなくに
元方

人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとをいはむ
讀人しらず

題しらず　　讀人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかげとなりにき

徒に行きてはきぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ

逢はぬ夜のふる白雪とつもりなばわれさへ共にけぬべき物を

此歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり

業平朝臣

秋の野に笹分けし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひぢ増りける

小野小町

みるめなきが我身をうらと知らねばやかれなで蜑の足たゆくくる

源宗于朝臣

逢はずして今宵あけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ

壬生忠岑

古今和歌集　卷第十三

戀歌三

やよひのついたちよりしのびに人に物をいひて後に雨のそほ降りけるに詠みて遣しける　業平朝臣

起きもせず寐もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮しつ

業平朝臣の家に侍りける女のもとによみて遣しける　敏行朝臣

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれ（ひぢイ）て逢ふよしもなし

彼の女に代りてかへしによめる　業平朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながるときかばたのまむ

我が戀は行方も知らず果もなし逢ふをかぎりと思ふばかりぞ

われのみぞ悲しかりける彦星も逢はですぐせる年しなければ

深養父

今ははや戀ひしなましをあひみむと頼めしことぞ命なりける

躬恒

たのめつつあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ

友則

命やはなにぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくに

津の國の難波の蘆のめもはるにしげきわがこひ人しるらめや
友　則

手もふれで月日へにける白眞弓おきふし夜はいこそねられね
人しれぬ思のみこそわびしけれわがなげきをば我のみぞ知る
躬　恒

言にいでていはぬばかりぞ水無瀨川下に通ひて戀しきものを
忠　岑

君をのみおもひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり
春道列樹

命にもまさりて惜しくある物はみはてぬ夢の覺むるなりけり
躬　恒

梓弓ひけばもとする我がかたによるこそまされ戀のこころは

貫之

我が戀はしらぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

くれなゐのふりいでてなく涙には袂のみこそいろまさりけれ

白玉とみえし涙もとしふればからくれなゐにうつろひにけり

躬恒

夏蟲をなにかいひけむ心からわれもおもひに燃えぬべらなり

忠岑

風ふけばみねにわかるる白雲のたえてつれなき君がこころか

月影にわが身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む

深養父

戀ひ死なばたが名はたた（てイ）じ世の中の常なき物といひはなすとも

貫之

露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとにものおもひぞつく

題しらず　坂上是則

わが戀にくらぶのやまの櫻花まなく散るともかずはまさらじ

むねをかの大頼

冬川のうへはこほれるわれなれや下に流れてこひわたるらむ

忠岑

たきつ瀬にねざしとどめぬ浮草のうきたる戀も我はするかな

友則

よひよひにぬぎて我がぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ

敷妙の枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひずぞありける

年をへて消えぬおもひはありながらよるの袂はなほ氷りけり

ひとりしてものを思へば秋の田の稻葉のそよといふ人のなき

深　養　父

人をおもふ心は雁にあらねども雲井にのみも鳴きわたるかな

忠　岑

秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ

貫　之

まこもかる淀の澤水雨ふればつねよりことにまさる我がこひ

大和に侍りける人に遣しける

越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたるかな

やよひばかりに物のたうびける人のもとにまた

人まかりてせうそこすと聞きてよみてつかはし

ける

我がごとく物やかなしき郭公ときぞともなく夜ただ鳴くらむ
貫之

さつきやま梢を高みほととぎす鳴く音そらなる戀もするかな
凡河内躬恒

秋霧のはるる時なきこころにはたちゐの空もおもほえなくに
清原深養父

是貞のみこの家の歌合の歌
讀人しらず

蟲のごと聲にたてては鳴かねども涙のみこそしたにながるれ

題しらず
貫之

秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我おとらめやひとりぬる夜は
躬恒

秋の野にみだれて咲ける花の色のちぐさに物を思ふころかな

紀　貫　之

君こふる涙しなくばからころもむねのあたりは色もえなまし

題しらず

よとともにながれてぞゆく涙川ふゆも氷らぬみなわなりけり

素　性　法　師

夢路にもつゆや置くらむよもすがら通へる袖のひぢて乾かぬ

藤　原　忠　房

はかなくて夢にもひとを見つる夜は朝の床ぞおきうかりける

大　江　千　里

いつはりの涙なりせばから衣しのびにそではしぼらざらまし

敏　行　朝　臣

音になきてひぢにしかども春雨に濡れにし袖と問はば答へむ

笹の葉におく霜よりもひとりぬる我が衣手ぞさえまさりける
我が宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しかりける
川の瀬になびく玉藻のみがくれて人にしられぬ戀もするかな

壬生忠岑

かきくらし降る白雪の下ぎえにきえて物思ふ頃にもあるかな

藤原興風

君こふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞわれはなりける
死ぬる命いきもやすると試に玉の緒ばかりあはむといはなむ
佗びぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

讀人しらず

わりなくも寐ても覺めても戀しきか心をいづちやらば忘れむ
戀しきにわびて魂まどひなばむなしきからの名にやのこらむ

町がもとに遣しける　安倍淸行朝臣

つつめども袖にたまらぬしらたまは人をみぬめの涙なりけり

かへし　小町

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつ瀬なれば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原敏行朝臣

戀ひわびてうちぬる中(なか)に行き通ふ夢のただぢはうつつならなむ

住の江のきしによる波よるさへや夢のかよひ路人目よくらむ

小野のよしき

我が戀はみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

紀友則

宵のまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひまされる戀もするかな

夕されば螢よりけに燃ゆれどもひかりみねばや人のつれなき

古今和歌集　卷第十二

戀歌二

題しらず　小野小町

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせば覺めざらましを

うたたねに戀しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

いとせめて戀しきときはむばたまのよるの衣をかへしてぞきる

素性法師

秋風の身にさむければつれもなき人をぞ賴むくるる夜ごとに

しもつ出雲寺に人のわざしける日眞せい法師の導師にていへりけることばを歌によみて小野小

明けたてば蟬のをりはへなきくらしよるは螢のもえこそ渡れ

夏蟲の身をいたづらになす事も一つおもひによりてなりけり

夕ぐれは（されば イ）いとどひがたき我が袖に秋の露さへおきそはりつつ

いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり

秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心にわすれしもせむ

秋の田のほの上をてらす稲妻のひかりのまにもわれや忘るる

人めもる我かはあやな花薄などかほにいでて戀ひずしもあらむ

あわ雪のたまればがてにくだけつつ我が物思のしげき頃かな

奥山のすがのねしのぎ降る雪のけぬとかいはむ戀のしげきに

早き瀬にみるめおひせばわが袖の涙のかはに植ゑましものを
おきべにもよらぬ玉藻の波の上に亂れてのみや戀ひ渡りなむ
蘆鴨のさわぐ入江のしらなみの知らずや人をかくこひむとは
人しれぬ思をつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ
とぶ鳥のこゑもきこえぬ奥山のふかきこころを人は知らなむ
逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人やこひしき音のみなくらむ
あふさかの關に流るるいはしみづいはで心におもひこそすれ
浮草のうへはしげれる淵なれやふかきこころを知る人のなき
うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ
心がへするものにもが片戀はくるしきものとひとに知らせむ
よそにして戀ふれば苦しいれひものおなじ心にいざ結びてむ
はるたてば消ゆる氷ののこりなくきみが心はわれにとけなむ

忍ぶれば苦しきものを人しれずおもふてふこと誰にかたらむ
來む世にもはやなりななむ目の前につれなき人を昔と思はむ
つれもなき人を戀ふとて山彦のこたへするまで歎きつるかな
ゆく水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり
人を思ふ心はわれにあらねばや身の惑ふだに知られざるらむ
おもひやるさかひ遙になりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき
夢のうちにあひみむ事を賴みつつ暮らせる宵はねむ方もなし
戀ひ死ねとする業ならしむば玉の夜はすがらに夢に見えつつ
涙川まくら流るるうきねには夢もさだかに見えずぞありける
戀すればわが身は影となりにけりさりとて人にそはぬ物ゆゑ
篝火にあらぬわが身のなぞもかく泪のかはにうきて燃ゆらむ
篝火のかげとなる身のわびしきは流れて下にもゆるなりけり

思ふとも戀ふとも逢はむ物なれやゆふ手もたゆくとくる下紐

いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ

伊勢の海につりする蜑のうけなれや心ひとつを定めかねつる

いせの海の蜑のつり（たくイ）なは打ちはへて苦しとのみや思ひ渡らむ

涙川なにみなかみをたづねけむ物思ふときのわが身なりけり

種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひばあはざらめやも

朝な朝なたつ川霧の空にのみうきておもひのある世なりけり

忘らるる時しなければあしたづの思ひ亂れてねをのみぞなく

から衣ひもゆふぐれになるときはかへすがへすぞ人は戀しき

よひよひに枕さだめむ方もなしいかにねし夜か夢に見えけむ

戀しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞ有るべかりける

人の身もならはし物をあはずしていざ心みむ戀ひや死ぬると

思ひ出づるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しき物を

人しれず思へばくるしくれなゐのすゑつむ花の色にいでなむ

秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや戀ひむあふよしをなみ

わがそのの梅のほ（はイ）づえに鶯のねに鳴きぬべきこひもするかな

あしびきのやま郭公わがごとや君にこひつついねがてにする

夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下もえに（をイ）せむ

戀せじと御手洗川（みたらしがは）にせしみそぎ神はうけずも（ぞイ）なりにけらしも

哀てふ事だになくばなにをかは戀のみだれのつかねをにせむ

思ふには（をイ）忍ぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを（ともイ）

我が戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ

あさぢふのをのの篠原忍ぶともひと知るらめやいふ人なしに

ひと知れぬ思やなぞと蘆垣（あしがき）のまぢかけれどもあふよしのなき

片糸をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせん
ゆふぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を戀ふとて
かりごもの思ひ亂れてわが戀ふと妹しるらめや人しつげずば
つれもなき人をやねたく白露のおくとはなげきぬとは忍ばむ
千早ぶる賀茂の社のゆふだすきひとひも君をかけぬ日はなし
わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし
駿河なるたごの浦波たたぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし
夕づく夜さすや岡邊の松の葉のいつともわかぬ戀もするかな
あしびきの山下みづのこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる
吉野川いはきりとほしゆく水の音にはたてじ戀ひはしぬとも
瀧つ瀬の中にもよごはありてふをなごわが戀の淵瀨ともなき
山高みしたゆく水の下にのみながれてこひむ戀ひはしぬとも

る女のもとに家を尋ねて遣しける〔せりイ〕　　　壬生忠岑

春日野の雪まを分けておひ出くる草のはつかに見えし君かも〔はもイ〕

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人
のもとに後によみてつかはしける　　　貫之

山櫻かすみのまよりほのかにも見てしひとこそ戀しかりけれ

題しらず　　　元方

たよりにもあらぬおもひの怪しきは心を人につくるなりけり　　　凡河内躬恒

初雁のはつかに聲をききしよりなかぞらにのみ物を思ふかな　　　貫之

逢ふ事は雲井はるかになる神の音にききつつ戀ひわたるかな　　　讀人しらず

在原元方

音羽山おとに聞きつつあふさかの關のこなたに年をふるかな

立ちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら波

貫之

世の中はかくこそありけれ吹く風のめに見ぬ人も戀しかりけり

右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車の下簾より女の顏のほのかに見えければよみて遣しける

在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日や眺め暮さむ

かへし（ずイ）

讀人しらず

知る知らぬ何かあやなく分きていはむ思のみこそしるべなりけれ

春日の祭にまかれりける時に物見に出でたりけ

古今和歌集　卷第十一

戀歌一

題しらず　　讀人しらず

郭公鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬこひもするかな

素性法師

音にのみきくの白露夜はおきて晝はおもひにあへずけぬべし

紀貫之

吉野川いはなみたかくゆく水のはやくぞ人をおもひそめてし

藤原勝臣

白波のあとなきかたに行く船も風ぞたよりのしるべなりける

。はをはじめるをはてにて。。。ながめをかけて時の歌、

よめと人のいひければよめる　　僧正聖寶

。はなのなかめにあくやとて分けゆけば心ぞ共にちりぬべらなる。

。。。

かた野　　　　　　　　　　忠岑

なつぐさのうへはしげれる沼水のゆくかたのなきわが心かな

桂の宮　　　　　　　　　　源ほどこす

秋くれど月のかつらのみやはなる光をはなとちらすばかりを

百和香　　　　　　　　　　讀人しらず

花毎にあかず散らしし風なれば幾そばくわがうしとかは思ふ

すみながし　　　　　　　　滋春

春がすみなかし通ひ路なかりせば秋くる雁はかへらざらまし

おき火　　　　　　　　　　都良香

流れいづるかただに見えぬ涙川おきひむ時やそこは知られむ

ちまき　　　　　　　　　　大江千里

のちまきの後(だく)れて生ふる苗なれどあだにはならぬ頼(たのみ)とぞ聞く

からことといふ所にて春の立ちける日よめる　安倍清行朝臣

波のおとのけさからことにきこゆるは春のしらべや改るらむ

いかが崎　兼覧王

かぢにあたる棹の雫を春なればいかがさき散る花と見ざらむ

からさき　阿保のつねみ

かの方にいつからさきに渡りけむ波路はあとも殘らざりけり　伊勢

波の花おきからさきて散りくめり水の春とはかぜやなるらむ

紙屋川　貫之

うばたまの我がくろかみやかはるらむ鏡のかげにふれる白雪

よど川

あしがきの山邊にをれば白雲のいかにせよとかはるる時なき

さがりごけ　　たかむこのとしはる

花の色は唯ひとさかりこけれどもかへすがへすぞ露はそめける

にがたけ　　滋春

命とて露をたのむにかたければものわびしらになく野邊の蟲

かはたけ　　景式王

さよふけてなかばたけゆくひさかたの月吹きかへせ秋の山風

わらび　　素性法師

煙たち燃ゆとも見えぬ草の葉を誰かわらびと名づけそめけむ

ささ　まつ　びは　ばせをば　　紀のめのと

いささめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつつ

なし　なつめ　くるみ　　兵衛

あぢきなし歎きなつめそ憂き事にあひくるみをば捨てぬ物から

うちつけにこしとや花の色をみむおく白露のそむるばかりを
　二條の后春宮の御息所と申しける時にめどにけ
　づり花させりけるをよませ給ひける　　文屋康秀
花の木にあらざらめども咲きにけりふりにし果なる時もがな
　しのぶぐさ　　紀としさだ
山高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞ散りける
　やまし　　平あつゆき
郭公みねの雲にやまじりにし有りとは聞けど見るよしもなき
　からはぎ　　讀人しらず
空蟬のからはきごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき
　かはなぐさ　　深養父
うば玉の夢になにかはなぐさまむうつつにだにもあかぬ心を

朱雀院の女郎花あはせの時にをみなへしといふ

五文字を句のかしらに置きてよめる　貫之

をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

きちかうの花　友則

あきちかうのはなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく

しをに　讀人しらず

ふりはへていざ故郷の花見むとこしをにほひぞ移ろひにける

りうたんの花　友則

我が宿の花ふみしだくとりうたんのはなければやここにしもくる

をばな　讀人しらず

ありと見てたのむぞ難き空蟬の世をばなしとや思ひなしてむ

けにごし　矢田部名實

山がきの木　讀人しらず

秋はきぬ今や。まがきの。きり〴〵す夜な夜ななかむ風の寒さに

あふひ　かつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかが。つらしと思はざるべき

人めゆゑ後にあふひの遙けくばわが。つらきにや思ひなされむ

くたに　僧正遍昭

散りぬれば後はあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな

さうび　貫之

我はけさうひにぞ見づる花の色をあだなる物といふべかりけり

をみなへし　友則

しら露を玉にぬくとやささがにの花にも葉にも糸をみなへし

朝露をわけそぼちつつ花見むといまぞ野山をみなへしりぬる

うめ　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

あなうめに常なるべくも見えぬかな戀しかるべき香は匂ひつつ

かにはざくら　　　　　　　　　　　　　貫之

かづけども波のなかにはさぐられで風吹くごとに浮き沈む玉

すもの花

今幾日春しなければうぐひすもものはながめて思ふべらなり

からもも花　　　　　　　　　　　　　深養父

あふからもものはなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば

たちばな　　　　　　　　　　　　　　小野しげかげ

足引の山たちはなれ行く雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

をかたまの木　　　　　　　　　　　　友則

み吉野の吉野の瀧に浮びいづる泡をかたまのきゆと見ゆらむ

古今和歌集　卷第十

物名

うぐひす　　藤原敏行朝臣

心から花のしづくにそぼちつつうくひずとのみ鳥の鳴くらむ

ほととぎす

くべきほどときすぎぬれや待ちわびて鳴くなる聲の人をとよむる

うつせみ　　在原しげはる

波のうつせみれば玉ぞみだれける拾はば袖にはかなからむや

かへし　　壬生忠岑

袂より離れて玉をつつまめやこれなむそれとうつせみむかし

ずなりにければともに侍りてよめる　紀　有常

ひととせにひとたびきます君まてば宿かす人もあらじとぞおもふ

朱雀院の奈良におはしましける時に手向山にて

よめる　菅原朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢの錦神のまにまに

素性法師

手向にはつづりの袖も著るべきに紅葉にあける神やかへさむ

夜をさむみ置くはつ霜をはらひつつ草の枕にあまたたびねぬ

但馬の國の湯へまかりける時にふたみの浦といふ所にとまりて夕さりのかれいひたうべけるに共にありける人々歌よみけるついでによめる　藤原かねすけ

夕月夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそみめ

惟喬のみこのともに狩にまかりける時に天の川といふ所の川のほとりにおりゐて酒など飲みけるついでに皇子のいひけらく狩して天の川原にいたるといふ心をよみて盃はさせと云ひければよめる　在原業平朝臣

狩り暮したなばたつめに宿からむ天の川原にわれは來にけり

みこの歌をかへすがへすよみつつかへしえせ

題しらず　讀人しらず

北へゆく雁ぞ鳴くなるつれてこし數はたらでぞ歸るべらなる

此歌はある人男女もろともに人の國へまかりけり男まかりいたりて即みまかりにければ女ひとり京へ歸る道に雁の鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ

あづまの方より京へまうでくとて道にてよめる　おと

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

越の國へまかりけるとき白山を見てよめる　躬恒

消えはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける

あづまへまかりける時道にてよめる　貫之

糸によるものならなくに別れ路の心ぼそくもおもほゆるかな

甲斐の國へまかりける時道にてよめる　躬恒

唐衣きつつなれにし妻しあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

武藏の國と下總の國との中にある隅田川の邊に到りて都のいと戀しう覺えければしばし川のほとりにおりゐて思ひやれば限りなく遠くも來にけるかなと思ひわびてながめをるに渡守はや舟に乘れ日も暮れぬといひければ舟に乘りて渡らむとするに皆人物わびしくて京に思ふ人なくしもあらずさる折に白き鳥のはしと足と赤き川のほとりに遊びけり京には見えぬ鳥なりければ皆人見しらず渡守にこれは何鳥ぞと問ひければこれなむ都鳥といひけるを聞きてよめる

名にしおはばいざことゝはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと

おきの國に流されける時に船にのりていでたつとて京なる人の許に遣しける　　小野篁朝臣

わたの原八十島かけてこぎいでぬと人には告げよ蜑のつり舟

題しらず　　讀人しらず

都いでて今日みかのはらいづみ川かはかぜさむし衣かせやま

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行くふねをしぞおもふ

此歌はある人のいはく柿本人麿がなり

あづまの方へ友とする人一人二人いざなひでいきけり三河國八橋といふ所にいたれりけるにその川のほとりに杜若いと面白うさけりけるを見て木の陰におりゐて杜若といふ五文字を句のかしらにすゑて旅の心をよまむとてよめる　　在原業平朝臣

古今和歌集 卷第九

羇旅歌

もろこしにて月を見てよみける　安倍仲麿

あまの原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山にいでし月かも

この歌はむかし仲麿を唐土に物ならはしに遣したりけるにあまたの年を經てえ歸りまうでこざりけるをこの國より又使まかりいたりけるにたぐひてまうできなむとて出でたりけるにめい州といふ所の海邊にてかの國の人むまのはなむけしけりよるになりて月のいと面白くいでたりけるを見でよめるとなむ語り傳ふる

別るれど嬉しくもあるか今宵よりあひみぬ先に何を戀ひまし

題しらず　讀人しらず

あかずしてわかるる袖の白玉は君がかたみとつつみてぞゆく

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじあはむ日までに

かきくらしことは降らなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとどめむ

しひて行くひとをとどめむ櫻花いづれを道とまどふまでちれ

志賀の山越にて石井のもとにて物いひける人の別れける折によめる　貫之

むすぶ手の雫ににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな

道にあへりける人の車に物いひつきて別れける所にてよめる　友則

下の帶の道はかたがた別るとも行き廻りても逢はむとぞ思ふ

ことならば君留るべく匂はなむ歸すは花の憂きにやはあらぬ

仁和の帝みこにおはしましける時にふるの瀧御覽じにおはしまして歸り給ひけるに詠める　　　兼藝法師

あかずして別るる涙たきにそふ水まさるとやしもは見ゆらむ

かんなりのつぼにめしたりける日おほみきなどたうべて雨のいたうふりければ夕さりまで侍りてまかり出で侍りける折にさかづきをとりて　　　貫之

秋萩のはなをば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

とよめりけるかへし　　　兼覽王

をしむらむ人の心をしらぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

兼覽のおほぎみに初めて物語して別れける時によめる　　　躬恒

大江の千古が越へ罷りける馬の餞によめる　藤原兼輔朝臣

君が行くこしの白山しらねども雪のまにまにあとはたづねむ

人の花山に詣うできて夕さりつかた歸りなむとしける時によめる　僧正遍昭

夕暮のまがきは山と見えななむ夜は越えじとやどりとるべく

山に登りて歸りまうできて人々別れけるついでによめる　幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまにまに

雲林院のみこの舍利會に山に登りて歸りけるに櫻の花のもとにてよめる　僧正遍昭

山風に櫻ふきまきみだれなむはなのまぎれに立ちとまるべく　幽仙法師

源のさねがつくしへ湯あみむとてまかりける時に山崎にてわかれ惜みける所にてよめる　しろめ

いのちだに心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし

山崎より神なびの森まで送りに人々まかりて歸りがてにしてわかれ惜みけるによめる　源さね

人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ

今は是より歸りねとさねがいひけるをりによみける　藤原かねもち

慕はれて來にし心の身にしあれば歸るさまには道も知られず

藤原のこれをかが武藏の介にまかりける時に送りに逢坂を越ゆとてよみける　貫之

かつ越えて別れもゆくか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

京にまうできて又歸りける時によめる　凡河内躬恒

歸山(かへるやま)何ぞはありてあるかひは來ても留(とま)らぬ名にこそありけれ

こしの國にまかりける人によみてつかはしける

外(よそ)にのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬ我が身は

音羽山のほとりにて人を別るとてよめる　貫之

おとはやまこだかくなきて郭公きみがわかれを惜むべらなり

藤原の後蔭がから物の使に長月のつごもり方に
まかりけるに上(うへ)のをのこども酒たうびけるつい
でによめる　藤原かねもち

もろともに鳴きてとどめよ蛬(きりぎりす)秋のわかれは惜しくやはあらぬ

平もとのり

秋霧のともに立ちいでて別れなば晴れぬ思に戀ひやわたらむ

よみていだせりける　　　讀人しらず

えぞ知らぬいま心みよ命あらばわれやわするる人やとはぬと

あひ知りて侍りける人のあづまの方へまかりけるをおくるとてよめる　　　深養父

くもゐにも通ふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

友のあづまへまかりける時によめる　　　良岑ひでをか

しらくものこなたかなたにたち別れ心をぬさとくだく旅かな

みちのくにへまかりける人によみて遣しける　　　貫之

白雲のやへにかさなるをちにても思はむ人にこころへだつな

人を別れける時によめる

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみて侘しかるらむ

あひしれりける人のこしの國にまかりて年へて

逢坂にて人を別れける時に詠める　なにはのよろづを

あふさかの關しまさしき物ならばあかず別るる君をとどめよ

題しらず　讀人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてし行けばけぬべきものを

この歌はある人つかさをたまはりてあたらしき妻につきて年經て住みける人をすてててただ明日なむ立つとばかりいへりけるときにともかくもいはでよみて遣しける

常陸へまかりけるときに藤原公利によみてつかはしける　寵

朝なけに見べききみとしたのまねばおもひたちぬる草枕なり

紀のむねさだがあづまへまかりける時に人の家に宿りて曉いでたつとてまかり申しければ女の

さだときのみこの家にて藤原のきよふが近江の介にまかりける時にむまのはなむけしけるよるよめる　　紀としさだ

今日別れあすはあふみと思へども夜や更けぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人によみて遣しける

かへるやまありとは聞けど春霞たちわかれなば戀しかるべし

人のむまのはなむけにてよめる　　紀貫之

をしむから戀しきものを白雲の立ちなむのちはなに心地せむ

ともだちの人の國へまかりけるによめる　　在原滋春

別れては程をへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

あづまの方へまかりける人によみて遣しける　　いかこのあつゆき

思へども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

古今和歌集　卷第八

離別歌

題しらず　　在原行平朝臣

立ち別れいなばの山の嶺に生ふるまつとしきかば今歸りこむ

讀人しらず

すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ

かぎりなきくもゐのよそに別るとも人を心におくらさむやは

小野のちふるが陸奥の介にまかりける時に母の

よめる

たらちねの親のまもりとあひ添ふる心ばかりは關なとどめそ

千鳥鳴くさほの川霧たちぬらし山の木の葉もいろまさりゆく
是則
秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける
冬　貫之
白雪の降りしくときはみよしののやました風に花ぞちりける
春宮の生れたまへりける時にまゐりてよめる　典侍藤原よるかの朝臣
みねたかき春日の山にいづる日はくもる時なく照すべらなり

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年のかげに住まむと思へば

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しける
時に四季の繪かける後の屛風にかきたりける歌

春

かすが野に若菜つみつつ萬代をいはふこころは神ぞしるらむ　躬恒

夏

やまたかみ雲井に見ゆる櫻花こころのゆきて折らぬ日ぞなき　友則

めづらしき聲ならなくに郭公ここらの年をあかずもあるかな　躬恒

秋

すみの江の松をあきかぜ吹くからに聲うちそふる沖つしら波　忠岑

いたづらに過ぐる月日はおもほえで花見て暮す春ぞすくなき

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屛風によみて書きける　紀貫之

春くれば宿にまづ咲く梅のはな君がちとせのかざしとぞ見る　素性法師

古へにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ

ふして思ひおきてかぞふる萬世は神ぞしるらむわが君のため

藤原三善(みよし)が六十の賀によみける　在原滋春

鶴かめも千年ののちは知らなくにあかぬ心にまかせ果ててむ

此歌は或人在原のときはるがともいふ

良岑のつねなりが四十の賀にむすめにかはりてよみ侍りける　素性法師

八十の賀にしろがねを杖につくれりけるを見てかの御をばにかはりてよめる　　僧正遍昭

千早ぶる神やきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり

堀河のおほいまうちぎみの四十の賀九條の家にてしける時によめる　　在原業平朝臣

櫻花ちりかひ曇れおいらくの來むといふなるみちまがふがに

さだときの皇子のをばの四十の賀を大井にてしける日よめる　　紀これをか

龜のをのやまのいはねをとめておつる瀧の白玉千世の數かも

さだやすのみこの后の宮の五十の賀奉りける御屏風に櫻の花のちる下に人の花見たるかた書けるをよめる　　藤原興風

古今和歌集　卷第七

賀歌

題しらず　　　　　　　　　　　讀人しらず

我が君は千世に八千世にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで

わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ君が千とせのありかずにせむ

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞ鳴く

我が齡君がやちよにとり添へてとゞめおきてば思ひでにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌

かくしつゝとにもかくにも長らへて君が八千代に逢ふ由もがな

仁和の帝のみこにおはしましける時に御をばの

よめる　躬

我がまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

年のはてによめる　在原元方

あらたまの年の終になるごとに雪もわが身もふりまさりつつ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　讀人しらず

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

年のはてによめる　春道列樹

昨日といひ今日と暮してあすか川ながれて早き月日なりけり

歌奉れと仰せられし時によみて奉れる　紀貫之

行く年の惜くもあるかなます鏡みる影さへにくれぬと思へば

あさぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里に降れるしらゆき

題しらず　　讀人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め
梅のはなそれとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

此歌は或人のいはく柿本人麿が歌なり

梅の花に雪のふれるをよめる　　小野篁朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく

雪のうちの梅の花をよめる　　紀貫之

梅の香の降りおける雪に紛ひせば誰かことごと分きて折らまし

ゆきのふりけるを見てよめる　　紀友則

雪ふれば木毎に花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし
物へまかりける人を待ちてしはすのつごもりに

浦ちかく降りくる雪はしらなみのすゑの松山こすかとぞ見る　壬生忠岑

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

白雪のふりてつもれるやま里はすむ人さへやおもひきゆらむ

雪のふるを見てよめる　凡河内躬恒

雪ふりて人もかよはぬ道なれや跡はかもなくおもひ消ゆらむ

雪のふりけるをよみける　清原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

雪の木に降りかかれりけるを詠める　貫之

冬ごもり思ひかけぬを木のまより花とみるまで雪ぞふりける

大和の國にまかれりける時に雪の降りけるを見てよめる　坂上是則

ふる雪はかつぞけぬらし足びきの山の瀧つ瀬おとまさるなり
この川にもみぢばながる奥山のゆきげの水ぞいままさるらし
ふるさとは吉野の山しちかければ一日もみ雪ふらぬ日はなし
我が宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ
冬の歌とてよめる 紀貫之
雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬはなぞ咲きける
志賀の山ごえにてよめる 紀あきみね
白雪のところもわかず降りしけば巖にも咲くはなとこそ見れ
奈良の京にまかれりける時に宿りける所にてよめる 坂上是則
みよしのの山のしら雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり
寛平の御時后の宮の歌合の歌 藤原興風

古今和歌集　巻第六

冬歌

題しらず　　讀人しらず

たつた川にしきおりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

冬の歌とてよめる　　源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬとおもへば

題しらず　　讀人しらず

おほぞらの月の光しきよければかげ見し水ぞまづこほりける

夕されば衣手さむしみよしのの吉野のやまにみゆきふるらし

今よりはつぎて降らなむわが宿のすすきおしなみふれる白雪

道しらば尋ねも行かむもみぢ葉を幣とたむけて秋はいにけり

刈れる田に生ふる穭(ひつぢ)のほに出ぬは世を今更にあき果てぬとか(やイ)

北山に僧正遍昭と茸狩にまかれりけるによめる　素性法師

もみぢ葉は袖にこき入れてもて出なむ(いなむイ)秋は限と見む人のため

寛平の御時ふるき歌奉れとおほせられければ龍田川もみぢ葉流るといふ歌を書きてその同じ心をよめりける　興風

みやまより落ちくる水の色みてぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

秋のはつる心を(すイ)龍田川に思ひやりてよめる　貫之

年ごとにもみぢ葉ながる龍田川みなとや秋のとまりなるらむ

なが月のつごもりの日大井にてよめる

ゆふづくよをぐらの山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらむ

同じつごもりの日よめる　躬恒

志賀の山越にてよめる　春道列樹

山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり

池のほとりにて紅葉のちるをよめる　躬恒

風ふけばおつるもみぢ葉水きよみちらぬ影さへ底に見えつつ

亭子院の御屛風の繪に川渡らむとする人の紅葉のちる木のもとに馬をひかへて立てるをよませ給ひければつかうまつりける

立ちとまり見てをわたらむ紅葉は雨と降るとも水はまさらじ

是貞のみこの家の歌合の歌　忠岑

山田もる秋のかり庵におくつゆはいなおほせ鳥の涙なりけり

題しらず　讀人しらず

ほにもいでぬ山田をもるとふぢ衣稻葉の露にぬれぬ日はなし

秋の歌　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　兼覧王

龍田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ

小野といふ所にすみ侍りける時もみぢを見てよめる　　　　貫之

あきのやま紅葉を幣とたむくれば住むわれさへぞ旅心地する

神なび山を過ぎて龍田川を渡りける時に紅葉の流れけるをよめる　　　　清原深養父

かみなびの山を過ぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　　　藤原興風

白波にあきの木の葉のうかべるをあまの流せる船かとぞ見る

龍田川のほとりにてよめる　　　　坂上是則

もみぢ葉の流れざりせば龍田川みづの秋をばたれか知らまし

二條の后の春宮の御息所と申しける時に御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる　素性

もみぢ葉のながれてとまるみなとには紅ふかき波やたつらむ（ぞたちけるィ）

業平朝臣

ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くくるとは

是貞のみこの家の歌合の歌　敏行朝臣

我がきつる方も知られずくらぶ山木々のこの葉の散ると紛ふに

忠岑

かみなびのみむろのやまを秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ

北山に紅葉折らむとてまかれりける時によめる　貫之

見るひともなくて散りぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり

龍田川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山にしぐれ降るらし

又はあすか川もみぢ葉流る　此歌不レ注ニ人麿歌一

戀しくば見てもしのばむ紅葉を吹きな散らしそ山おろしの風

秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬわれぞ悲しき

秋はきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみ分けてとふ人はなし

ふみわけて更にや訪はむ紅葉のふりかくしたる道と見ながら

秋の月やまべさやかにてらせるはおつる紅葉の數を見よとか

吹く風の色の千種に見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり

關　雄

霜のたて露のぬきこそよわからしやまの錦の織ればかつちる

雲林院の木のかげにたたずみてよみける　僧正遍昭

わび人のわきて立ちよる木の下は頼むかげなく紅葉散りけり

秋をおきて時こそ有りけれ菊の花移ろふからに色のまされば

人の家なりける菊の花を移し植ゑたりけるをよめる　貫之

咲きそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

題しらず　讀人しらず

さほ山の柞(ははそ)のもみぢ散りぬべみよるさへ見よと照らす月かげ

宮づかへ久しうつかうまつらで山里にこもり侍りけるによめる　藤原關雄

奥山のいはがき紅葉ちりぬべし照る日のひかり見る時なくて

題しらず　讀人しらず

たつたがは紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

此歌は或人奈良の帝(文武天皇)の御歌なりとなむ申す

花見つつ人まつ時はしろたへの袖かとのみぞあやまたれける

おほ澤の池のかたに菊植ゑたるをよめる

ひともとと思ひし花をおほさはの池の底にもたれか植ゑけむ

世の中のはかなきことを思ひける折に菊の花を見てよめる　貫之

秋の菊匂ふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

白菊の花をよめる　凡河内躬恒

こころあてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花

是貞のみこの家の歌合の歌　讀人しらず

いろかはる秋の菊をばひととせにふたたび匂ふ花とこそ見れ（かとぞ見るイ）

仁和寺に菊の花めしける時に歌そへて奉れと仰せられければよみて奉りける　平貞文

つかうまつるとなむ

是貞のみこの家の歌合の歌　紀友則

露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさしかるべく

寛平の御時后の宮の歌合の歌　大江千里

植ゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむとや見し

同じ御時せられける菊合に洲濱をつくりて菊の

花植ゑたりけるにくはへたりける歌

吹上の濱に菊植ゑたりけるをよめる　菅原朝臣

秋風のふきあげにたてる白菊ははなかあらぬか波のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經にけむ

菊の花のもとにて人の人待てるかたをよめる　友則

大和の國にまかりける時佐保山にきりのたてりけるを見てよめる　紀友則

たがための錦なればか秋霧のさほのやまべをたちかくすらむ

是貞のみこの家の歌合のうた　讀人しらず

秋霧は今朝はなたちそさほやまの柞(ははそ)のもみぢよそにても見む

秋の歌とてよめる　坂上是則

さほ山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

人の前栽(せんざい)に菊に結び附けて植ゑける歌　在原業平朝臣

うゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそちらめ根さへ枯れめや

寛平の御時菊の花をよませたまうける　敏行朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

この歌はまだ殿上ゆるされざりけるときに召しあげられて

秋の露色々ことにおけばこそやまの木の葉のちぐさなるらめ

もる山のほとりにてよめる　貫　之

しらつゆも時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

秋の歌とてよめる　在原元方

雨ふれどつゆももらじを笠とりの山はいかでか紅葉そめけむ

神の社のあたりをまかりける時にいがきのうち

の紅葉を見てよめる　貫　之

ちはやぶる神のい垣にはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり

是貞のみこの家の歌合によめる　忠　岑

雨ふればかさとり山のもみぢ葉は行きかふ人の袖さへぞてる

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　讀人しらず

散らねどもかねてぞをしき紅葉(もみぢは)は今はかぎりの色と見つれば

ちはやぶる神なびやまのもみぢ葉に思はかけじうつろふ物を

貞觀の御時綾綺殿の前に梅の木ありけり西の方にさせりける枝のもみぢそめたりけるをうへにさぶらふをのこどものよみけるついでによめる　藤原勝臣

おなじえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋の初なりけれ

石山に詣でける時音羽山の紅葉を見てよめる　貫之

秋風のふきにし日よりおとは山みねのこずゑも色づきにけり

是貞のみこの家の歌合によめる　敏行朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢにそむらむ　壬生忠岑

あきの夜の露をばつゆとおきながら雁の涙や野邊をそむらむ

題しらず　讀人しらず

古今和歌集　卷第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌　文屋康秀

吹くからに秋の草木の萎るればむべ山風をあらしといふらむ

草も木も色かはれどもわたつ海の波のはなにぞ秋なかりける

秋の歌合しける時によめる　紀淑望

もみぢせぬときはの山は吹く風の音にや秋をききわたるらむ

題しらず　讀人しらず

霧たちて雁ぞなくなる片岡のあしたのはらはもみぢしぬらむ

神無月(かみなづき)しぐれもいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびの森

ぜむとておはしましける道に遍昭が母の家に宿り給へりける時に庭を秋の野につくりて御物語のついでによみて奉りける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれば庭もまがきも秋の野らなる

ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも

題しらず　平貞文

今よりは植ゑてだに見じ花薄ほにいづる秋はわびしかりけり

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋の野のくさのたもとか花薄ほにいでてまねく袖とみゆらむ

素性法師

われのみやあはれと思はむ蛬なくゆふかげのやまとなでしこ

題しらず　讀人しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

もも草の花のひもとく秋の野におもひたはれむ人なとがめそ

月草に衣はすらむあさ露にぬれてののちはうつろひぬとも

仁和の帝みこにおはしましける時ふるの瀧御覽

物へまかりけるに人の家に女郎花うゑたりけるを見てよめる　兼覽王

女郎花うしろめたくも見ゆるかなあれたるやどに獨たてれば

寛平の御時藏人所のをのこども嵯峨野に花見むとてまかりたりける時歸るとて皆歌よみけるついでによめる　平貞文

花にあかでなに歸るらむ女郎花おほかる野邊にねなまし物を

是貞のみこの家の歌合の歌　敏行朝臣

何人かきてぬぎかけしふぢばかま來る秋ごとに野邊を匂はす

藤袴をよみて人に遣しける　貫之

やどりせし人のかたみか藤ばかま忘られがたき香に匂ひつつ

ふぢばかまをよめる　素性

朱雀院の女郎花合に詠みて奉りける　左のおほいまうち君

をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ

藤原定方朝臣

秋ならであふことかたき女郎花あまの川原におひぬものゆゑ

貫　之

たがあきにあらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移ろふ

躬　恒

妻こふる鹿ぞなくなる女郎花おのがすむ野のはなとしらずや

女郎花ふきすぎてくる秋風は目には見えねど香こそしるけれ

忠　岑

人の見ることやくるしき女郎花秋ぎりにのみたちかくるらむ

ひとりのみ眺むるよりは女郎花わがすむ宿にうゑて見ましを

萩が花ちるらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも
是貞のみこの家の歌合によめる　文屋朝康
秋の野におく白露はたまなれやつらぬきかくるくもの糸すぢ
題しらず　僧正遍昭
名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな
僧正遍昭が許に奈良へまかりける時に男山にて
女郎花を見てよめる　布留今道
女郎花うしとみつつぞゆきすぐる男山にしたてりとおもへば
是貞のみこの家の歌合の歌　敏行朝臣
秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに
題しらず　小野美材
女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさ（きイ）

是貞のみこの家の歌合によめる

秋萩のはな咲きにけりたかさごのをのへの鹿は今やなくらむ

昔あひ知りて侍りける人の秋の野にて逢ひて物語しけるついでによめる　　躬恒

あき萩のふるえにさける花みればもとの心はわすれざりけり

題しらず　　讀人しらず

秋萩の下葉色づくいまよりやひとりある人のいねがてにする

なきわたる雁の涙やおちつらむものおもふ宿の萩のうへの露

萩のつゆ玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ

ある人のいはくこの歌は奈良の帝の御歌なりと

をりてみばおちぞしぬべき秋萩のえだもたわ（とを）わ（をイ）における白露

夜を寒み衣かりがねなくなべにはぎの下葉もうつろひにけり

此歌は或人のいはく柿本人麿がなりと

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船は天のとわたる雁にぞありける

雁のなきけるを聞きてよめる　躬恒

うきことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋のよなよな

是貞のみこの家の歌合の歌　忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音にめをさましつつ

讀人しらず

おくやまに紅葉ふみわけなく鹿の聲きくときぞ秋はかなしき

題しらず

秋萩にうらびれをればあしびきの山したとよみ鹿の鳴くらむ

秋の野に人まつ蟲の聲すなりわれかと行きていざとぶらはむ
もみぢ葉の散りて積れる我が宿に誰をまつ蟲ここら鳴くらむ
蜩のなきつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける
ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

初雁をよめる　在原元方

待つ人にあらぬものから初雁のけさなく聲のめづらしきかな

是貞のみこの家の歌合の歌　友則

秋風に初雁がねぞきこゆなるたがたまづさをかけて來つらむ

題しらず　讀人しらず

我が門に稻おほせ鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁は來にけり
いと早も鳴きぬる雁か白露の色どる木々ももみぢあへなくに
春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりのうへに

月をよめる　在原元方

秋の夜のつきの光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

人のもとにまかれりける夜きりぎりすの鳴きけるを聞きてよめる　藤原ただふさ

蟋蟀(きりぎりす)いたくな鳴きそあきの夜のながきおもひはわれぞまされる

是貞のみこの家の歌合のうた　敏行朝臣

秋の夜の明くるもしらず鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ

題しらず　讀人しらず

秋萩も色づきぬればきりぎりすわがねぬごとや夜はかなしき

秋の夜は露こそことにさむからし草むらごとに蟲のわぶれば

君しのぶ草にやつるる故郷はまつむしの音ぞかなしかりける

秋の野に道もまどひぬ松蟲のこゑするかたにやどやからまし

これさだのみこの家の歌合の歌

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける

かんなりのつぼに人々集りて秋の夜をしむ歌よみけるついでによめる　躬恒

かく許(ばかり)をしと思ふ夜をいたづらに寐て明すらむ人さへぞうき

題しらず　讀人しらず

しら雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへみゆる秋の夜の月

さよなかと夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月渡るみゆ

是貞のみこの家の歌合によめる　大江千里

月見ればちぢに物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

忠岑

久かたのつきの桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ

題しらず　素性

今宵來む人にはあはじたなばたの久しき程に待ちもこそすれ

七日の夜の曉によめる　源宗于朝臣

今はとてわかるるときは天の川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

八日の日よめる　壬生忠岑

けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみ待ち渡るべき

題しらず　讀人しらず

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり

大かたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ

わが爲にくる秋にしもあらなくに蟲の音きけばまづぞ悲しき

物ごとに秋ぞ悲しきもみぢつつ移ろひゆくをかぎりと思へば

ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけり

秋風の吹きにし日より久かたのあまの河原にたたぬ日はなし
ひさかたの天の河原のわたしもり君渡りなばかぢかくしてよ
天の川もみぢを橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ
こひ戀ひて逢ふ夜は今宵天の川霧たち渡りあけずもあらなむ
寛平の御時七日の夜うへにさぶらふ男ども歌奉れと仰せられける時人にかはりてよめる　友則
天の川あさせしら波たどりつつ渡りはてねば明けぞしにける
同じ御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風
契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは
なぬかの日の夜よめる　凡河内躬恒
年ごとに逢ふとはすれど七夕のぬる夜の數ぞすくなかりける
たなばたにかしつる糸のうちはへて年のを長く戀ひや渡らむ

古今和歌集 卷第四

秋歌上

秋立つ日よめる　藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

秋立つ日うへのをのこども賀茂の川原に川逍遙しけるともにまかりてよめる　貫之

川風の涼しくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ

題しらず　讀人しらず

我がせこがころもの裾を吹きかへしうら珍らしき秋のはつ風

昨日こそさなへとりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風ぞ吹く

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月宿るらむ

隣より常夏の花をこひにおこせたりければをし
みてこの歌をよみて遣しける　躬恒

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしよりいもと我がぬる常夏の花

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひぢはかたへ涼しき風や吹くらむ

さぶらひにてをのこどもの酒たうべけるに召して郭公まつ歌よめとありければよめる　躬恒

郭公こゑもきこえず山びこはほかに鳴く音をこたへやはせぬ

山に郭公の鳴きけるを聞きてよめる　貫之

郭公ひとまつやまに鳴くなればわれうちつけに戀まさりけり

早くすみける所にて郭公の鳴きけるを聞きてよめる　忠岑

むかしべや今も戀しきほとゝぎす故郷にしもなきてきつらむ

郭公の鳴きけるを聞きてよめる　躬恒

ほとゝぎすわれとはなしにうの花の憂世の中に鳴き渡るらむ

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

月の面白かりける夜あかつきがたによめる　深養父

大江千里

やどりせし花たちばなも枯れなくになど郭公こゑたえぬらむ

紀貫之

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑに明くるしののめ

壬生忠岑

暮るるかとみれば明けぬる夏の夜をあかずとや鳴くやま郭公

紀秋岑

夏山にこひしき人や入りにけむ聲ふりたてて鳴くほととぎす

題しらず　讀人しらず

去年(こぞ)の夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ

郭公の鳴くを聞きてよめる　貫之

五月雨のそらもとどろに郭公なにをうしとか夜ただ鳴くらむ

夏山になくほとゝぎす心あらば物おもふわれに聲な聞かせそ
ほとゝぎすなく聲きけばわかれにし故郷さへぞ戀しかりける
郭公ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから
思ひいづるときはの山の郭公からくれなゐのふり出てぞ鳴く
こゑはして涙は見えぬほとゝぎすわが衣手のひづをからなむ
あしびきの山郭公をりはへてたれかまさると音をのみぞなく
いまさらに山へかへるな郭公こゑのかぎりは我がやどに鳴け

みくにのまち

やよやまて山郭公ことづてむわれ世のなかにすみわびぬとよ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　紀友則

さみだれに物思ひをれば郭公夜ぶかく鳴きていづち行くらむ
夜やくらき道やまどへる郭公わがやどをしも過ぎがてに鳴く

五月こばなきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや

讀人しらず

さつき待つ花たちばなの香をかげば昔のひとの袖の香ぞする

いつのまに五月きぬらむあしびきのやま郭公いまぞ鳴くなる

けさきなき未だ旅なるほととぎす花たちばなに宿はからなむ

音羽山を越えける時に郭公の鳴くをききてよめる　紀友則

音羽山けさ越えくればほととぎす梢はるかにいまぞなくなる

郭公の初めて鳴きけるを聞きてよめる　素性

ほととぎす初聲きけばあぢきなく主さだまらぬ戀せらるはた

奈良の石の上寺にて郭公の鳴くをよめる

いそのかみふるきみやこの郭公聲ばかりこそむかしなりけれ

題しらず　讀人しらず

古今和歌集　卷第三

夏　歌

題しらず　　讀人しらず

我がやどの池の藤波さきにけり山ほとゝぎすいつか來なかむ

この歌ある人のいはく柿本人麿がなり

卯月にさける櫻を見てよめる　　紀としさだ

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれて獨さくらむ

題しらず　　讀人しらず

さつきまつ山郭公うち羽ぶきいまもなかなむ去年のふるこゑ

伊勢

もを見てよめる　躬恒

とどむべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

やよひのつごもりの日雨の降りけるに藤の花を

折りて人に遣しける　業平朝臣

ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

亭子院の歌合に春のはての歌　躬恒

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

春のとく過ぐるをよめる　躬

梓弓春たちしよりとしつきの射るがごともおもほゆるかな

やよひに鶯の聲久しう聞えざりけるをよめる　貫　之

鳴きとむる花しなければ鶯もはてはものうくなりぬべらなり

やよひのつごもりがたに山を越えけるに山川より花の流れけるをよめる　深　養　父

花ちれる水のまにまにとめくれば山にも（ぞイ）春はなくなりにけり

春を惜みてよめる　元　方

をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　興・風

聲たえずなけや鶯ひとゝせにふたゝびとだに來べきはるかは

やよひのつごもりの日花つみより歸りける女ど

我が宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ

題しらず　　讀人しらず

今もかも咲きにほふらむたちばなのこじまのさきの山吹の花

はるさめに匂へるいろもあかなくに香さへなつかし山吹の花

山吹はあやなな咲きそ花見むとうゑけむ君（人のイ）がこよひこなくに

吉野川の邊に山吹の咲けりけるをよめる　　貫之

吉野川きしのやまぶき吹く風に底のかげさへうつろひにけり

題しらず　　讀人しらず

かはづなく井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

此歌は或人のいはく橘のきよともが歌なり

春の歌とてよめる　　素性

思ふどち春の山邊にうちむれてそこともいはぬ旅寐してしが

梓弓はるのやまべを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春の山邊にねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

吹く風と谷の水としなかりせばみやまがくれの花を見ましや

志賀より歸りける女どもの花山に入りて藤の花の下に立ちよりて歸りけるに詠みて送りける　僧正遍昭

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

家に藤の花さけりけるを人の立ちとまりて見けるをよめる　躬恒

鶯の花の木にて鳴くをよめる　躬恒

しるしなき音をもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらず　讀人しらず

駒なめていざ見にゆかむ故郷は雪とのみこそはなは散るらめ

散る花を何か恨みむ世の中にわが身もともにあらむものかは

　小野小町

花の色は移りにけりな徒に我が身世にふるながめせしまに

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとてしける時によめる　素性

をしと思ふ心は糸によられなむ散る花ごとにぬきてとどめむ

志賀の山越にをんなの多くあへりけるによみて遣しける　貫之

うつろへる花を見てよめる　躬恒

花みれば心さへにぞうつりけるいろには出でじ人もこそ知れ

題しらず　讀人しらず

鶯のなく野邊ごとに來てみればうつろふ花にかぜぞ吹きける

吹くかぜをなきてうらみよ鶯はわれやは花に手だにふれたる

典侍洽子朝臣

散る花のなくにしとまるものならばわれ鶯におとらましやは

仁和の中將の御息所の家に歌合せむとてしける

時によめる　藤原後蔭

花のちることやわびしき春がすみたつたの山のうぐひすの聲

鶯の鳴くをよめる　素性

木傳へばおのが羽風にちる花を誰におほせてここら鳴くらむ

春の歌とてよめる

いつ迄か野邊に心のあくがれむ花し散らずば千代も經ぬべし

題しらず　　讀人しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

花のごと世の常ならばすぐしてし昔はまたもかへり來なまし

吹く風にあつらへつくる物ならば此一本〔枝イ〕はよきよといはまし

待つひとも來ぬものゆゑに鶯のなきつる花を折りてけるかな

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　藤原興風

咲く花はちぐさながらにあだなれど誰かは春を恨みはてたる

春がすみ色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも

在原元方

かすみたつ春の山邊はとほけれど吹きくる風は花の香ぞする

故郷となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花は咲きけり

春の歌とてよめる　良岑宗貞

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

寛平の御時后の宮の歌合の歌　素性法師

花の木も今はほり植ゑじ春たてばうつろふ色に人ならひけり

題しらず　讀人しらず

春の色の到り到らぬ里はあらじ咲けるさかざる花の見ゆらむ

春の歌とてよめる　貫之

三輪山をしかもかくすか春がすみ人にしられぬ花やさくらむ

雲林院の皇子のもとに花見に北山のほとりにまかれりける時によめる　素性

いざけふは春の山邊にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは

久かたのひかりのどけきはるの日にしづ心なく花のちるらむ

春宮の帯刀(たちはき)の陣にて櫻の花の散るをよめる　　藤原好風

春風ははなのあたりをよきて吹け心づからやうつろふとみむ

櫻のちるをよめる　　凡河内躬恒

ゆきとのみ降るだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹くらむ

ひえに登りて歸りまうできて詠める　　貫之

山たかみ見つつわがこし櫻花かぜはこころにまかすべらなり（一本）

題しらず　　大伴黑主

はるさめの降るは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなければ

亭子院の歌合の歌　　貫之

さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに波ぞ立ちける

ならのみかどの御歌

とておろしこめてのみ侍りける間に折れる櫻の
散りがたになれりけるを見てよめる　藤原よるかの朝臣

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり

春宮の雅院にて櫻の花のみかは水にちりてなが
れけるを見てよめる　菅野高世

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ（見れイ）

櫻の花のちりけるをよめる　貫之

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花みるわれさへにしづ心なし

櫻のごと疾くちる物はなしと人のいひければよ
める

さくら花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ

さくらの花のちるをよめる　紀友則

雲林院にて櫻の花のちりけるを見てよめる　そうく法師

櫻散るはなのところは春ながら雪ぞふりつつきえがてにする

櫻の花の散り侍りけるを見て詠みける　素性法師

花ちらす風のやどりはたれかしるわれに教へよ行きて恨みむ

雲林院にて櫻の花をよめる　そうく法師

いざ櫻我もちりなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ

あひ知れりける人のまうできて歸りにける後に

よみて花にさしてつかはしける　貫之

ひとめ見し君もやくると櫻花けふは待ちみて散らばちらなむ

山の櫻を見てよめる

春がすみなにかくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを

心地そこなひてわづらひける時に風にあたらじ

古今和歌集卷第二

春歌下

題しらず　讀人しらず

春がすみたなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

待てといふに散らでしとまる物ならば何を櫻に思ひまさまし

のこりなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はての憂ければ

このさとに旅寐しぬべし櫻ばなちりのまがひに家路わすれて

うつ蟬の世にも似たるか花櫻さくと見しまにかつ散りにけり

僧正遍昭によみておくりける　惟喬のみこ

櫻花ちらばちらなむ散らずとてふるさと人のきても見なくに

題しらず　讀人しらず

ちりぬれば戀ふれど驗なきものをけふこそ櫻をらば折りてめ

折りとらばをしげにもあるか櫻花いざ宿かりて散る迄は見む

紀　在　友

さくら色に衣はふかくそめてきむ花のちりなむ後のかたみに

櫻の花のさけりけるを見にまうできたりける人

によみておくりける　躬　恒

我が宿の花見がてらにくる人はちりなむのちぞ戀しかるべき

亭子院歌合の時よめる　伊　勢

見る人もなき山里のさくら花ほかのちりなむのちぞ咲かまし

たれしかもとめてをりつる春がすみ立ちかくすらむ山の櫻を

歌奉れと仰せられし時によみてたてまつれる

櫻花咲きにけらしもあしびきの山のかひより見ゆるしらくも

寛平の御時后の宮の歌合の歌　友　則

みよし野の山邊にさける櫻ばな雪かとのみぞあやまたれける

やよひに閏月の有りける年よみける　伊　勢

さくらばな春くははれる年だにもひとの心にあかれやはせぬ

櫻の花のさかりに久しくとはざりける人のきたりける時によみける　讀人しらず

あだなりと名にこそたてれ櫻花としにまれなる人も待ちけり

かへし　業平朝臣

今日こずば明日は雪とぞ降りなまし消えずは有りとも花と見ましや

年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

渚の院にて櫻を見てよめる　　在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこころはのどけからまし

題しらず　　讀人しらず

いはばしる瀧なくもがな櫻花たをりてもこむ見ぬひとのため

山の櫻を見てよめる　　素性法師

見てのみや人にかたらむ櫻花手ごとに折りていへづとにせむ

花ざかりに京を見やりてよめる

見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞはるのにしきなりける

櫻の花の下にて年の老いぬる事を歎きてよめる　　紀友則

色も香もおなじ昔に咲くらめどとしふる人ぞあらたまりける

をれる櫻をよめる　　貫之

散ると見てあるべき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる

題しらず　讀人しらず

ちりぬとも香をだに殘せ梅のはな戀しきときの思ひ出にせむ

人の家にうゑたりける櫻の花咲きはじめたりけるを見てよめる　貫之

ことしより春知りそむる櫻花ちるといふことは習はざらなむ

題しらず　讀人しらず

山高み人もすさめぬさくら花いたくなわびそわれ見はやさむ

又は里とほみ人もすさめぬ山櫻

山櫻わが見にくればはるがすみ嶺にもをにもたちかくしつつ

染殿の后の御前に花瓶に櫻の花をささせ給へるを見てよめる　前のおほきおほいまうち君

るじかくさだかになむやどりはあるといひ出して侍りければそこにたてりける梅の花を折りてよめる　　貫之

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

水のほとりに梅の花の咲けりけるを詠める　　伊勢

春ごとにながるる川を花と見て折られぬ水にそでやぬれなむ

年をへて花の鏡となる水はちりかかるをやくもるといふらむ

家に有りける梅の花のちりけるをよめる　　貫之

暮ると明くとめかれぬ物を梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　讀人しらず

梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐとも形見ならまし　　素性法師

外にのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

梅の花を折りて人におくりける　　友則

君ならでたれにか見せむ梅のはな色をも香をも知る人ぞしる

くらぶ山にてよめる　　貫之

梅の花にほふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける

月夜に梅の花を折りてと人のいひければをると

てよめる　　躬恒

月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜の闇はあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくるる

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しくや

どらでほどへて後にいたれりければ彼の家のあ

雁の聲を聞きて越へまかりける人を思ひてよめる　凡河内躬恒

春くれば雁かへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし

歸る雁をよめる　伊勢

春がすみたつを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる

題しらず　讀人しらず

折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここにうぐひすの鳴く

いろよりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

梅の花を折りてよめる　東三條の左のおほいまうち君

うぐひすの笠にぬふてふ梅の花をりてかざさむ老かくるやと

題しらず　素性法師

題しらず　在原行平朝臣

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

寛平の御時后の宮の歌合に詠める（の歌イ）　源宗于朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

歌奉れと仰せられし時詠みてたてまつれる　貫之

我がせこが衣はる雨ふるごとに野邊のみどりぞ色まさりける

あをやぎの糸よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける

西大寺（にしのたほてら）のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか

題しらず　讀人しらず

百千鳥（ももちどり）さへづる春は物ごとにあらたまれどもわれぞふりゆく

をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

春たてど花もにほはぬ山里はものうかる音にうぐひすぞなく

題しらず　　　讀人しらず

野邊ちかく家居しをれば鶯のなくなる聲はあさなあさな聞く

春日野は今日はな燒きそ若草の妻もこもれりわれもこもれり

かすが野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜つみてむ

みやまには松の雪だにきえなくに都は野邊のわかな摘みけり

梓弓おしてはるさめ今日降りぬ明日さへふらば若菜つみてむ

仁和のみかど皇子におましましける時に人に若菜たまひける御歌

君がため春の野にいでてわかな摘むわが衣手に雪はふりつつ

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる　　　貫之

春日野の若菜つみにやしろたへの袖ふりはへて人のゆくらむ

かすみたち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける

春のはじめによめる　藤原言直

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな

春のはじめの歌　壬生忠岑

春きぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞおもふ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　源當純

谷風にとくる氷のひまごとにうち出づるなみや春のはつはな

紀友則

はなの香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

大江千里

鶯のたにによりいづるこゑなくば春くることをたれか知らまし

在原棟梁

題しらず　　讀人しらず

梅が枝にきゐる鶯はるかけて鳴けどもいまだゆきはふりつつ

雪の木に降りかかれるをよめる　　素性法師

春たてば花とや見らむしら雪のかかれる枝にうぐひすのなく

題しらず　　讀人しらず

心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

或人の曰くさきのおほきおほいまうち君の歌なり

二條后の東宮の御息所（みやすんどころ）ときこえける時正月（むつき）三日御前に召して仰言（おほせごと）ある間に日は照りながら雪の頭に降りかかりけるをよませ給ひける　　文屋康秀

春の日の光にあたるわれなれどかしらの雪となるぞわびしき

雪の降りけるをよめる　　紀貫之

古今和歌集 巻第一

春歌上

ふる年に春立ちける日よめる　在原元方

年の内に春はきにけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

春立ちける日よめる　紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

題しらず　讀人しらず

春がすみ立てるやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ

二條后の春のはじめの御歌

雪のうちに春はきにけりうぐひすの氷れる涙いまやとくらむ

後撰和歌集目錄

古今和歌集目錄

るかな。たとひ時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸たえず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長くつたはり、鳥の跡ひさしくとどまれらば、歌のさまをも知り、ことの心をも得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、いにしへをあふぎて、今を戀ひざらめかも。

さきの甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それがなかにも、梅をかざすよりはじめて、郭公を聞き紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また鶴龜につけて君をおもひ、人をもいはひ、秋萩夏草を見て妻をこひ、逢坂山にいたりてたむけを祈り、あるは春夏秋冬にもいらぬくさぐさの歌をなむ、えらばせたまひける。すべて千歌二十巻、名づけて古今和歌集といふ。かくこのたびあつめえらばれて、山下水のたえず、濱のまさごの數おほくつもりぬれば、今は飛鳥川の瀬になるうらみも聞えず、さされ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。それまくら言葉は春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ秋の夜の長きをかこてれば、かつは人のみみにおそり、かつは歌の心にはぢ思へど、たなびく雲のたちゐ、なく鹿のおきふしは、貫之らがこの世におなじくうまれて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。人麿なくなりにたれど、歌のこととどまれ

秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し。よめる歌おほくきこえねばこれかれかよはしてよく知らず。小野小町はいにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにてつよからず、いはばよき女のなやめる所あるに似たり。つよからぬはをうなの歌なればなるべし。大友黑主はそのさまいやし、いはば薪を負へる山人の、花の陰にやすめるが如し。このほかの人々、その名きこゆる、野邊におふるかつらのはひひろごり、林にしげき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひてそのさま知らぬなるべし。かかるに今すべらぎの天の下しろしめすこと、四の時九のかへりになむなりぬる。あまねきおほんうつくしみの波、八島のほかまで流れ、廣きおほん惠の陰、筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろもろの事を捨て給はぬあまりに、いにしへの事をも忘れじ、ふりにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にもつたはれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書の所のあづかり紀貫之、

たたむ事かたく、赤人は人麿がしもにたたむ事かたくなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、呉竹のよよに聞え、片糸のよりよりに絶えずぞ有りける。これよりさきの歌をあつめてなむ、萬葉集となづけられたりける。こゝにいにしへの事をも、歌の心をも知れる人、わづかにひとりふたりなりき。しかあれど、これかれ得たる所えぬ所、たがひになむある。かの御時よりこのかた、年は百年あまり、世はとつぎになむなりにける。いにしへの事をも歌をも知れる人よむ人多からず。今この事をいふに、つかさ位高き人をば、たやすきやうなればいれず。その外に近き世にその名聞えたる人は、すなはち僧正遍昭は、歌のさまはえたれども、誠すくなし。たとへば繪にかける女を見て、徒に心を動かすが如し。在原業平は、その心餘りて詞たらず、しぼめる花の色なくて、にほひ残れるが如し。文屋康秀は、詞たくみにてそのさま身におはず、いはば商人のよききぬ著たらむが如し。宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして始終(はじめをはり)たしかならず、いはば

のあしたに花のちるを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き、草の露、水の沫を見て、我が身をおどろき、あるは昨日は榮えおごりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは松山の波をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、曉の鴫のはねがきをかぞへ、あるは呉竹のうきふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨みきつるに、今はふじの山も煙たたずなり、長柄(ながら)の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心をなぐさめける。いにしへよりかく傳はるうちにも、奈良のおほん時よりぞひろまりにける。かの御(おほん)世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時におほきみつのくらゐ柿本の人麿なむ歌のひじりなりける。これは君も人も身を合せたりといふなるべし。秋のゆふべ龍田川に流るる紅葉をば、みかどのおほん目には錦と見給ひ、春のあした吉野山の櫻は、人麿が心(目イ)には雲かとのみなむ覺えける。又山邊赤人といふ人あり(けりイ)、歌にあやしくたへなりけり。人麿は赤人がかみに

れしからましといへるなるべし。六つにはいはひ歌。この殿はむべもとみけりさき草のみつばよつばにとのづくりせりといへるなるべし。今の世の中、色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出でくれば、色ごのみの家に、埋木の人しれぬ事となりて、まめなる所には、花薄（すゝき）ほにいだすべき事にもあらず成りにたり。その始を思へば、かかるべくなむあらぬ。いにしへの代々の帝、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々をめして、ことにつけつつ歌を奉らしめ給ふ。あるは花をこふ（もてあそぶイ）とて、たよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見たまひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さざれ石にたとへ、筑波山にかけて君を願ひ、よろこび身にすぎ、たのしみ心にあまり、富士の煙によそへて人をこひ、松蟲のねに友をしのび、高砂住の江の松もあひおひのやうに覚え、男山の昔を思ひ出でて、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。又春

くさまざまになりにける。遠き所も出でたつ足もとより始りて年月をわたり、高き山も麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまでおひのぼれるが如くに、この歌もかくの如くなるべし。難波津の歌は帝のおほん始なり。淺香山の言葉は、采女のたはぶれよりよみて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始にもしける。そもそも歌のさま六つなり。からの歌にもかくぞ有るべき。その六くさの一つにはそへ歌。おほささぎのみかどをそへたてまつれるうた、なにはづにさくやこの花冬ごもり今ははるべと咲くやこの花といへるなるべし。二つにはかぞへ歌。咲く花に思ひつぐ身のあぢきなさ身にいたつきのいるも知らずてといへるなるべし。三つにはなずらへ歌。君にけさあしたの霜のおきていなば戀しきごとに消えやわたらむといへるなるべし。四つにはたとへ歌。わがこひはよむともつきじありそ海の濱の眞砂はよみつくすともといへるなるべし。五つにはただごと歌。僞のなき世なりせばいかばかり人の言の葉う

古今和歌集序

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人事わざしげき物なれば、心に思ふ事を見る物きく物につけていひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌也。この歌天地(あめつち)の開けはじまりける時より出できにけり。しかあれども世に傳はる事は、久方のあめにしては、下照姫に始り、あらがねのつちにしては、すさのをの尊よりぞおこりける。ちはやぶる神代には、歌の文字も定らず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの尊よりぞ、三十もじあまり一もじはよみける。かくてぞ、花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心詞おほ

兼相將富餘金錢。而骨未腐於土中。名先滅於世上。適爲後世被知者唯倭歌之人而
已。何者語近人耳。義慣神明也。昔
平城天子詔侍臣令撰萬葉集。自爾以來時歷十代。數過百年。其後倭歌棄不被採用。
雖風流如野宰相。雅情如在納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。伏惟
陛下御宇于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲寂々閉口。砂
長爲巖之頌洋々滿耳。思繼既絕之風。欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則御書所預
紀貫之前甲斐少目凡河內躬恒右衛門府生壬生忠岑等。各獻家集并古來舊歌曰
續萬葉集。於是重有詔。部類所奉之歌勒爲二十卷。名曰古今倭歌集。臣等詞少春花
之艷。名竊秋夜之長。況乎進恐時俗之嘲。退慙才藝之拙。適遇倭歌之中興。以樂吾道
之再昌。嗟呼人麿既歿。倭歌不在斯哉。于時延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之
等謹序。

天子毎良辰美景。詔侍臣預宴筵者獻倭歌。君臣之情由斯可見。賢愚之性於是相分。所以隨民之欲擇士之才也。自大津皇子之初作詩賦。詞人才子慕風繼塵。移彼漢家之字化我日域之俗。民業一改倭歌漸衰。然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思獨步古今之間。有山邊赤人者。竝倭歌仙也。其餘業倭歌者綿々不絕。及彼時變澆漓人貴奢淫。浮詞雲興艶流泉涌。其實皆落其花孤榮。至有好色之家以此爲花鳥之使。乞食之客以此爲活計之媒。故半爲婦人之右。難進丈夫之前。近代存古風者纔二三人而已。然長短不同論以可辨。花山僧正尤得歌體。然其詞花而少實。如圖畫好女徒動人情。在原中將之歌。其情有餘其詞不足。如萎花雖少彩色而有薰香。文琳巧詠物然其體近俗。如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰。其詞華麗而首尾停滯。如望秋月遇曉雲。小野小町之歌。古衣通姬之流也。然艶而無氣力。如病婦之著花粉。大友黑主之歌。古猿丸大夫之姿也。頗有逸興而體甚鄙。如田夫之息花前也。此外氏姓流聞者不可勝計。其大底皆以艶爲基。不知歌之趣者也。俗人爭事榮利不用詠倭歌。悲哉悲哉。雖貴

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者。託其根於心地。發其花於詞林者也。人之在世不能無爲。思慮易遷。哀樂相變。感生於志。詠形於言。是以逸者其聲樂。怨者其吟悲。可以述懷。可以發憤。動天地。感鬼神。化人倫。和夫婦。莫宜於倭歌。倭歌有六義。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。若夫春鶯之囀花中。秋蟬之吟樹上。雖無曲折。各發歌謠。物皆有之。自然之理也。然而神世七代。時質人淳。情欲無分。倭歌未作。逮于素盞嗚尊到出雲國。始有三十一字之詠。今反歌之作也。其後雖天神之孫。海童之女。莫不以倭歌通情者也。爰及人代。此風大興。長歌短歌旋頭混本之類。雜體非一。源流漸繁。譬猶拂雲之樹。生自寸苗之煙。浮天之波。起於一滴之露。至如難波津之什獻
天皇。富緒川之篇報太子。或事關神異。或興入幽玄。但見上古歌。多存古質之語。未爲耳目之翫。徒爲教誡之端。古

の諸集に比する時は、高雅淸新の趣を有するに於て、其優劣元より同日の談にらず。

今本書を覆刻するに當りては、正保四年開版の八代集原本を底本とし、天和二年版の八代集抄を參考せる外、古今集には打聽、遠鏡、正義、後撰集には新抄本の類を參照して嚴密に校訂し、異說の如きも、すべて原本の形式に準じ、之を傍注する事となしたり。

明治四十四年五月

校訂者　塚本哲三

緒言

古今和歌集は勅撰歌集の權輿にして、醍醐天皇の延喜五年四月、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等が勅を奉じ撰出せるものなり。其收むる所二十巻一千一百首、技巧に流れず、粗朴に偏せずして、文質共に備り、古來斯道の典範として文人歌客の間に推賞せらる。香川景樹が此集を評して「自然の花」といへりしは、最も肯綮に中れる言ならん。

後撰和歌集は古今集の撰進に後るる事四十六年、村上天皇の天暦五年に、源順、大中臣能宣、清原元輔、紀時文、阪上望城の五人を梨壺に集め撰出せしめられし所といふ。鴨長明の無明抄に「後撰集はよろしき歌古今に取り盡されて後いくほども經ざれば歌得難くて姿を選ばずして心を先とせり」といへるが如く、古今集に比しては、情詞共に稍劣れるの觀無き能はずと雖も、之を新古今集以後

古今和歌集　全

後撰和歌集　全